

神様から力を貰ったので好き勝手に生きる

塩レモン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

善人が裏切られて死んで、神様から力貰ってワンパンマン世界で好き勝手に生きる。それだけ。

目次

第一話	1
第二話	7
第三話	13
第四話	19
第五話	25
第六話	33
第七話	41
第八話	48
第九話	55
第十話	64
第十一話	71
第十二話	79
第十三話	84
第十四話	90
第十五話	101
第十六話	112
第十七話	120
第十八話	130
第十九話	139
第二十話	146
第二十一話	155
第二十二話	163

第一話

神は言った。俺の人生は正しいものだったと。間違っているのは世界だと。子供のうちからヒーローというものに憧れ、弱者を守り理不尽な物に立ち向かった。

世界中を周り、苦しんでいる人々を助けた。手を伸ばし続けた。

でも、最後には裏切られた。俺は大罪人として処刑された。最初はそれすらも受け入れようとしたが、絞首への階段を上る時に俺が見たのは、助けた人々の怨嗟の声と侮蔑の目だった。余計なことをしてくれたと、守る力がないならでしゃばるなど、石を投げつけ、罵声を浴びせた。

なんだこれは。俺が間違えたのか？俺の行動は正義ではなかったのか？

助けてと言ったのはお前らだろうが。

そうして、俺は世界に絶望し死んだ。そしてその先で神に出会った。輪郭のぼやけた男にも女にも見えるそれは自らを神と名乗ったわけではなかったが、それは神であると俺は理由もなく確信していた。

神は言った。お前は間違っていない、世界がお前の正義を認めなかっただけだと。

神は人間が嫌いだと言った。だが、俺のことは好ましいと話し、神は俺に力を授けた。神は動けない自身の代わりに俺に世界を滅ぼしてもいいと言った。好き勝手に生きてその過程で世界を滅ぼしてもいいと。

そして俺は転生した。神としての力を貰い、好き勝手に生きるために。

けたたましいサイレンの音が街に響き渡る。ビルの屋上から見下ろす先には多くの人々が我先にと周りを押しつけて避難している。

『緊急避難警報！緊急避難警報！災害レベル竜！F市の住民は急いで避難してください！繰り返します。災害レベル竜！急いで避難をお願いします!!』

「はは、おーおー醜いねえ。誰も他人のことなんか考えちゃいない。自分が助かることしか頭にない」

いくつかの建物が倒壊し混乱する街を見下ろすのは整った顔立ちに褐色の肌をした一人の青年だ。青年の名はシンラと言う。シンラの隣には薄汚れたジャージに、薄汚れたマント、おもちゃの王冠を被った中年の男が立っている。

「んー？C、B級が数十人に、A級が数人か。S級はあと少しかな」
その時、シンラの隣に影が現れ、上空から巨体が降ってきた。ドン、と大きな音を立てて着地したそれはシンラの方を向き、ニヤリと笑った。

「ククク、よおボスさん。来てたのかよ。まさか俺の楽しみを奪ったりはしねえよなあ？」

「もちろんだよ。阿修羅カブト。雑魚ヒーローどもが到着したようだから好きに虐めてやれ」

茶色い巨体に鎧のような甲皮、カブトムシを思わせるツノを持った阿修羅カブトと呼ばれた怪物はシンラのその言葉に再び口元を歪ませ、ビルから飛び立っていった。

「さてさて、もう少し観戦するとしますかね」

ま、5分も待つか分からないけど。そう思うシンラの視線の先では阿修羅カブトが集まったヒーローたちを軽々と殴り飛ばしていた。すでに何人かは逃げ出しているようで、数十人いたヒーローは残り10人といったところか。

「ぐああああ!!?」

「ひいひい!!た、助けてええー!」

ヒーローたちには既に戦意と呼べるものは欠片も残っていなかった。目の前にいる怪人が自身の想像を遥かに超える怪物だと理解し

てしまったからだ。

ヒーローたちは次々に倒れ、最後の一人が阿修羅カブトの突進によって吹き飛ばされた。

「ああ？」

全てのヒーローを片付け、暇になった阿修羅カブトが逃げ出したヒーローを追いかけようとした瞬間、阿修羅カブトの肩に衝撃が走った。見ればそこには刀の切り傷が入っており、阿修羅カブトはその傷をつけた下手人を睨む。

「チツ。硬えな。だが、斬れねえことはねえ」

S級4位、アトミック侍は阿修羅カブトから目を離さずに、刀を握りしめる。

シンラは阿修羅カブトとアトミック侍の戦闘を見ながら、隣にいる中年の男に話しかける。

「俺はそろそろ帰るから。あとは適当によろしくね」

「分かりました」

自宅であるA市のマンションへと帰ったシンラは、上着を脱ぎ捨てて寝室へと向かう。そこには2人の女性がいた。妖艶さを纏う黒髪の美女、B級1位ヒーロー地獄のフブキ、もう一人は黒髪に水色のメツシユの入ったポニーテールの少女、B級74位ヒーロー三節棍のリー。2人は衣類を着ておらず、一糸纏わぬ産まれたままの姿だった。しかし2人とも自身の体を隠す素振りも見せずに、その乳房や陰部を曝け出している。

2人は帰ってきたシンラを見つけると、ぱあ、と花が咲いたように笑顔を浮かべた。すぐさまシンラのそばにやってきた二人の目はトロンと蕩けており、赤みがかった顔は妖艶で扇情的だった。

「おかえりなさい。遅かったじゃない。さあ、早くこっちにきて。も

う我慢できないわ」

「ハア、わ、私もです。体が疼いて…もう立っているのも限界です…」
シンラはそんな2人の肩に手を回し、奥の寝室へと歩を進めた。

大きなベッドへと座ったシンラは徐に服を脱ぎ出す。健康的な褐色の肌に鍛え上げられた筋肉が姿を見せ、ズボンを脱ぐと既に勃起し、成人男性の腕ほどもある長大な肉棒がそそり立った。フブキとリリーはそれを恍惚とした表情で見つめごくん、と生唾を飲み込む。

「…はむっ！」

リリーはその肉棒にむしゃぶりつき、ベロベロと赤い舌を使い隅々まで舐める。右手で肉棒を持ち、左手で自身の秘部を慰める。

フブキはまず、シンラの唇に吸い付いた。シンラはフブキの豊満な胸を揉みしだき、その唇を受け入れる。

「んっ、ふ、…ああっ、ちゅう」

お互いの舌を絡め、唾液を吸い、口腔を蹂躪する。いやらしい水音が鳴り、シンラは右手をフブキの秘部へと近づけて指を膣内へと突き入れた。

「んおっ!? あっ！」

クチュクチュと指を動かし、ぷつくらと突起した桃色の乳首へと吸い付く。

「ああっ！イ、イク…」

「おっと、危ない。3日ぶりだからな。俺も挿れたい気分なんだよ」

リリーから離れ、押し倒したフブキの秘所に鋼の如き肉棒を当てがう。

「ああ、きて。早く…」

勢いよく腰を突き、膣内を進んだ肉棒がフブキの子宮の入り口を容赦なく叩いた。

「アアアアアア!! アッ! オオオ！」

絶叫とも取れる獣の如き嬌声が響いた。情欲に支配された雌の顔をしたフブキは下品に舌を突き出し、足でシンラの腰に抱きつく。

「オラッ！」

シンラはフブキの腰をガツチリと掴み、強烈なピストンを繰り返す。シンラの腰が打ち付けられる度にフブキの柔肌は波を打ち、ビクビクと痙攣しだした。

「ンオツ!?アアアア!!ヒイヒイヒイヒイ!!!イクーイツちやうー!」

そしてそのままシンラは一層強く腰を押し付け、フブキの子宮に勢いよく射精した。

「アアアアアアアアアア!!出てるウーこ、これダメエーお、おかしくなりゆうう!!?」

卑猥な濁音と共にフブキに押し寄せられた快樂がまるで電撃のようにフブキを貫き、意識を侵食していく。

30秒後、ようやく射精を終えたシンラは白目をむき未だに痙攣しているフブキから肉棒を抜き、シンラとフブキの性行を見ながら自身を慰めていたリリーへと向き直る。

「はあー、はあー。シ、シンラ様。私も…」

「ああ。安心しろ、リリー。今夜は寝かさないからよ…」

シンラは息を荒くさせ股を下品に開いているリリーに覆い被さった。

「んほおお!?きたアア!!シンラ様のおちんぽお!!」

小さな体で抱きついてくる彼女をシンラは押さえつけ、種付けプレスを行う。アへ顔のままだらしなく開いているリリーの口に舌を入れ、歯の奥まで舐め回す。

「んちゅ、ンンンン!ンアツ、レロ、アア気持ちいい!!もっともっと愛してくださいい!」

パンパン!と音を立てて行われる暴力的なまでのピストンは一突きされる度にリリーから快樂の悲鳴を上げさせる。

最後の強烈な一突きと共にリリーの子宮に精が吐き出された。

「アアアアアアアツ!!イグウウウウウ!!!」

足でシンラの身体にしがみつき、吐き出された精を飲み込むリリー。

1分後、たつぷりと種付けされたリリーはヒクヒクと痙攣しながら秘部からゼリーのようにドロドロの白濁液を溢れさせていた。

リリーとの交尾を終えたシンラは再び力無く横たわっているフブキに覆い被さり、彼女の意識の無い身体を貪り始めた。

第二話

朝、目覚めたシンラは隣で寝息を立てているフブキとリリーを一瞥し、服を着てマンションの外へと出る。ジャケットにジーンズというごくごく普通の服装をしたシンラは鼻歌を歌いながら歩いていく。

その高い身長と端正な顔立ちはすれ違う人々の視線を引きつけ、目があった女性は顔を赤くして目を逸らす。

「…ああ、お前か。…今から行くところだから我慢しとけ。そうだ、あの後はどうなった?…ふむ、決着つかずか。ああ、全然構わないさ。早く終わらせちまったらつまらないだろう?」

楽しげに話すシンラの肩には一匹の蚊がとまっている。シンラは路地裏へと入り、立ち止まる。一瞬、通行人の影と重なり、通り過ぎた時には既に路地裏にシンラの姿は無かった。

瞬間移動、所謂テレポートを使いシンラはZ市の山奥に存在する建物に来ていた。不規則な配置の窓が特徴的なその建物の名は『進化の家』。

進化の家へと移動したシンラは備え付けられているソファに座り、白衣を着たエリート風の眼鏡をかけた男へと話しかける。進化の家の設立者であり、人類の進化を目的とした研究を行っているジーナス博士だ。

「どうだ、ジーナス。研究の方は?」

「まずまずだな。やはり一般人よりも頑丈なヒーローを使えば、実験の捗りも段違いだ。君のおかげで阿修羅カブトも制御できている事だしな。…そういえば昨日、F市でヒーローと交戦したらしいが…」

「ああ、引き分けたらしいけどね」

「…あの阿修羅カブトが倒しきれないとは、S級ヒーローとはやはり

興味深いな…」

「つて言っても、複数人がかりでやっとだつたみたいだけどねえ」

シンラとジーナスの会話に新たに絡みつくような甘美な声が混ざる。ソファに座っているシンラの後ろからシンラにもたれかかるように現れた

それは鉤爪のような腕を器用に使いシンラの頭に抱きついている。

白い肌に豊満な胸、顔つきこそ人間の美女と言つていい容姿だが、鉤爪のような手足に、黒い模様、蚊を連想させる頭部や羽といったものが、彼女を人外たらしめる異質さを放っていた。

「モスキート娘か」

「ええ♡会えて嬉しいわ」

「2日前に会つてるだろ」

大きな胸でシンラの頭を受け止める怪人の女性、モスキート娘は「気持ちの問題よ」と言いながらも顔を綻ばせる。

「相変わらずだな。…それで、複数人がかりでやっと…とは？」

「最初の内は阿修羅カブトとサムライが様子見してて、阿修羅カブトが阿修羅モード使い始めた頃に新しいS級の援軍が来て、さすがの阿修羅カブトも攻めきれなかつたみたいよ」

「ほう」

「それにしてもS級ヒーローつて変なのが多いのねえ。サムライにやたら速いやつ、筋肉ダルマに死んでも生き返つた奴までいたわ。不死身なんて寧ろヒーローより怪人に見えちゃった」

「……不死身だと？」

モスキート娘は何やら考え込んでいるジーナスを置いて、シンラの耳元へと顔を寄せる。

「…ねえ、早く行きましょう」

「フツ」

シンラはモスキート娘に誘導され、地下に存在する自身の部屋へと歩を進めた。

部屋へと入った瞬間にモスキート娘はシンラの胸板に寄りかかる。情欲に満ちた瞳でシンラを見上げ、首に腕を回し、シンラの唇に自身を重ねる。

「ん、チュウ。れる…」

必死に人の血を吸う蚊のように、モスキート娘はシンラの口に吸い付く。舌を絡め、唾液が溢れるのも気にせずお互いの口を貪り合う。

「…ふはっ、フフ、凄いわ。キスだけでイっちゃいそう」

ようやく離れた2人の口からは銀色の糸が繋がっており、モスキート娘はそれすらも愛おしそうに舐めとった。

舌舐めずりをしたモスキート娘は部屋に備え付けられているベッドに座り、ムチムチとした肉付きの良い脚をM字に開きシンラを妖艶に見つめる。

一瞬、モスキート娘が震えるとその身体に変化が起こる。

タイトのようにぴっちりとしていた胸から綺麗なピンク色の乳首が、誘うように開かれた股には同じようにピンク色のすじ、女性器が現れた。

怪人である故に服など着ない彼女だが、乳首や女性器といった部分は普段は体内へと隠している。

「んっ♡」

シンラはそんな彼女の誘いに乗り、服を脱ぎ、再びキスをする。

そして、両手でモスキート娘の両脚を掴み、己の肉棒を既に愛液が溢れ濡れている膣へと当てる。くちゅ、という粘膜同士が接触する淫靡な音と共にシンラのモノはモスキート娘の中にゆつくりと挿入されていく。

「ああん！入って…きたア。やばっ…いい、これ…カリが引つかかって…」

ゆつくりと時間をかけてシンラの巨大なモノを根元まで飲み込んだモスキート娘は、身体を貫くような快楽によって上半身をしならせ

る。

「おいおい、まだ挿れただけだぞ。…これからだ…ろっ！」
「ンヒィィ!!!」

急に訪れた衝撃と快感にモスキート娘は嬌声をあげる。

シンラはモスキート娘の乳房を鷲掴み、胸と乳首を愛撫しながら連続で腰を打ち付ける。

「んおっ!? ああっ!? んぎっ!? ああん!!!」

シンラの肉棒によって子宮口を抉られる度に、膣内の壁をカリで擦られる度に嬌声を漏らすモスキート娘は身体を震わせながらも必死にシンラの首に回した腕を離そうとはしなかった。

「ああっ!? そ、そこダメッ!」

「どこだって?」

「ち…乳首ィ♡!?!」

「正解」

シンラは腰を打ち続けながら、標的をモスキート娘の乳首へと変えた。

右手で右胸を揉みながら人差し指と親指でピンツ、と勃起した乳首を扱く。

そして、左手でモスキート娘を支えながら左胸にむしゃぶりつく。ペロペロ、チュウチュウ、と胸の頂点で主張している乳首を舐め、吸い上げる。

モスキート娘はそのあまりの快楽に身体を捻るが、シンラは体勢をモスキート娘に覆いかぶさるように変え、体重をかける。

左手で逃げられないようにガツチリと抱きしめて固定する。

「アアー…ッ!!! えああっ、オオオ!? んほおお!? ヒィィィィ!!! イツ、イキじぬう! しんじやうう!!!」

モスキート娘は舌を伸ばし、暴れるが、シンラの身体はビクともしない。

しかしそれでも暴力的なピストンと乳首への愛撫は止まらない。

身体中を延々と駆け巡る快楽のスパークに既にモスキート娘の理性は吹っ飛び、よだれを垂らし、シンラの身体にしがみつくのみだ。

シンラはモスキート娘の乳首から口を離し、アヘアへと呻き声を漏らす唇に吸い付けた。

「ンンンンンツツ!!!」

シンラの舌になす術もなく口内を蹂躪され、ゴリゴリと膣内と子宮を侵されるモスキート娘の頭と背中にシンラは腕を回し抱きしめる。

「…出すぞ」

「はえ?」

ぼそつ、と小さな声で呟いたシンラはラストスパートのように一際強くピストンを叩き込み、大量の子種を注いだ。

「は…ああつ…!!!?んほおおおおおおお!!!アヒイイ、アアアアアアアアアアツ!!!」

ゴクゴク、とモスキート娘の膣はシンラの精を旨そうに飲み干している。

モスキート娘のお腹はまるで妊婦のように膨らみ、秘所からは溢れ出した精液が漏れている。

「…んちゅ、んん。れる」

モスキート娘はシンラとキスをしたまま白目を剥き、気絶する。気を失っても、シンラと舌を絡め合いながら、ビクビクと痙攣していた。

彼女の肉壺もまだ、きゆうきゆうとシンラのモノを離すまいと、締め付けている。

シンラはゆっくりと肉棒を抜き、愛液と精液でベトベトになった己のモノをモスキート娘の口に突っ込み、無意識に動く舌と喉奥を使い、扱き始める。

頭を掴み、まるでオナホのように無遠慮に腰を動かし、二度目の射精を行う。

口いっぱいに放たれた精をモスキート娘は白い喉を動かし嚥下する。

たっぷり数十秒続いた二度目とは思えない射精を終え、シンラはモスキート娘の隣に寝っ転がる。

「ふう、ちよつと感度上げすぎたかな」

シンラは神の力によって様々な能力が使える。

今回、ラストスパートをかけたあたりから感覚強化の力によってモスキート娘は感度が数十倍にされていたのだ。

ちなみにシンラは数十倍どころか数千倍、数万倍以上にまで感度を上げることができる。が、それをしたら本当にイキ死んでしまうので、気に入っている奴には使わない。

シンラは仰向けになっているモスキート娘の胸を枕に、昼寝を開始する。昨日はフブキとリリーをずっと抱いていた為にほとんど寝ていないのだ。

まあ、別に寝なくても平気だが、シンラ自身が睡眠が好きなのでよく昼寝などはする。

「アーンッ♡」

とてつもなく柔らかい枕だったが、寝返りを打つといやらしい声が漏れるのが欠点だ。

シンラは目を覚ませば二回戦を始めようと考え、再び寝返りを打った。

第三話

B級1位ヒーロー、地獄のフブキがシンラと出会ったのは一年前のことだ。

B級1位となった彼女はB級以下のヒーローを部下として募り、フブキ組という派閥を作った。彼女自身A級ヒーローと比べても遜色のない実力を有してはいるが、A級1位のアマイマスクには敵わないと確信しているがために、B級1位の座に居続けた。

そしてそうまでして、B級1位の座を守り続けるのには理由がある。

彼女の実姉であり、S級2位ヒーロー、戦慄のタツマキ。最強の超能力者である彼女とフブキは姉妹ということもあつて比べられることが多かった。

頭脳、体力、そして超能力。トップに立てる才能と能力を持っているという自負は姉という強者にいとも簡単に打ち砕かれた。

姉と自分の力の差のコンプレックスに悩まされながらも、フブキはタツマキの後を追いヒーロー業界へと入った。

追いつけることなどないと心の奥底で理解していながらも、姉の背中を追い続けたのは、自身のプライドもあるだろうが、憧れの姉を見失うことが何よりも怖かったからだ。

そうしてフブキはB級のトップに上り詰めたが、心の中の靄は晴れなかった。

B級1位としての優越感も、部下の向けてくる尊敬の眼差しも、フブキの心を満たすことはなかった。

そんなある日にフブキは部下たちを解散させた後に偶々目についたバーへと入った。普段はそのような店に入ることがないフブキだが、その日は疲れていたのか特に考えることもなくなるとなく入店した。深夜だというのに意外と客が多く、話し声も聞こえる。

空いていた端のカウンターへと座り、適当にお酒を頼む。

グラスを傾けて1時間が経ち、店にいた客が少なくなつた頃、フブキの元にガラの悪い集団が現れた。ニヤニヤと笑いながらフブキに

迫る集団は一見ただのチンピラ。

彼女がその気になれば指先ひとつで容易く吹き飛ばせる相手だ。

『ひひっ、これはB級1位ヒーローのフブキ様じゃねえか。こんなところで飲んでて暇なのか?』

『ヒーローってのは俺たち市民の寄付金によって活動してんだろ? 1人寂しく飲んでないで、俺たちにお酌でもしてくれよ』

下卑た視線でフブキを舐め回す男たちにフブキは軽く超能力でも見せてやれば逃げ出さだろうと思ったが、タチの悪いことに、男のうち1人がスマホで撮影をしていたのだ。

ヒーローという職業の手前、絡んできいているとはいえ一般人に、それも店の中で危害を加えるわけにはいかなかった。

もちろん、触れるなどの接触をしてきた瞬間に問答無用で吹き飛ばすつもりでいたが。

横目で睨みつけるフブキに抵抗できないとでも思ったのか、手を伸ばしてくる男。酒を飲んでいいることもあり、苛つきを覚えているフブキがその男に死なない程度の超能力をぶつけようとした瞬間。

『ダサい真似はやめとけよ。男としての程度が知れるぜ』

フブキに手を向けた男の腕を掴み、フブキを庇うように1人の男が現れた。高い身長に健康的な浅黒い肌、端正な顔立ちをした短髪の青年は男たちを睨みつける。

『な、何だテメエ。文句あんのか』

『文句? 大有りだね。いや、文句というより哀れみかな。正々堂々と女を誘えない腰抜けのブサイクなんて哀れで仕方がない。それにそんな奴らに絡まれる彼女はもつと気の毒だ』

青年、シンラの巨軀に一瞬うろたえた男だったが、シンラの侮蔑の視線と言葉を受け、怒りで身体を震わせる。

『テメエー! ぶっ殺され、ツ!?! ぎゃあ!?!』

シンラに殴り掛かろうと右腕を振りかぶるが、突如掴まれていた左腕に強烈な痛みが走り、男はその場に蹲る。

『なっ!?!』

そんな男の様子に周りの仲間たちは驚く。男たちから見れば、シンラは優しく腕を掴んでいるようにしか見えず、とても力を入れているようには見えなからだ。

『スマホの映像も削除しておいたよ。次は花や動物でも撮ればいいんじゃない?その性格も少しはマシになると思うよ。多分』

『えっ、あっ!俺のスマホ!いつのまに!?!』

シンラの手にはいつのまにか録画をしていた男のスマホが握られており、それを軽く男に投げ返す。

優しい口調とは裏腹に鋭く睨みつけてくるシンラの不気味さに男たちは恐怖し、顔を青ざめながら逃げ出した。腕を解放された男も腕を押さえながら後を追いかける。

『…大丈夫ですか?』

『え、ええ』

突然の事に置いていかれ、呆けていたフブキはシンラの急に丁寧になった言葉遣いに詰まりながらも答える。

シンラはフブキに微笑みかけると一礼して店を出ようとする。フブキはとっさにその手を掴み呼び止めてしまう。

『…』

『あつ、えつと…た、助かったわ。ありがとう』

自分一人で解決できた事態とはいえ助けられたのは事実。フブキはシンラに感謝の言葉を述べ、何かお礼をとシンラに告げる。

プライドの高い彼女は相手が誰であったとしても借りの作りっぱなしはしないのだ。

フブキはシンラに酒を一杯奢り、一緒に飲み直した。

少しの沈黙に後に何か会話をしようと焦ったフブキはつい、愚痴を零してしまう。姉との実力差、報われない努力、満たされない心。

お礼として奢った相手に話すにはあまりふさわしくない会話だが、アルコールの入った頭は普段貯めに貯めていた不満を崩壊したダムのように溢れ出させた。

そうしてあらかた口にし終えた後に、しまったと今更ながら思った

瞬間、頭をくしゃ、と優しく撫でられた。

『フブキは頑張ってるよ』

『え…』

微笑みと共に向けられる甘美な声がフブキの胸にストンと落ちる。

『私…頑張ってる？』

『うん。君は努力家でとても素晴らしい人だよ』

『でも…』

『フブキみたいな頑張り屋さん、俺は見たことないよ』

頬が熱くなり、心臓が強く脈打つ。

しかし目の前の男から目を離せず、そのその言葉に耳を傾ける。

『フブキはすごいな。よく頑張ったな』

『あ…』

染み渡るように心に暖かさが広まっていく。空っぽだった胸がその声によって満たされていくのをフブキは感じた。

そうだ、自分は頑張った。努力したのだ。フブキはただ、それを認めて欲しかっただけなのだ。褒めて欲しかっただけなのだ。

涙を流し、俯くフブキにシンラは胸を貸し、彼女が泣き止むまですっと頭を撫で続けた。

一時間後、ようやく泣き止んだフブキはシンラに送ってもらい、自宅へと帰った。

ベッドの上でフブキはまだアルコールの抜けきっていない頭でシンラのことを思い出す。頭を撫でられたこと、触れ合った手のこと、そしてかけられた言葉が心から離れず、フブキは顔を紅潮させ、だしなく笑った。

その様はどう見ても恋する乙女の顔だった。

それから、フブキは時間を見つけてはシンラと会うようになった。

共に買い物に出かけ、食事をし、遊びに行った。

シンラに会うたびにフブキは怪人を倒したことや、超能力の特訓のことなどを自慢する子供のように話した。そしてシンラも聞きたびに彼女を大袈裟なほどに褒めた。

彼だけにしか見せない素顔があり、彼に褒められるたびに心を奪われていった。

そして、やがて彼へと向ける恋心に気づき、シンラに褒められることに快楽を覚え、フブキはシンラに褒められることのみを考えるようになった。

会合が20回を超えた頃、フブキはどうすればシンラの一番になれるのかを考えていた。

そんな時だ。フブキは突然シンラにキスをされた。それは唇が触れ合うだけのものだったが、フブキの心は熱く燃え上がった。

そして、シンラは彼女を強く抱きしめた。フブキは彼を受け入れ、本当に幸せそうに笑った。

彼女がシンラの弧を描くように歪んだ口元に気付くことはなかった。

その日、フブキはシンラに純潔を捧げた。

何度もキスをして、何度も身体を重ねた。耳元で囁かれる甘い声がフブキの蕩けた脳味噌に絡みつき、彼女を完全に墮とした。

フブキはシンラに全てを捧げた。自分も、力も、誇りも、部下さえも。

それも全て彼に褒められたいが為に、彼の一番になりたいが為に、今日も彼女はシンラの為に努力をする。

フブキはシンラの認めた努力家なのだから。

じゅぽ、じゅる、と淫靡な水音が部屋に響く。

フブキはシンラの怒張した肉棒を美味そうにしゃぶっていた。自身の顔よりも大きいそれを隅々まで舐めまわし、大口を開けて頬張る。

「んちゅ、はぁ、れろ」

一度根元まで飲み込み、唾液で濡れた肉棒をその大きな胸で挟み込む。フブキの巨乳でも包みきれずに、はみ出している亀頭にフブキは吸いつきながら胸を上下に扱く。

「くっ、出すぞ。フブキ」

シンラはフブキの頭を押さえ、勢いよく射精した。フブキは口をパンパンに膨らましながらかも、一滴も溢さないようにその精を飲み干した。

「はぁ、はぁ、気持ちよかった？」

「ああ、最高だったよ。流石だな」

笑いながらフブキの頬を撫でるシンラ。フブキはそれだけで身体をゾクゾクと震わせ、股から愛液を溢れさせた。

そして、椅子に座っているシンラに抱きつき、シンラの肉棒と己の蜜壺を合わせた。ゆっくりと腰を下ろし、ズプズプと中に入ってくる愛すべき感触に心を満たされる。

「ひゃ、ああ。好きい、大好きい。：ずっと、あなたの物でいたい。あなたさえ居てくれたら私はもう何も要らない。だから…」

シンラの首に腕を回し、自ら淫らに腰を振るフブキは幸せそうに笑った。

「もっと、頑張るわ♡」

第四話

「フフ、ハハハ」

「どうした？何か面白いことでもあったのか？」

楽しげに笑うシンラにジーナスは問いかけ、シンラはワイングラスを傾けながら、よくぞ聞いてくれたとばかりに答えた。

「この前乙市に調査に行かせた獣王たちがやられただろうか？」

「…ああ」

「その時に見つけたあのハゲ頭の男、ククツ、面白いな」

乙市郊外のゴーストタウンには化け物がいるとの噂が数年前からあった。怪人の組織が存在するという噂もあるが、ジーナスは謎の化け物の方に興味を持ち、自身の手で作り上げた生物兵器たちを調査に向かわせたのだ。

しかし、結果は全滅。唯一、回収に成功したアーマードゴリラの言葉と小型追跡カメラの映像によれば2人組の人間にやられたようだ。

最初は金髪のサイボーグと思われる青年と戦闘になり、アーマードゴリラが半壊させられたものの、ジーナスの新たな研究によってバージョンアップされた獣王が金髪のサイボーグを倒したのだが、止めを刺す直前に現れた頭のハゲた男のやる気のなさそうなパンチ一発で獣王の身体は吹っ飛んだ。

その男は災害レベルで言えば最低でも鬼はあったはずの獣王を瞬殺し、さらに共に調査に来ていたカマキュリー、ナメクジャラス、カエル男、グランドドラゴンも片手間に倒していった。

その男がゴーストタウンの化け物かは定かではないが、ジーナスはその男の強さに興味を持ち、サンプルとして捕獲しようと考え、シンラに協力を申し出たが、面白そうだからもうちょっと様子を見たい。とのことではシンラはそれを拒否。

呆気にとられるジーナスだったが、研究によって永遠の若さを手に入れている彼は焦ることはなく、すぐに引き下がった。

そして数日後の現在。

「2日前に乙市に暇潰しに隕石を落としたんだけど、これがまた面白

いことになってな」

「暇潰しに隕石…」

相変わらぬの出鱈目な力を遊び感覚で使うシンラにジーナスは呆れるが、もう慣れたので軽くスルーする。

「隕石といってもS級ヒーローが協力すれば充分対処可能なレベルのものだよ。まあ、集まったS級は3人だけで特に協力もしなかったから終わったと思っただけだね」

集まったS級ヒーローは、最近新たにS級ヒーローになったZ市で出会った金髪のサイボーグ、ジェノスと、S級3位シルバーファンング、S級7位メタルナイト。

しかし、メタルナイトのミサイル兵器、ジェノスのエネルギー波を食らっても、隕石は傷一つなかった。

隕石衝突まで後数秒といった所、もう終わりかと思ったその時に彼は現れた。ダサイコスチュームを着たハゲの男は凄まじい勢いで跳躍し、そのまま隕石を殴り砕いた。

砕かれた隕石は破片となってZ市の街に降り注ぎ、巨大な規模の被害をもたらしたが、そのまま隕石が落ちれば街どころかZ市全体を崩壊させていただろう。

「そのハゲた男、サイタマと言ったか。サイタマは間違いなくZ市を救ったヒーローだ。あの規模の災害を拳一つで破壊し、死傷者をゼロに抑えたんだからな。…だが、馬鹿な一般人は自分たちに起きた被害の責任を彼に押し付けている。まったく、笑えるほどに愚かな連中だ」

「…民衆とはそういうものだ。しかし、なぜ名前がわかった？」

「ヒーロー協会の役員の子が教えてくれたよ。新人C級ヒーローだって、ふふっ、C級どころかS級の誰であろうと彼には勝てないだろうけどね」

「…そうか。…それでどうする？ 私としては彼を研究したいところだが」

「俺はまだ彼と戦う気はないね。まあ、いつかは会いたいけど。もつと面白くなるまでせいぜい好き勝手に生きるよ」

シンラのその言葉にジーナスは特に反論することもなくソファに腰掛ける。

「では私は獣王たちの代わりとなる新たな旧人類撲滅精鋭たちの研究を気長にやるとしよう」

「残ってるの阿修羅カブトとモスキート娘だけだもんね」

「…阿修羅カブトはまだしも、モスキート娘まで君の命令しか聞かなくなつたからな…。私一応あいつらの産みの親なんだけど」

「…お義父さん」

「やめろ」

家へと戻つたシンラはフブキの膝を枕にしながら寝転がっていた。考えるのはサイタマというヒーローのこと。

シンラは自身が最強であると確信している。神という超常的な存在から力を貰つたのだ、それこそ神にしかできないようなことも容易くできる。

ヒーローどころか、自分以外の全てが敵だつたとしても負ける気なんて微塵もないほどに、自身の強さを理解していた。

だからこそ、シンラは「戦い」というものに面白みを感じる事ができない。そのためにシンラは女を、快樂を求めようになつた。

そして、そんな中に現れた世界のバグか何かと思えるほどの強さを持ったヒーロー、サイタマにシンラは興味を持った。

もちろんシンラに男色の気はない。

唯一自身の敵となりそうな相手が『ヒーロー』、それも自身が生前に憧れたような正義の味方だということに思わず笑つてしまう。

会える時がとても楽しみだ。まあ、まだ先のことだから、とりあえず今を楽しむことにしよう。

シンラは自身の胸板へと身体を擦り付けているリリーを見ながら、

ニヤリと笑った。

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

シンラは自身に跨ったリリーの小さな腰を掴み、リリーの子宮の入り口に肉棒で何度も優しくキスをする。

その度にリリーは艶やかな声を漏らし、だらしなく顔を惚けさせていく。

「ん、ちゆう」

シンラがリリーに顔を寄せると、リリーはまるで餌を求める雛鳥のようにシンラの口へ吸い付いた。リリーの小さな身体はシンラに抱きしめられ、シンラにすっぽりと収まっている。

ぎゆう、と身体を抱きしめられると連動するかのようリリーの膣内もシンラの肉棒をミチミチと締め付けた。

リリーは両手と両脚をそれぞれシンラの首と腰に回し、決して離すまいとホルドする。そしてシンラも同じようにリリーの小さな身体を抱きしめ、その小さな口を食った。

「んんっ!?!」

一生懸命に口を吸ってくるリリーの頭を掴み、さらに激しくキスをする。食らいつくように唇を合わせ、舌を絡ませてお互いを味わう。

そして、そのままリリーの奥へと射精した。

「んんんんんんんんんん!!!」

噴水のような勢いで発射された精液は瞬く間にリリーの子宮を埋め尽くした。膣内はシンラの巨大な肉棒で栓をされているためほとんど溢れ出ることはなく、リリーの子宮の中に止めどなく注入されていく。

ぽっこりとお腹を膨らましたリリーからずるりとモノを抜くと、リリーは自身の口とシンラの口から唾液の糸を伸ばしながら、ベッドへ

ビクビクと痙攣するリリーに最後の一滴まで精液を注ぎ込んだ。

「んおおおお、あ、あへ、ああうう、うう〜」

唾液と涙で顔を濡らしながらも、幸せそうなアへ顔を晒すリリーをベッドに寝かせ、先ほどから羨ましそうにこちらを見ていたフブキに顔を向ける。

「はあ、ねえ、まだ…ヤレるでしょ？ 私も激しく抱いて欲しいわ♡」
すでに服を脱ぎ、準備万端のフブキにシンラは笑いながら応じた。

第五話

B市に存在する小さな道場で2人の男女が向かい合っていた。

真紅のチャイナドレスを動きやすくしたような武道着を着た小柄な女は右手を頭上に、左手を腹の前に構え、片足を上げる。

女は艶やかな黒髪を三つ編みに結び、くるりと一周巻き、輪っかにして両側頭部で鈴の形をした髪留めで留めている。

対する男は腕を組み、構えもせずに立っているだけだ。

小柄な女、リンリンはそんな隙だらけに見える男から目を離さずに足にグツと力を込める。

ゆっくりと前に倒れるように動き、身体が斜めになったところで地面を蹴り、男に肉薄する。

「はあー」

男の首を正確に狙った手刀は軽く後ろに下がることで避けられる。しかしそれを気に止めることもなくその勢いを利用して回し蹴りを繰り出す。

男はそれを左足で受け止め、左足をそのまま槍のようにリンリンの腹目掛けて突き出した。

リンリンはそれを捻って躲し、男の突き出した足に両手を這わせ交代わりにして側転のような動きで宙へ逃げた。

男は焦りの表情など全く見せずにリンリンを目で追う。

地面に低い姿勢で着地したリンリンは男の残った片足へと足払いをかける。が、男は軽く跳躍しそれを軽々と躲した。

「くっ、まだまだー」

ならばとリンリンは空中にいる男へとラッシュをかける。突き、手刀、蹴りを絶え間なく繰り出す。が、男は空中にいるにも関わらずスルスルと身を捻り、全ての攻撃を躲した。

男は驚き身体を一瞬止めてしまったリンリンの懐に入り込み、人差し指で軽くデコピンをした。

「んぎゃ!？」

側から見れば軽く弾いたようにしか見えないその衝撃でリンリンは大きくのけ反り、受け身も取れずに倒れた。頭に付いている鈴型の髪留めがシャンと鳴る。

「うううう、師匠化け物すぎですよ。一本取るとか一生無理ですって」

ひいひいとおでこを押さえながらリンリンはわざとらしく涙ぐむ。

「ちゃんと強くなってるから心配すんな。ま、急がないと手加減の仕方忘れちまいそうだからほんとに一生無理になるかもな」

「えええ。今の師匠ってどれぐらい本気だったんですか？」

「んー、全力を1000とするならまあ、∴0.1くらい？」

「小数点!」

絶対無理だよおくと、転がるリンリン。とその時、クウウウ、と可愛らしい音が鳴り響き、リンリンの動きがピタツと止まる。

「∴飯行くか?」

男がニヤニヤと笑いながらそう問いかけると、リンリンは顔を赤くしながらゆつくりと頷いた。

鈴の音を鳴らしながら立ち上がったリンリンは男の傍に近づき、恥ずかしそうに目を泳がせる。

男はそんなリンリンの頭をくしゃくしゃと撫でると、リンリンは子猫のように目を細め、口元を緩めてはにかむ。

男、シンラはリンリンの赤くなったおでこに優しくキスをして、はにかんだ顔のまま固まったリンリンを置いて道場の外に出た。

リンリンは数秒動きを止めてから赤くなったおでこ以上に顔全体を茹でダコのように赤くさせ、目をグルグルと回しながら、シンラの後を追った。

中国拳法を基にした『掌鈴拳』を流派とするリンリンは女子格闘界では敵無しと言われるほどの強さを誇っていた。

そんな彼女は腕試しも兼ねてとある武術大会へと出場したが、結果は初戦敗退。自信を無くした彼女は無茶な特訓を繰り返して、己を鍛え上げた。しかし、そんな努力も虚しく一向に上がらない実力に心身共に疲れきって夜の道を歩いていたそんな時、彼女は怪人に襲われてしまう。

完全な不意打ちで路地裏に吹き飛ばされ、動けなくなってしまった彼女は自分に近づいてくる巨大な怪人に恐怖し、涙を流した。

歯をガチガチと鳴らしながら、なんとか逃げようともがくも、身体は言うことを聞かない。

怪人の伸ばしてくる手に怯え、目を瞑った彼女だったが、いつまでも訪れない痛み疑問を覚えながら、恐る恐る目を開けた。

そこにはリンリンの前に立ち塞がり、怪人の手を片手で押さえ込んでいる男がいた。浅黒い肌に高身長その男が怪人の手をひっくり返すように捻ると、怪人は顔を歪ませ、地面に膝をつける。

その男は掴んでいる怪人の手をさらに捻る。すると、ボキッ！という音が響き、怪人が絶叫を上げた。怪人といえども生物であり、特に人型の怪人にはもちろん骨格が存在する。男は悠々とした表情でいとも容易く、巨大な怪人の腕の骨を捻じ折ったのだ。

怪人は痛みに叫びながらも無事な方の腕を振りかぶり、男に殴りかかった。

男はそれを煙でも払うかのように、手で軽く上に弾いた。それだけで怪人の腕は高く弾け飛び、その勢いのまま巨体が宙に浮かぶ。

自分の状況を理解できないまま間抜けな表情を浮かべた怪人は自身の眼前に迫る男の蹴りに全く気づかなかった。

男の蹴りが怪人の顔面に減り込み、血やら肉片やらを撒き散らしながら壁へと激突し、絶命した。

リンリンは意識を朦朧とさせながらも、目の前にいる圧倒的な強者から目を離さなかった。

先ほどまで嫌というほど感じていた恐怖も痛みも忘れ、リンリンは

男に話しかける。

『あ、あのー!』

『動かないで、傷が悪化する!』

男は自身の上着をリンリンに被せると、割れ物を扱うように優しくリンリンを抱き上げた。

『ふええ!?!』

武道一筋で恋愛経験など皆無のリンリンはいきなりのお姫様抱っこに顔を紅潮させるが、安心したからか再び襲ってきた痛みを失ってしまった。

数日後、病院の一室で目を覚ましたリンリンは助けに来てくれた男性のことをいっせいに思い出し、怪我も気にせず見回りに来ていたナースに詰め寄り、なんとか名前だけを突き止めた。

ナースの静止も聞かずに病院を抜け出した彼女は、街を駆け回り、鮮明に覚えている姿を探す。

そして、数時間後汗をダラダラと流しながら彼女はようやく見つけた男に息も絶え絶えに駆け寄り、こう言った。

『シンラ師匠! 私を弟子にしてください!!』

シンラの家にて、シンラはリンリンと2人で風呂に入っていた。

A市が誇る超高級マンションであるシンラの家の風呂場は小さな温泉とでも言えるほどの広さで、シンラとリンリンの2人が入ってもまだまだ余裕のあるほどだ。

当然風呂場なので2人とも全裸である。

リンリンは湯船に深く浸かり、恥ずかしそうにしながらもチラチラとシンラの鍛え上げられた肉体を見ている。

シンラはそんな視線を気にせず、堂々と頭を洗っていた。股間も全く隠していない。

シャワーで頭についたシャンプーを洗い流したシンラは湯船に入り、リンリンの隣でどことなく色っぽい雰囲気で大あく息を吐く。

トレードマークである鈴の髪留めを外してストレートとなつていゝるリンリンの髪からは水滴が滴り、僅かに朱に染まった身体には情欲をそそる色気を纏っている。

「し、師匠、私、強くなつてますか？」

「ん？ああ、実戦が俺との組み手だけだから実感がないかもしれんが、確実に強くなつてるよ」

シンラはリンリンの頭に手を置き、ポンポンと優しく叩く。

「えへへ、そうですか。やった〜」

シンラは子供のように笑うリンリンの頭から手を撫でるように頬に移動させた。リンリンはくすぐったそうにしながらも、その大きな手に頬擦りをした。いつもはつり上がっている目尻も今はだらしなく下がっている。

柔らかな頬の感触を楽しみながらシンラはリンリンへと顔を寄せゝる。

お互いの息がかかるほどの距離で2人は見つめ合う。

「…んっ♡」

どちらからともなく唇を重ねる。シンラがノックをする様に舌でリンリンの唇を叩くとリンリンは小さく口を開けシンラの舌を迎え入れる。

進入してきた舌に自身の舌を絡めとられ、リンリンはすぐに顔を惚けさせる。

「ん、れる。ちゅ、う、はあ」

すでに2人は抱き合っており、リンリンの小柄ながら確かな膨らみを持つ胸がシンラの胸板に潰されてむにむにと形を変えている。

「っひゃん!？」

シンラがリンリンの秘所へと指を入れるとリンリンは艶やかな嬌声を上げ、一度唇を離す。が、シンラはリンリンの頭を掴むともう一

度唇を奪う。しっかりと押さえつけ、口の中をベロベロと舐めまわし、唾液を吸い取る。

その間に膣内の入り口付近を指で激しく愛撫する。

「フーツ、フーツ、フーツ」

口を封じられているので鼻で荒く息を繰り返すリンリンは健康的な引き締まった脚でシンラに抱きつく。

そして身体を震わせながらお湯の中に潮を吹いた。ようやく唇を離され、熱い吐息を漏らすリンリンの脇に手を入れ、抱っこをする様に持ち上げたシンラはその巨大な肉棒をリンリンの秘所に突きつける。

「はぁ♡、はぁ♡」

ゆっくりとリンリンを下ろし、挿入を始める。

亀頭が筋を押し広げ、その小さな入り口をこじ開けていく。

「ああ、あああああ〜♡」

ゆっくりと馴染ませるように入っていった肉棒がついにリンリンの子宮まで届き、リンリンはそれだけで軽く絶頂した。

湯船に浸かっていたこともあり、熱くなっているリンリンの膣内はシンラのモノをギュウギュウに締め付け、とてつもない快感をシンラに与える。

「ぐうっ、相変わらず締め付けがすごいな」

「あうう」

「じゃあ、動くぞ」

「うう!?ちよつと待って師匠…今はちよつとやばいから…」

「いつまで経っても処女みたいな反応しやがって、可愛いやつだな」

シンラはリンリンの乳首を咥えると口の中で舌でコロコロと転がす。どことなく甘い味を感じながらチュパチュパといやらしく音を立てながら吸い上げる。

「んひい！お、おっぱい吸ってもな、何も出ませんよ！」

敏感なところに感じる新たな快感にリンリンは身体を震わせ、シンラに抱きついた。

「ふーっ、も、もう大丈夫…です」

「…そうかよ。んじゃ、いくぞ」

シンラは肉棒を強く押し付ける。亀頭が子宮の入り口をこじ開け、さらに奥へと入っていき、リンリンの小さな身体の中にシンラの肉棒が根元まで挿入された。

臍の上辺りまでをぽっこりと膨らまし、自身のモノを食いちぎろうとするかのように締め付けるリンリンにシンラは自身の情欲をぶつける。

「んあああああ!!!」

パン！パン！と肉同士がぶつかる音が響き、そのたびにリンリンが喘ぎ声をあげる。シンラが腰を引くたびに返しのようになっていくカリがリンリンの膣内の壁を引っ掻き、身体の中を抉られるような快感を与えた。

あまりの快楽にチカチカと視界が点滅し、一突きされるたびに理性を吹き飛ばされ、リンリンは表情を蕩けさせた。

リンリンの引き締まった腰を掴み、しっかりと密着させ精を勢いよく放つ。

「っひゃあああああ!!!」

ビュルビュルと射精の音が聞こえるほどの勢いで注がれた白濁色の精液はマグマの如くリンリンの子宮に絡みつき、火傷するほどの熱を灯す。

「あは、あへ、んおお…」

アへ顔のまま、痙攣するリンリンから肉棒をずるりと抜くと、リンリンは人形のように力無くシンラへともたれかかった。

「もう一回、身体洗わねえとな」

リンリンの体液と己の精液に塗れたモノを見ながらシンラはひとりごちるが、失神し股からゼリーののような精液を垂らさせるリンリンを見るとニヤリと笑い、もう一度湯船へと浸かった。

自身を椅子にしてリンリンを脚の間に座らすと、未だ脈打つ自身のモノを再び秘所に挿入した。

失神していながらも絡みついてくるリンリンの名器っぷりに感心しながら、リンリンの顔をこちらに向け、だらしなく開いた口に濃厚

なキスを始めた。

シンラが身体を痙攣させながら喘ぎ声を漏らすリンリンを担いで風呂場から出てくるのはそれから一時間後のことであった。

第六話

その日、A市に謎の巨大宇宙戦艦が襲来した。

時は少し前に遡る。

大予言者シババワが死ぬ間際に遺した『地球が超ヤバイ』という予言にヒーロー協会はS級ヒーローたちに緊急招集をかけ、1位のブラストとメタルナイトを除くS級ヒーローと何故かついてきたB級ヒーローサイタマがA市に存在するヒーロー協会本部へと集まった。

説明役のシツチという男がヒーローたちにシババワの予言を伝え、半年以内に来るであろう大災害に備えるよう呼び掛けていたその時、突如現れた巨大宇宙戦艦の攻撃によってA市が壊滅状態になったのだ。

ちなみに何故か無事だった高級マンションが一つだけあるのだが、彼等は知る由もないことだ。

それはさておき、S級ヒーローたちは外へ出てすぐさま応戦。シルバーファング、アトミック侍、金属バット、ぷりぷりプリズナーの4人が地上へと降りたっていた怪人と戦闘に入った。

S級ヒーローの中でも特に活躍したのは、やはり戦慄のタツマキだった。戦艦から無数に落とされた砲弾を圧倒的な出力の超能力で止め、その砲弾を逆に利用して宙へと浮かぶ巨大戦艦を攻撃した。

他のS級ヒーローたちを叱咤しながら悠々と力を振るうその姿は彼女の實力と自尊心を垣間見せた。

そんななか、騒ぎが始まってすぐに天井をぶち抜き巨大戦艦の中に侵入したサイタマは次々と現れる戦闘員らしき生物を倒しつつ、壁やら天井やらをぶっ壊しながら奥へと進みたどり着いた場所で1人の男と向かい合っていた。

大きな単眼に青い肌、重々しい鎧を見に纏ったその男の名はボロス。

A市を襲撃した一団、『暗黒盗賊団ダークマター』の頭目であるボロスは自身を全宇宙の覇者と称し、宇宙中を荒らしまわっていたが、自

身のあまりの強さゆえに闘争を退屈に感じていた。

しかし、ある日、とある占い師が予言をした。地球に自身と対等に戦える存在がいると。

ボロスは対等な闘いを求め、20年の年月を経て地球へとやってきた。

「今確信した。見ただけで感じるその強大なエネルギー。お前が予言の男だ。さあ、俺の生に刺激を与えてくれ」

獰猛に笑うボロスと無表情のサイタマ。

立場は違えど、圧倒的な強者であり、同じ思いを抱く2人が今、ぶつかった。

サイタマとボロスの闘いは熾烈を極めた。

瞬間移動の如き攻防を繰り返して、拳と脚がぶつかる度に轟音が鳴り響く。生物としての限界を超えている2人の闘いは長くは続かなかった。

体内エネルギーを放出させ、身体能力を上昇させる切り札『メテオリックバースト』を使用したボロスの破壊光線とサイタマの本気の一撃がぶつかり、凄まじい衝撃が余波ですでにボロボロだった戦艦を爆発させ、地面へと墜とした。

煙が晴れたそこには立っているサイタマと下半身が吹き飛び、倒れているボロス。持ち前の生命力でなんとか意識を繋いでいるボロスは軽く笑い、サイタマへと言葉を投げかける。

対等な勝負ではなかった。お前には余裕があった。まるで歯が立たず、戦いにすらなっていないなかったと。

「…やはり予言などアテにはならんな」

サイタマはボロスに背を向け、歩き出す。

「お前は強すぎた」

パチパチパチパチ、手のひらを叩く拍手の音がサイタマの耳に届いた。サイタマが音のなる方に目を向けると、そこには褐色肌の美形の青年がいつのまにか瓦礫の上に座り込んでいた。

左足を曲げ、右足をプラプラとぶら下げているその青年は拍手を止めると、ニコニコと優しいげな笑みを浮かべながら、サイタマの正面へと降り立つ。

「誰だお前。ヒーロー?」

「いや、違う。俺はシンラ。強いて言うなら君のファンさ。先程の闘い、見事だった。特に最後のパンチなんか凄かったよ。まさしくヒーローの一撃。ギャラリーが他にいないのが残念だけど。まあ、いたところで余波で死ぬだけだから結局変わらないか」

ペラペラと軽い口調で話す青年、シンラは自分のいる戦艦が今まさに墜落しようとしているというのに焦りの表情ひとつ見せずにサイタマに一歩ずつ近づいていく。

「ねえサイタマ、君はなんでヒーローになったんだ?」

「え?…えーと、なりたかったからだけど。理由はなんだろう、アニメのヒーローみたいになりたかった…んだと思う」

唐突な質問にサイタマは戸惑いながらも答える。

「じゃあ、次。自分はプロのヒーローに向いていると思う?」

「…」

「思わないだろ?自分のなりたかったものと何かが違うって感じてるだろう?分かるよ」

シンラはサイタマを真っ直ぐ見つめて説得するように会話を続ける。

「俺も正義の味方に憧れてた。弱きを助け、強きを挫く。そんなヒー

ローにね。でもダメだった。俺の正義は理解されなかった。自分を犠牲にしても多くの人々を助けたんだ。なのに、よりにもよって俺の正義を否定したのは俺が助けた奴らだった。俺は気付くのが遅かった。民衆なんてものはみんなそうだ。助けを求める癖に、失敗した正義には強く責任を追求する。そんなのおかしいだろう。助けなかったら悪か？失敗したら悪か？安全圏から騒ぎ立てる馬鹿どもを何故助けなきゃならない？そう思わないか「話が長え!! 要点だけを言え!!」

サイタマがそう話を遮った瞬間、轟音を立てて戦艦が地面へと墜落した。地震のような揺れが起こるが2人ともバランスを崩すことはない。

「ああ、ごめん。つい熱くなっちゃった。うん、つまりね。…一旦ヒーロー辞めて、俺と一緒に世界を作り変えないかってこと」

「作り変える?」

「そう。さっきはああ言ったけど、俺も助けるべき人間は存在すると思ってるよ。だからそれ以外の人間を一旦消して、正義を理解する人間を一から増やしていく。そしてその後俺たちが正義のヒーローとして立つ。この世から悪を無くすことは不可能でも絶対的な正義とそれを理解する人々がいれば世界は恒久的な平和に包まれる。その為に君みたいな強い正義が必要なんだ。だから、俺と来ないか?」

サイタマの目の前で止まったシンラはその手を差し出す。

サイタマはその手をジツと見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「……いや、俺はいいや」

「…そう。分かった」

サイタマの拒絶の言葉にシンラは少し寂しげに手を戻しながらもあつさりと引き下がる。

「んー、残念だけど、本人が嫌だって言うのなら仕方ない。今日は帰ることにするよ。あ、その前にS級ヒーローたちに会いに行こうかな。俺今まで顔見せたことなかったし、宣戦布告の意味も込めて軽く挨拶でも…」

シンラはちょうど集まっているS級ヒーローたちに会いに行こう

と考え、軽い足取りでサイタマに背を向け、歩き出す。

「なあ」

だがその背中にサイタマは声をかけた。動きを止めたシンラは振り返らずに「何？」と聞き返す。

「さつき、助けるべきじゃない人間を消すって言うってたけど、それ本気でやるつもりなのか？」

「ああ」

「…じゃあ、俺はお前を逃すわけにはいかねえな」

振り返ったシンラの眼前には拳が迫っていた。

一瞬の静寂の次の瞬間、ボロボロとなり半壊していた戦艦が木っ端微塵に吹き飛んだ。

地上にいたS級ヒーローたちは困惑していた。巨大宇宙戦艦が墜落しただけで終わらずに大爆発を起こしたからだ。

巨大な土埃が舞い、遅れて到着したA級1位ヒーローアマイマスクとメタルナイトを含むヒーローたちが見上げる中、煙の中から2つの影が飛び出した。

数メートル離れた位置に同時に着地した2人、シンラとサイタマは崩壊した街や宇宙船には目もくれずお互いを見据える。

サイタマは自身の拳を確かめるように握り、シンラは謎の光を纏った手で土煙を払う。

一度軽く振っただけで充満していた土煙が霧散し、視界が晴れる。

「…あいつはさつき会議の時にいたB級の…」

「…もう1人は誰だ。人間のように見えるが」

S級ヒーローたちは突然現れた2人に疑問を抱く。

と、その時、爽やかな笑みを浮かべたシンラが周りのヒーローたち

に話しかけた。

「やあ、どうも。ヒーローの皆さん。俺の名前はシンラ。よろしくね。…ああ、勘違いしないでほしいんだけど俺は別にこの船のボスでもなければ、宇宙人でもないよ」

大袈裟に手を広げ、話すシンラに警戒の目を向けるヒーローたちを一人一人見渡しながら、シンラは続ける。

「俺は近々ヒーロー協会を潰して、新しい正義の象徴を作り出すつもりだからどの道君たちの敵ってことになるけどね。だから挨拶しに来たんだよ」

「ヒーロー協会を潰すだど?」

S級16位、ジェノスが鋭い眼光のまま聞き返す。

「うん。俺はヒーロー協会の正義を信じてない。上層部の奴らも嫌いだしね。だから新しい正義が必要なんだ。その正義を理解する人々もね」

と、シンラが言葉を終えたその瞬間、シンラの周りの空間が見えない何かに押し潰されるように歪んだ。

よく見ればシンラの身体や周りの瓦礫を薄く緑色の光が覆っている。

「長つたらしい話はいいわ。つまりあんたは敵ってことでしょ」

それを行った人物、戦慄のタツマキはシンラを中心に超能力でシンラを押しつぶさんと力を込める。彼女にとっては敵の言葉などどうでもいい。重要なのは敵かどうかということだけだ。それさえ分かればあとは自身の実力で捻じ伏せるだけなのだから。

「っ!?!」

が、しかし。

「いきなりか。戦慄のタツマキ。話ぐらいは聞いてほしいところだけど。まあ、仕方ないのかな」

何事もなかったかのように話を続ける男に余裕の表情を崩す。

もちろん本気でやった訳ではないが、それでも多くの怪人をなす術もなく倒したほどの力だった筈だ。

「ほいっ」

シンラは一步強めに足を踏み出した。それだけでシンラを覆っていた力は消え、タツマキの身体が少し後ろに弾かれた。

S級の中でもトップクラスの強さを誇るタツマキの超能力を容易く耐え、打ち消したシンラにヒーローたちは驚愕するが、それでも彼等はトップヒーロー。瞬時にシンラを敵と定め、攻撃を仕掛ける。

背後に回ったアトミック侍と正面から殴りかかった金属バットのそれぞれの得物がシンラに襲いかかる。

首と脳天を狙った必殺の一撃をシンラは掴み取り、そのまま投げ飛ばした。

そんな2人と入れ替わるように飛び込んできたのは真っ黒い肌に筋骨隆々の巨漢、超合金クロビカリとタンクトップを着た短髪の大男、タンクトップマスターだ。

常人では考えられないほどに膨張した筋肉でタツクルを仕掛けてくる超合金クロビカリを片手で止め、タンクトップマスターの右ストレートを首を捻って躲し、ガラ空きの腹を蹴り飛ばした。

「なっ?!俺の筋肉を片手で止めただど!?!」

「ぐう!?!」

蹴り飛ばされたタンクトップマスターは瓦礫へと突っ込み、絶対的な自信を持っていた己の筋肉を止められた超合金クロビカリは狼狽える。

その隙にシンラは超合金クロビカリの足を払い、発勁のように押し出した掌で超合金クロビカリを吹き飛ばした。

『閃光斬』

しかし、シンラは吹き飛ばした相手を見ることなくその場に低くしゃがむ。

その直後、ちょうどシンラの首があった位置に斬撃が残像を残しながら逆った。

「閃光のフラッシュか。言うだけあって速いな」

シンラの首を切り落とさんと仕掛けた金色の長髪に刀を携えたそ

の男、閃光のフラッシュはシンラを冷たく睨みつけるが、その頬には一筋の汗が流れていた。

ここで、一旦ヒーローたちの動きが止まる。

S級ヒーロー数人に容易く対応するこの男に無闇に攻撃を仕掛けるのは悪手だと気づいたからだ。

シルバーファンングやタツマキすらも攻撃を仕掛けずに睨みつけるだけだ。アマイマスクも焦りの表情こそしていないものの攻撃を仕掛けることはなかった。

「…ま、とりあえず今日のところは帰るよ。…あ！俺と一緒に正義の道を進みたいって人は歓迎するから遠慮なく来てくれていいよ。もちろんヒーロー協会は辞めてもらうけど。…じゃあねヒーロー。また会おう」

友達と別れるように気安く手を振ったシンラはその場から瞬間移動で姿を消した。

シン、としたその場に残されたヒーローたちは様々な表情を浮かべていた。

屈辱、焦燥、興味、萎縮、恐怖、それぞれが違った表情を浮かべる中、サイタマだけは無表情のまま己の拳を見つめていた。

第七話

太陽が完全に沈み、闇が街を包み込んだ深夜。

細いベルトを合わせたような黒のボンテージを身に纏い、モデルのようなスタイルに豊満な胸、男の情欲を誘う容姿をした女が金色の髪を揺らしながら暗闇の中を歩いていった。

額に赤いハートマークがあり、黒いマスクをつけている彼女はただの人間ではない。

生まれ持った強い加虐嗜好、サディズムが原因となり、怪人化した女性。怪人姫、弩S。

彼女はまだ怪人となってから日が浅い。が、彼女が手に持っているトゲ付きのムチ。そのムチで叩かれたものは特殊な刺激によって洗脳され彼女の奴隷となることを彼女は知っていた。

自身の加虐嗜好故の特殊能力。怪人がそういった自身と関係する特殊能力を持つことは珍しくない。

そして、現在。彼女の視線の先には1人の男がいた。健康的な褐色の肌に高身長、イケメン仮面アマイマスクに勝るとも劣らない整った顔立ち。

その男、シンラの容姿は弩Sから見てもまさにドストライクの好みのものであった。シンラという男を欲しがった彼女は、人間数人を軽く吹き飛ばすほどの怪力で振るったムチをシンラへと伸ばした。

この時、彼女は全く気づかなかった。深夜の路地裏に一人で立っていたその男が普通ではないということ、加えてその男がとても苛ついていたということ、そして、何より自分がやる側ではなくやられる側だったということに。

猛スピードで振るわれたムチは、シンラの手によって容易く受け止められ、シンラが逆にムチを引つ張ったことで引き寄せられた弩Sはシンラの手刀によって呆気なく気絶させられた。

ぶちぶちと膣内を抉り、中を蹂躪する。こんな痴女のような容姿をしていて処女だったのか、それとも単に裂けただけか鮮血を膣から散らしながら弩Sは絶叫した。

怪人といえどもここはやはり弱いのかプルプルと震える弩S。

だが、シンラはお構いなしに腰を動かす。

「あぎっ！ぎあっ！ひぎあっ！あゝあゝあゝ！」

出し入れする度に血が飛び散り、弩Sが悲鳴をあげる。そんな悲鳴が今は心地いい。シンラは弩Sの両胸を鷲掴み、乳首をつねり上げた。

「があゝっ！あゝっあゝっあゝっあゝっあゝ」

黒い目をいっばいに見開き、怪人らしい蛇のような長い舌を出しながら涙を零す弩Sにはサディズムとしての気質は全く感じられず、寧ろその逆の性質を感じさせた。

シンラは弩Sの両手を掴み、逃げられないようにすると問答無用で膣内へと射精した。

弩Sが強く痙攣したまま獣のような声を上げた。

淫靡な水音が響く。

シンラは弩Sへと数十回目の射精を行った後に、そのまま眠りについた。

数時間後、シンラが目を覚ましてもまだ弩Sは横たわったままだったが、シンラは気にすることなく弩Sに覆い被さると再び挿入した。弩Sは呻き声を上げるだけだったので数発軽くピンタをして起さず。

目を覚ました弩Sは既に入っているシンラのモノをキュウと締め付ける声を荒げながら潮を吹いた。

そのままお互い抱きしめるような形で弩Sを抱き上げるとその豊かな胸へと顔を近づけ、齧り付いた。

歯を立て食いちぎるように乳房を舐り、乳首を吸い上げる。

「いいあゝあゝあゝあゝあゝ」

菌形の付いた乳輪をそのままに次は口へと向かう。弩Sの口元の傷を舐め、その長い舌に吸い付く。

「ん」ちゅ、れろ、んお、ぢゅ、ちゆる」

濃厚なキスをしながらシンラはまた、弩Sの子宮へと精を解き放つた。

それが1日目。

2日目には抵抗は完全に無くなり、弩Sはシンラの身体を覚えるまで徹底的に犯された。

3日目には艶やかな嬌声が聞こえるようになった。

4日目には弩Sは自分から腰を振るようになり、シンラのことを「ご主人様」と呼び、ひたすらに交わっていた。

そして5日目、ベッドの上には強烈な種付けプレスを行うご主人様とそれを幸せそうに受け入れる奴隷の姿があった。

シンラの気配に気付いたモスキート娘が地下室へと入ると、そこには立ち絡むほどの精臭が充満しており、大きなベッドの上には全裸の弩Sが大の字に倒れていた。

精液と体液に塗れ、未だに絶頂と痙攣を繰り返し喘ぎ声を漏らしながらアへ顔を晒す弩Sを見てモスキート娘は妖艶に微笑んだ。

「あらあら、随分と虐めちゃったみたいじゃない。何か嫌なことでもあったの？」

「…いや、そういうわけじゃない。ただ、正義の理解者を作るのはやっぱり難しいと思っただけだ。今回はかなり自信があったんだけどな」

モスキート娘はシンラの首に手を回し優しく抱きとめ、鉤爪のような手を器用に使いシンラの頭を愛おしそうに撫でた。

「…正義ねえ。女の子を犯すのもあなたの正義？」

倒れ伏す弩Sを横目に、モスキート娘は揶揄うようにシンラに問う。

「馬鹿言え。こいつは襲ってきたから返り討ちにしただけ。つまりは敵だ。俺の敵ってことは悪だ。悪をどうしようが俺の勝手だろう。俺の前に這いつくばった奴は死ぬか俺の正義に屈するかのどちらかだけだ」

「フフ、それでも女なら抱いちゃうんだから、あなたって相当の女好きよねえ」

「フン」

前世のシンラは別に女好きというわけではなかったが、今は何故か女を抱くことに充実感を覚えている。

それはただ単に性格が変わっただけなのか、無意識のうちに愛情にでも渴望しているのか分からないが、シンラは女を抱くことをやめる気は全く無い。

「まあ、私は全然気にしないけどね。寧ろ嬉しいくらい。それに、ちゃんとお前は良い人よ」

「うん、そうだよ。…ありがとう」

シンラは自分を正義だと信じている。

そしてそれは事実だとも言える。シンラは怪人に襲われている人がいれば助けるし、迷子の子供がいれば親の元に連れて行き、荷物を持った老人がいれば荷物を持ってあげる。

これを聞けば間違いなく第三者はシンラを『良い人』、『正義の味方』だと判断するだろう。

しかし、シンラの正義にとって助けることは勿論だが、その助けの後こそが重要なのだ。助けられた者は「助けてくれてありがとう」と正義に感謝をしなければならぬ。

そして、悪は死ぬか、正義に屈しシンラを認めるかのどちらかしかない。

シンラの思う平和の世界には正義に感謝しない者も正義に屈しない者も必要ない。

そんな世界を作るためには自分一人では難しい。強さという点で

第八話

宇宙人の襲来によって完全に崩壊したA市。

政府に任せれば復興には数十年かかるといわれたが、莫大な契約金によって依頼されたメタルナイトはたったの7日で復興工事を終わらせた。

いくら機械の力を使ったとはいえ、単独でそんなことをやり遂げたメタルナイトの力に感心すると共にヒーロー協会は脅威を覚えた。

もし敵になったら、と一瞬考えた者もいたが、メタルナイトが作り変え、より強固になった協会本部や道路をつなぎ迅速な情報共有を可能とした街を見てそんな考えは即座に吹き飛んだ。

流星は我等が誇るヒーロー協会だと、これなら安心だ、と。

その防衛システムや迎撃兵器はメタルナイトの指先ひとつで簡単にコントロールされる物であることは全く考えていないところにヒーロー協会上層部の楽観主義さが窺えるものだ。

まあ、それはさておき。

新しくなったヒーロー協会本部の会議室にて、また前回と同じようにS級ヒーローたちが集められていた。前回と同じメンバーを集めたのかB級であるサイタマもジェノスの隣に座っていた。

そして今回はメタルナイトもいつも通りロボットでだが出席しており、A級1位のアマイマスクも同席している。アマイマスクの隣の席の金属バットはとても嫌そうな顔をしている。

「さて、今回、諸君たちに招集をかけたのは他でもない。十日前、A市に現れたあの男のことだ」

あの男。前回同様説明役として前に立つシツチのその言葉に全員が同じ人物を頭に浮かべた。

「前回の緊急招集から期間が空かずで申し訳ないが、それでもそれほどまでに厄介な事態だということは皆も理解していると思う。私は

あのシンラと名乗った男が確実に予言に関わっていると考えている」
S級ヒーローに軽く対応し、遊んでいるようにも見えたシンラにシッチは最大限に警戒していた。その警戒には上層部に意見しようにも現場を見ていない幹部たちはまともに取り合おうとせず、なんとか緊急招集の許可を得ることができた現状に対しての不安も含まれていた。

実害が起きていないこともあり、事態を軽く見ている上層部に苛立ちを覚えるが、直接対峙したトップヒーローたちと会合できただけでもよしとしよう。

「今回の話の核は奴への対策と「そんなのどうでもいいわ」…む？」

シッチの話をタツマキが遮った。テーブルに肘をかけ、目を吊り上げている彼女は見るからに苛立っており、シッチは思わず怯んでしまう。

「あの男がまた現れたら私に連絡しなさい。私が倒して、それで終わりよ」

「…フン。随分と自信があるようだな。前は超能力が通じていなかったようだが？」

「アンタだって軽く避けられてたじゃない。自慢のスピードはどうしたの？改名した方が良くないんじゃない？」

「……」

タツマキとフラッシュが睨み合う。ちょうど2人の間にいた童帝がめんどくさそうな顔をしながら「まあまあ」と2人を抑え、その隙にアマイマスクがシッチに問いかけた。

「僕はくだらない喧嘩を見るために忙しい中来たわけじゃないんだ。さっさと本題に入ってくれるかな？」

アマイマスクのその言葉にタツマキとフラッシュが反応するが、シッチが話し出したため睨みだけで終わった。

シンラの行動理由が本人の言う通り『新たな正義の確立』なのかどうかは判明していないが、ヒーロー協会の敵であることに違いはない。

しかし、S級をも超えるシンラの強さを考え、要らぬ混乱を招かな

いために情報は当時現場にいた者たちのみに限定するものとする。

この場に集まった一人一人に特製の通信機を渡し、遭遇した場合は単独では戦わず必ずその通信機を使うこと。ボタン一つのその通信機はボタンを押せばヒーロー協会本部と他の通信機に連絡がいくとのことだ。

シツチの話をまとめればこんなところだ。

全員が通信機を受け取ったことを確認したシツチは最後にもう一度注意を呼びかけ、その場は解散となった。

「先生」

帰り道、ジェノスが自身の師であるサイタマに話しかけた。

「先生はどう思いますか？」

最近、柄にもなくブーツとすることの多いサイタマを心配したジェノスは今回の事態について何か思うところがあるのかサイタマに問いかけた。

「んー、俺ちよつとあいつと話したんだけど、少し共感しちゃってます」

「共感…ですか？」

「ああ」

隣を歩く師匠はいつも通りの表情に見える。

「…なんかぶっ飛ばして終わりじゃ駄目って言うか、上手く言えねーんだけど」

頭を掻きながら、サイタマは独り言のように答えた。

「そんな難しいこと考えてたらあいつと戦うことにいつの間にか期待してた。あいつ、強いぞ」

ジェノスはサイタマのその言葉に身体を震わせた。圧倒的な強さを誇るサイタマがハッキリと『強い』と明言したのを初めて聞いたからだ。

その後、ジェノスは口を開くことはなく、どことなく嬉しそうにしているサイタマの後ろを歩いた。

一方その頃。ほとんど壊れていないにも関わらずメタルナイトによつて修繕された自宅にて、シンラはフブキの手作りクッキーを食べていた。

「…美味しい」

「そ、そう？あ、と、当然よ！私だってやればできるんだから」

口に広がる控えめな甘さとチョコレートの風味を感じながら、素直に浮かんだ感想を言えば、目の前にいるフブキが顔を赤くしながらも嬉しそうに笑った。

フブキは料理が上手いとは言えなかったが、最近は大達している。他にもリリーは普通に料理上手で、リンリンは中華のみ作れる。一度リンリンが洋食を作った時は田んぼに落とされたタイヤをバーナーで炙ったようなダークマターができた。

ちなみに一番料理が上手いのはアーマードゴリラである。

クッキーを食べ終えた後、唐突にフブキが口を開いた。

「ねえ、お姉ちゃんに会ったのよね」

「ああ」

フブキの姉、戦慄のタツマキに会ったと言うことはヒーロー協会との戦争が迫っているということだ。

「お前の姉を殺したりなんかしないから安心しろよ。まあ、怪我とかは仕方ないが」

「ううん、それはちゃんと分かっているから大丈夫。早くお姉ちゃんもこっちに來たらいいのに。もちろん私の方が愛され度は上だけどね！」

むふー、と腰に手を当てて傲慢気に息を吐くフブキの頬を撫でるとフブキは顔を紅潮させ、恥ずかし気に微笑んだ。

そのまま人差し指と親指でフブキの顎をクイツ、と上げるとフブキのぷるりとした柔らかな唇がシンラへと近づいていく。

「んっ」

そして、唇を重ねる。舌こそ入っているものの激しいものではなく、静かに確かめ合うようなキスだ。

「…クツキーの味がするな」

「なっ!？」

その言葉に一瞬口を離れたフブキだったが、シンラに引き寄せられもう一度舌を絡ませる。

フブキの黒髪を優しくかき分けながら抱きしめるとフブキもスイッチが入ったのか甘い息を吐き、シンラの口を吸う。

いつまでそうしていただろうか。お互いを貪り合うその快感をもう少し、あと少しと求め続ける2人はいつのまにか服を脱いでおり、ソファで抱き合いながら唇を合わせる。

「ちゅ…ん、れろ、はぁ」

シンラはフブキの胸を揉みしだきながら舌を絡め、唾液を吸い続ける。

淡い赤に染まった身体を密着させながら、恍惚の表情を浮かべるフブキの足を持ち上げ愛液を溢れさせる膣を顔の前に持つてくる。

白い太ももを掴み、溢れ出す蜜を舐めあげる。

「ひぁあん♡…あんっ、ん、ぷ」

快感に嬌声を漏らすフブキだが、負けじと目の前のシンラの肉棒にむしやぶりついた。

ジュポジュポといやらしい音を立て喉奥まで飲み込み亀頭を舐める。

所謂シックスナインの体制になった2人はお互いの性器を愛撫し合う。

「んん♡ちゅぷ、ん♡」

「ぐっ」

フブキの激しいストロークに射精感を感じたシンラはフブキの頭

を押さえ勢いよく射精した。

「んんん♡!!んーっ♡!」

直接胃に流し込むほどの勢いで放たれる精液を飲み込んだフブキは綺麗にするように丹念に肉棒を吸い上げながらちゅぽんと音を立てて口を離れた。

舌舐めずりをして精液を一滴残らず味わう彼女はひどく魅惑的でまるでサキユバスのような色香を纏っていた。

シンラはバックからフブキに挿入した。

腰を掴み、強くピストンを打ち込み激しく徹底的にフブキを犯していく。

全裸のまま汗だくになって繋がるその様はセックスではなくまさしく交尾と形容できるものだった。

クチユクチユと絡みつき

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

パン、パンと肉をぶつけ

「んああ♡!あいい♡!やああん♡!」

ズン、ズンと子宮を潰し

「んおおっ♡!?んひいい♡!?んあああん♡!」

ズチユン、ズチユンと身体を抉った。

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”♡♡♡!!」

「出すぞ!」

「出してえ!私の奥に精液出してえ!!」

ラストスパートをかけ、深く肉棒を抜き差しする。

「あーっ♡!イク♡!イツちやううう♡!!」

フブキの子宮の奥深くへと射精する。ビュルルル!と放たれた灼熱の粘液が子宮を侵し、フブキの身体を快楽が駆け巡った。

「ツツツイツツツクウウウウウ♡♡♡♡♡!!?」

シンラの肉棒が脈打ち、最後の一滴まで注ぎ込む。

目にハートを浮かべたフブキは身体を弓なりに反らして絶叫した。

ゾクゾクと身体を震わせ、だらしなくアへ顔を晒すフブキから肉棒を抜き、ソファへと寝かせたシンラはシャワーを浴びるために風呂場

へと向かった。

第九話

「ワン」

鳥の囀りが聞こえる朝。日課の飼い犬の散歩に出かけていたシンラは上空からの視線に気づいた。

悪意は無く、気配も感じなかったが、見られているという確信があった。

「…ポチ。こつちだ」

「ワン」

路地裏へと入ったシンラは壁に背を預けて上を見上げた。

ポチと呼ばれた黒犬もフスフスと鼻を鳴らしながら真似をする様に上を見る。

『…やはり気付いていたか』

野球ボールほどの大きさの物体が上空からシンラの目の前に現れたかと思うと、球体の上部分についたスピーカーから渋めの男の声が聞こえてきた。

プロペラでホバリングしているその小さなロボットが一体何なのかは既に気付いていたシンラは気さくに話しかける。

「なんの用かな？メタルナイト」

『…少し、話がしたい』

S級6位ヒーロー、メタルナイト。

機械工学を専門とする科学者であり、ヒーロー協会ですら把握できないほどの軍事力を隠し持つ言われている男だ。

「話…ね。構わないけどここで話して大丈夫なこと？」

『心配ない。周囲に生体反応も機械反応もないことはレーダーで確認済みだ。信用できないのであれば場所を移してもらっても構わない』
「いや、大丈夫だ。普通に出歩いているからわかると思うけど俺の方でもそういう対策はしてるからね」

『…では単刀直入に言おう。君と取引がしたい』

「取引？」

『契約…と言ってもいい。期間はヒーロー協会を潰すまで。俺が差し出せる手札は技術と情報。求めるものは強さだ』

シンラの表情は変わらない。

メタルナイトの操るロボットと同じ無機質な目で見つめるのみだ。

「…目的は？」

ほんの僅か冷たくなった声で問いかけるシンラは返答次第ではただでは済まないと言わんばかりの覇気を纏っている。

暗にお前は悪かと問うているのだ。

『…正義を為す。そのためには今のヒーロー協会が邪魔だ』

「…へえ」

機械越しの為メタルナイトの顔は見えないが、その声には力がかもっていた。

シンラは面白そうに声を上げ、軽く目を見開いた。

『たとえどれほどの兵器を持っていてもヒーロー全員、特にタツマキとブラストを相手にするのは荷が重いからな。不快だが、怪人とでも一時的に手を組もうと考えていたほどだ。そう思えば君が現れてくれたのは僥倖だった』

まだ詳しい話は聞いていないが、少なくともメタルナイトの目的はシンラと同じものだった。

真の正義の確立。今のヒーロー協会が邪魔ということはヒーロー協会の正義を認めていないということだろう。

「君の正義が俺の正義と同じものならとても喜ばしいことだ。うん、もちろん答えはOKさ。握手できないのが残念だけど、協力を約束しよう」

『…感謝する。通信機を渡しておくから詳細は今後これを介して伝える。それと、ここにはメタルナイトとしては無くボフォイとして来ている。俺のことはボフォイと呼んでくれ』

「わかったよ。よろしく、ボフォイ。君と俺の正義が対立しないことを願うよ」

散歩を終え、帰宅したシンラはソファに座り、今後のことについて考える。

メタルナイト：いや、ボフォイを味方にできた今、ヒーロー協会の情報全てを手に入れたも同然で、ボフォイにヒーロー協会本部の迎撃システムを無効化してもらえばより簡単にヒーロー協会本部を落とせることだろう。

ボフォイが本当に味方になったかどうかは実際どうでもいい。特に痛手はない。

それよりもだ。

他のヒーローたちをヒーロー協会からこちら側に迎え入れることを考える。ヒーローの中にもシンラが正義と思えるヒーローは少なからず存在するからだ。

そう簡単にはいかないだろうが、S級ヒーローが寝返ったという事実とヒーロー協会が如何に脆く、正義に相応しくないか示せば話は変わってくる。

既にフブキとリリーはこちら側なのだ。まあ、それは正義というよりシンラについてきたという感じだが。

必ずこちらの正義を理解するものが現れるはずだ。

正義を名乗るのにランキングというのも気に入らないしな。

ああ、楽しみだ。C級1位の彼なんかは特に欲しい。強さはともかく精神は最高のヒーローと言えるだろう。

強さもシンラの手にかかれれば軽く解決できる問題だ。

他にもヒーロー協会の職員たちも同様だ。汚職などの悪を行う者は論外だが、罪のない職員たちの仕事や命を奪う気は無い。

こちらで用意する新たな正義組織に属してもらおう。何人か仲良くしている人もいることだしね。

シンラはその輝かしい未来を想像して純粋な笑顔を浮かべた。

「…腹が減ったな。そういえば朝食食べていなかったっけ」

時計の針は11時に指しかかろうとしており、これでは朝食ではなく昼食になってしまいそうだ。

シンラは3人の女性に連絡する。シンラも人並みに料理はできるが、作ってもらった手料理の方が好きなのでよく頼むのだ。

彼女たちもシンラには喜んで料理を振る舞うので、シンラ的には嬉しきも倍増である。

「ここは中華一択です！」

「リンリンさんそれしか作れないからでしょ！」

「私昨日作ったマカロン持ってきたのだけど」

「ごめんなさいフブキ様！お昼ご飯にマカロンは流石にキツイです！絶対そっちの方がカロリー高いのに何故かお昼ご飯にスイーツを食べるダイエツト中のOLみたいな感じにああ決してフブキ様がそうと言っているわけではなくて！とにかくフブキ様はここでシンラ様とイチヤイチャしてて下さい！私が精力増強の美味しい料理を作つてきますので！」

「精力増強ならやっぱり中華が一番です！」

フブキ、リリー、リンリンの3人のこんなやりとりがやいのやいのと続いた後で結局リリーが作ることとなった。

ポチはクッションの上でシンラから貰ったハムをもしやもしやと食べていた。

昼食を食べ終えた4人は寝室のベッドの上にいた。

全裸で寝そべるシンラの上に跨ったフブキは自らの秘所をシンラの肉棒に数回すり寄せた後、ゆっくりと挿入を始めた。

「はあああん♡」

徐々に腰の動きを早めていくフブキから目を右に逸らせば、顔を赤くしたリンリンが舌を伸ばしながらキスを迫ってくる。

シンラはその舌を受け入れ、リンリンを抱きしめた。

「んああ、ちゅ、ちゅ、んん♡」

反対側にいるリリーはシンラの腕に抱きつき、寂しげに身体全体をすり寄せる。

シンラの腕を足で挟み秘所を擦りつけるその姿は14歳の少女とは思えないほど妖艶だった。

「んっ、ふっ、ふあああ♡」

シンラはそんなリリーとリンリンの2人を抱き寄せると、淡く綺麗なピンク色をした2人の乳首を同時に吸い上げた。

「あああああん♡!」

2人は身体を反らして痙攣するが、シンラは啞えたそれをちゅうちゅうとさらに吸い始める。

敏感な部分に強烈な刺激を感じ、快感に身体を震わせる2人を見るフブキは悩まし気に腰を回す。

自分でするのも好きだが、求められるように激しく抱かれる方が好きなフブキは視線で訴えかける。早くいつものように突き上げてくれと。

シンラは笑い、軽く絶頂しているリリーとリンリンの2人を離すと、フブキの腰を掴んだ。

「フブキ。強めにいくぞ」

ゾクゾクと身体を巡る快樂への渴望と自然に漏れる熱い吐息。フブキは笑って頷いた。

瞬間、ズンツーンという音と共にシンラはフブキの奥深くへと肉棒を突き上げた。

「んほおお♡!!?」

ガツガツと荒々しい突き上げでフブキを犯す。

第三者が見れば強姦と思えるほどの暴力的なセックス。しかし、それでもフブキは幸せそうに笑い、愛液を溢れさせ、嬌声を上げる。

「ひいあ”あ”あ”♡!?”あ”っあ”っあ”♡、んんお”お”おおお♡
！」

そのままシンラはフブキの弱点である子宮口をカリで削るように引っ掛けた。

「あ”あ!!”そこダメええ♡!!?”っっいいい♡!?”

シンラはフブキの腰を密着させ、子宮へと入った肉棒の先から精を解き放つ。

「っっっっあ”あ”あ”あ”あ”あ”ん♡♡♡♡!!?”

身をくねらせたフブキは濁音混じりの絶叫を上げ、絶頂する。

数十秒の長い吐精により子宮が精液で満たされたフブキは目をトロロンと蕩けさせ、だらんとシンラにもたれかかった。

「はあ、はあ、はあ」

息も絶え絶えなフブキの様子にいつのまにか絶頂から帰ってきていたリリーとリンリンの2人がごくんと喉を鳴らす。

シンラはフブキから肉棒を抜くと、リリーとリンリンの前に座った。

その強大な雄の象徴に釘付けになる2人は肉棒へと身体をすり寄せ、左右に分かれてその肉棒を胸で挟み込んだ。

「んちゅ、んむ」

「はあ、れる、れる」

リンリンはシンラの亀頭を上から啜えこみ、リリーは付け根から丹念に肉棒を舐め回す。

精液と愛液で既に濡れていたシンラの肉棒が2人の胸で扱かれるたびにぬちよぬちよと淫靡な音を部屋に響かせる。

「ぐうっ」

全方位から来る刺激からシンラは我慢できずにリンリンの口腔へと射精した。リンリンは凄いい勢いで流れ込んでくる精液を一滴残らず口に溜め、ゆつくりと味わうように咀嚼した。

「あつ♡ずるいですよ。私にも分けてくらはい♡」

リリーが口を開け、舌つたらずな声で言いながらリンリンと唇を合わせた。思わず開けたリンリンの口から溢れ出す精液をリリーは美味しそうに舐め取り、大量の精液はそのまま2人の口へと消えていった。

「くそっ、我慢できないだろうが」

シンラはリンリンを押し倒すと、まだまだ主張しており、むしろ大きくなったように感じる剛直をリンリンの蜜壺へと押し込んだ。

あつという間に奥へと到達した肉棒にリンリンの膣が絡みつく。

「ふにゃああああん♡!!?」

目を見開き、舌を出しただらしない顔で快楽を受けるリンリンは持ち上げられた足でシンラの腰に抱きつき、首に腕を回した。

ミチミチと音立てながらギリギリまで引き抜かれた肉棒が再び強く最奥まで突っ込まれる。

「ああ”お”お”ん♡!いひいいん♡!いくううう♡!!」

シンラはリンリンの口をキスで塞ぐとストロークをさらに強くして放精する。

しかし、止まらない。射精したままピストンを繰り返し、子宮だけではなく、膣内全体に精液を馴染ませていく。

「つつんんー!?!?!?」

声にならない絶叫を上げながら、リンリンは大きく絶頂した。身体に流れ込んでくる熱と共に押し寄せてくるピストンによる快感が身体を支配し、身じろぎするが、シンラが上からプレスの形でリンリンを抑え込み口を吸い上げたままビクンビクンと痙攣するリンリンに最後の一滴まで流し込んだ。

ズポリ、と肉棒を引き抜かれたリンリンは手と足を伸ばし、股を大きく

開いたままの下品な体勢で痙攣を繰り返す。

最後に残ったリリーは我慢できないとばかりに既に自分で秘所を慰めており、四つん這いの体勢で愛液で濡れた膣をシンラへと向け

た。

シンラはリリーへと近づくとその膣から溢れ出す蜜を勢いよく啜った。

「ひゃああああん♡!?」

じゆる、ちゆう、と吸われれば吸われるほどに溢れ出してくる愛液を吸い取りながら、シンラは舌でリリーの膣の入り口をぐりぐりと刺激する。

「おお、んああ♡イ、イクうう♡」

「イツちまえ。リリー」

「あゝっ!? イツツグううう♡!?!?」

止めに小さく主張しているクリトリスを強く啜ってやればリリーは大きく身体を捻らせて叫び声のような嬌声を上げた。

ぷるぷると痙攣したリリーは失神するようにベッドへと身体を倒した。シンラはリリーのぐちゃぐちゃに濡れた入り口へとモノを当て、ゆっくりと挿入していく。

既に限界を超えていたのか掠れた喘ぎ声を出すリリーを無視して膣内を侵していく。最奥まで達したシンラはそのままリリーを持ち上げ、立ち上がる。

そして、リリーの両手首を掴むと思いつきり腰を突き上げた。

「っっっ!!!?」

地面に足が着いていない為、リリーは己の体重をシンラの肉棒のみで支えることとなり、自身の体重によってより奥深くにシンラのモノが刺さっていく。

ぽっこりとお腹を膨らましたリリーは失神しているように見えるがシンラはお構いなしに突き上げるようなピストンを繰り返す。

よだれを垂らし、潮を吹くりリーを壊れるほどに抱きしめたシンラは今日一番の勢いで子種を吐き出した。

「ア”ア”ア”ア”————ツツツ♡♡!!!?ア”————ッ
!??」

快樂しか感じられない脳みそがキャパシティを超え、正気を失うリリーを抱きしめて離さないシンラは長い長い間射精を続け、射精が終わった後もリリーを抱きしめて、肉棒を挿れたまま口や胸を貪った。

第十話

「…怪人協会…地下に群れてる薄汚いゴミどもか」

『ああ。最近の怪人の増加も奴らが関係しているのだろう』

「ふん、表に出てきたのなら好都合だけど」

『…今のところヒーロー協会内でこの情報を得ているのは俺だけだ。今の協会は君と例のヒーロー狩りの対応で忙しいからな』

「タンクトップマスターを倒したらしいね」

『ああ。下位とはいえS級ヒーローがやられたのだ。協会が焦るのも無理はない。…怪人協会の件は確かに伝えた。俺が動くときはまた連絡する』

ボフォイとの通信を終えたシンラは鋭い目つきのまま立ち上がり、外へと出る。いつもはポチの散歩に行くところだが、ポチは時々一人で散歩に行くことがあり今は居ない。そんな時はシンラも一人で散歩に行ったり行かなかったりだ。

朝でもなく昼でもない微妙な時間帯。

春過ぎの心地いい風が吹き、髪を揺らす。公園で遊ぶ子供たちを見て笑みを溢し、道に迷った女性に優しく道案内をする。

日常となった行動。女性からの感謝の言葉を受け取り、普段ならば上機嫌のまま散歩を続けるところだったが、その時シンラの耳に不快な声が届いた。

「ワハハハハ!!怪人クロコダイアン様のお通りだ!お前ら全員噛みちぎってやる!!」

ワニと人間を足したような生物が道の真ん中で吠えていた。3メートルを超える体躯で人々を威嚇しながら車や電信柱に噛み付いている。

言わずもがな怪人である。

悲鳴と共に人々が逃げ出し、それに気でも良くしたのかさらに暴れ

回る怪人。

「悪…殺すか」

あまりにも分かりやすい悪。シンラは道に落ちているゴミを拾う感覚で処理しようと右腕を振り翳す。

「うう…」

—— ツ子供!?

壊れた電信柱の影から一人の子供が顔を出した。逃げ遅れたのか、いや、足を押さえている。どうやら足を怪我しているようだ。

「グハハハ！まずは一人目え!!」

怪人が大きく口を開き、子供に躍りかかった。気付かなかった自分を叱咤する前にシンラはすぐさまその子供を助けようと動き出す。

しかし、その前に一人の女性が横から子供を掻っ攫った。

見る限り一般人の女性。シンラはそれを確認した瞬間、目標を失って空虚を噛もうとしている怪人に回し蹴りを喰らわせた。

弧を描く足先が怪人の顎に突き刺さり、打ち抜く。

「ゴゲエ!!」

顎の骨を粉碎するどころか首から上が破裂し、大きな目玉が飛び出して絶命するという悲惨な最期を遂げた怪人。

そんな悪の最期を見届けることなく、シンラは子供を庇った女性に追いつき、優しく抱きとめた。

シンラはこれを1秒にも満たない間に終わらせた。きっと女性も子供も何が起こったか理解できていないだろう。

「…あ、あれ？」

「怪我はないか？」

シンラは女性と子供の身体に触れ、軽く力を込める。

生命エネルギーの操作。自身のエネルギーを分け与えることができるシンラは子供の足の怪我を気付かれないように治し、2人の動悸を安定させ、落ち着かせる。

「は、はい」

「君は大丈夫か？」

「…うん」

シンラは2人をゆっくり下ろすと、子供の母親と思わしき女性が駆け込んできた。シンラと女性に何度も謝礼を告げ、涙を流す彼女を見送った後、シンラは子供を助けた女性に話しかけた。

「どうして飛び込んだんだ？」

「え？」

「君の行動は正しい。だが、俺がいなければ君は死んでいたかもしれない。…何故、命を賭けたんだ？」

シンラの問いに女性は少し黙した後、答えた。

「…私、昔にヒーローに助けられたことがあって、それでヒーローに憧れてるんです。なんとかヒーロー試験に合格はしたんですけどC級の最下位のままで、役に立つことなんてほとんどないんですけど、でも何かしたいってそう思ってたら身体が勝手に…」

茶色のショートヘアを揺らしながら少し恥ずかしげに語る彼女にシンラは満足げに頷き、頭を撫でた。

「すごいよ。それは誰にでもできることじゃない」

——彼女は良い。

助けたいと本心で思っている。綺麗な正義。

「名前を覚えてくれないか？」

「えっ、ス、スイムです」

急に頭を撫でられた彼女、スイムは顔を赤くして困惑しているが、頭の上に置かれている手を退けようとはせずにされるがまだ。

「スイムか。良い名前だ。俺はシンラ」

「シンラさん…あの、本当にありがとうございました。ヒーローは私なのに助けてくださって…」

「スイム。また今度会えないかな？」

「え？」

「君の正義に感動してね。君に興味があるんだ」

「え？え？」

スイムが混乱している間にシンラは素早く連絡先を交換する。

「嫌なら無視してくれ。この連絡先も消してくれていい。でも、もし俺と会ってもいいって思うならその時は…またよろしく」

最後にスイムの頭をもう一度撫でてシンラは自宅へと歩き出す。スイムはまだぼーっとシンラの連絡先が登録された自分のスマホを見ていた。

翌日、シンラはソファに座りながらテレビを見ていた。

テレビでは先ほどのワニ怪人についてのニュースが流れている。ヒーロー数名が重体とのこと、どうやら怪人はシンラと出会う前に既にヒーローと戦闘になり勝利していたようだ。

なるほど、それならばあれほどの騒ぎだったのにヒーローが現れなかったことにも納得がいく。

シンラは特に興味もなさそうな目でテレビを見直した。テレビでは若いニュースキャスターが『謎のヒーロー』について語っている。街には協会が怪人の早期発見のために多くの監視カメラが存在している。そのため、監視カメラに写っていた怪人をあっさりと倒した『謎のヒーロー』が話題となっている。

シンラは既にヒーロー協会には顔がバレているので外出する時は認識障害の力を纏っている。その力は他人の意識からなんとなく外されると言うだけなものだが、効果は絶大だ。

話しかけたり、触れるなどの接触があればすぐ解けるが、それも接触した相手のみである。

機械を介したところで見るのは結局人だ。その映像を見た人は誰かは分からないけど、自分の知っている誰でもないという印象を持つだけである。

まあ、まだ騒ぎは起こしたくなかっただけで協会に位置がバレたところでそこまで困らないのだが。

「…」

シンラは徐に自身の股下へと手を伸ばし、自身の股に顔を埋める長

い金髪をした色白の女、弩Sの頭を撫でた。彼女は全裸のまま恍惚の表情でシンラの肉棒にむしやぶりついており、彼女の細い首にはチョーカーにも見える首輪がついていた。

「んん♡、ちゆるるる」

シンラに頭を撫でられた彼女はさらに顔を蕩けさせ、シンラの長大な陰茎を根元まで飲み込み、タコのように伸ばした唇で吸い上げた。弩Sはそれを繰り返し、一生懸命に奉仕をする。

グポグポと音が鳴り、射精感が高まっていく。

シンラは弩Sの頭を掴み、喉奥へと子種を注ぎ込んだ。

「んぷっ♡んんん♡♡」

ビュルルル！と放たれる精液を白い喉を動かして飲み干していく弩S。

シンラは射精しながらも腰を動かして最後の一滴まで弩Sの胃へと送り込んだ。

「んん…ぷはっ♡ご主人様♡気持ちよかったですかあ？」

「ああ。だが、まだまだ満足しちやいないぞ。こつちに来い」

「はあい♡」

撫でるような甘い声で返事をした弩Sは膝を立ててシンラと向かい合うと愛液の滴る秘所をシンラの剛直に押し当てた。

「ああん♡んああ…ご主人様のおちんぽ♡きたあ♡」

ゆっくり中に入ってくる主人の肉棒にゾクゾクと身体を震わせ幸せそうに天を仰ぐ弩S。

シンラは目の前にきた弩Sの大きな胸にキスを落とす、乳輪の周りを舐め上げる。密着している腰を回せば、膣内で肉棒がグリグリと弩Sの子宮口を刺激する。

「あっ♡はあ、ああ♡」

弩Sは一瞬ビクリと痙攣し、軽く絶頂した。

「おい、この程度で何勝手にイッてるんだよ。ふふ、我慢もできない奴隷にはお仕置が必要だな」

シンラは弩Sの膝裏に腕を通して持ち上げる。そして、壁に押し付けると強烈なピストンで弩Sの膣内を抉った。

をした。唾液が溢れ、声にならない嬌声を上げる弩Sの口内を食い尽くすように蹂躪し犯していく。

銀色の唾液の橋をかけながら口を離れたシンラはそのまま弩Sのピンと勃っている乳首に吸い付いた。甘い味を感じながら、口内に含んだ乳首をコリコリと甘噛みしては強く吸っていく。

「じつ、あ、あ、♡気持ちいい!!死んじゃうう!!気持ち良すぎて死んじゃううううあああ”あ”あ”あ”あ”♡♡♡♡!!”」

膣内に二度目の射精。先ほどの精液を超えるほどに放たれた子種が弩Sの膣を塗り替えていく。

「あ…はっ、あああ、あ♡」

その美貌を大きく歪ませ、失神した弩Sに対してシンラはチュウチュウと乳首を吸いながら、肉棒を奥深くに押し付け、入念に種付けする。

たっぷり5分間、一つになっていた2人がようやく離れた。

ぬぼん、と肉棒を抜き、弩Sをその場に下ろしたシンラは精液と愛液に塗れた自身のモノをだらしなく開く弩Sの口へと突っ込んだ。

ジュポジュポといやらしい音をたてながら、シンラは弩Sの頭を掴んでまるでオナホのように自分勝手に扱っていく。

失神しているというのに温かい長い舌と喉奥が肉棒に絡みつぎ、とてつもない快感がシンラを襲う。

が、襲うのはこっちだとはかりにシンラは力無く身を任せる弩Sにガツガツと肉棒を喰らわせ、今日4度目の射精を爆発させた。

口が精液でいっぱいになり溢れ出たので、残りは間抜けなアへ顔にぶっかけていく。

「ぐう、ふう…」

顔面を精液塗れにした弩Sを見たシンラは口元を歪ませ、弩Sを姫抱きにすると自身の寝室へと運んでいった。

第十一話

S級2位ヒーロー、戦慄のタツマキは形の良い眉をひそませながら、A市の上空を超能力を駆使して浮遊していた。

思い浮かべるのは二週間ほど前、崩壊したA市にて出会ったシンラという男。自身の強さに絶対的な自信を持ち、自他共に認める戦慄のタツマキ。彼女はヒーローという立場を持つてから初めて敗北したのだ。

それも拮抗した戦いではなく、まるで相手にされていなかったとも言えるような戦いでだ。そのことを思い出すたびにそれが火種となつて彼女のプライドを燃やし、苛立ちを募らせた。

そんな中でも最近増加している怪人たちの処理に追われる彼女は、その冷徹で端正な顔を歪ませながら淡々と退治していった。

「…単独では戦うなですって？冗談じゃないわ、絶対に私が倒してあげる…」

シツチに渡された特製の通信機を超能力によって小石のように圧縮したタツマキはその日も上空からシンラを探し始める。シンラに敗北した日から毎日のようにシンラを探しているタツマキはその日、ようやく目当ての姿を発見した。

「…見つけた…い…」

商店街を歩く褐色肌の美丈夫、シンラを発見したタツマキはつい攻撃を仕掛けようとするが、ここが街中、それも最近復興されたばかりのA市だということを読み出してすんでのところだと思いとどまる。

脳に残った冷静な理性に従って、シンラの後をつけるタツマキ。シンラは特に何をするわけでもなく商店街の道を一人歩いており、タツマキも探していなければ一般人と見間違えていたのではと思うほど普通に街に溶け込んでいた。

気を抜けば見失ってしまいそうになりながらもタツマキはシンラの後を追う。数十分ほど経ち、シンラは商店街を抜け、どんだん人気がないA市の外れへと近づいていった。そして、まるで最初からの目

的地であったかのような軽い足取りで一棟のビルへと入っていった。

メタルナイトによつて修繕されたからなのか新築のように綺麗なビルだったが、窓には明かりが無く、人気もない不気味なビルだった。

タツマキが気づかれないように慎重に窓から顔を覗かせるとそこには椅子に座っているシンラともう一人、人影があつた。奥は影になつていて顔を見ることはできないが、白いドレスの様な服と胸の膨らみを見るに女性であることはわかつた。

(…協力者? いや、あの時の口ぶりからしてもおかしくはないわね)

タツマキは初めて会つた時のことを思い出す。そういえば勧誘の様なことをしていた。

(…でも、あの女、どこかで…)

と、そこで椅子から立ち上がったシンラを見たタツマキは思考を中断させ、いつでも超能力を発動できる様に構える。

シンラは立ち上がったまま動かない。こちらからは背中しか見えないため、どの様な表情をしているかは分からないが、こちらには気付いていない様だ。幸い周りに人はいない。最大出力の超能力でこのビルごと潰してしまおう。

「ストーカーのうえに盗み聞きとは、俺に惚れたのかタツマキ?!?」

耳元に囁かれた聞き覚えのある声に反射的に振り向いたタツマキが最後に見たのは己の顔を覆う大きな掌だった。掌を目元を隠す様に当てられた瞬間、タツマキはシャットダウンする様に意識を暗闇に手放した。

タツマキを気絶させた男、シンラはぐらりと倒れるタツマキの細い腰に手を回してそのまま割れ物を扱う様に優しく抱きとめた。

「フフ、あのタツマキもあなたの前じゃ赤子同然ね」

シンラの後ろから眼鏡をかけた美女が現れる。青い長髪が風に揺れており、女性にしては長身の彼女は街中に居ればさぞ人目を引いて

いただろう。

「サイコス。お前はいつも通り怪人を集めておけ。地下に閉じ込めれば殺す時楽だからな」

「ええ。でも自分勝手な奴らばかりだから全員は無理よ」

「それでもいい。あとあのミミズを育てるのも勝手だが、悪に染まつたならすぐに消すぞ」

「…分かってるわ。けど大丈夫よ。オロチには暴れることしか頭に無いもの。善悪の判断なんかできやしないのだから貴方と私で制御すればいいだけ。…それより、私にはこれからタツマキがどんな風に堕ちるのが気になるわ」

その美女、サイコスはシンラに抱かれているタツマキを見て口元を歪ませる。

「フツ、第三の目で見てみたらどうだ？」

「嫌よ。結果なんて分かりきってるんだから。ならせめて、自分の目でその姿を見てみたいじゃない」

意識が覚醒し、目を開けばフローリングの床があり、視線を少し上に上げればそこには椅子に座った褐色肌の男がこちらを見ており、その観察する様に細められた目と視線が合った。

「っ!?!な、何これ!?!」

すぐさま超能力を発動しようとしたタツマキだったが、振るおうとした右手は動かず代わりにジャラリと金属質な音が鳴り響いた。

見ればそこには光沢のある黒い鎖があり、その鎖は自身の手首へと繋がっていた。否、右手だけではない。左手と両足も同じように鎖に繋がれ拘束されていた。

しかし、そんな状況の中でもタツマキは余裕を持って目の前の男を

睨みつけ笑った。

「鎖程度で私を拘束したつもり？こんなものすぐに…っ!？」

笑みを浮かべたタツマキの表情が一瞬にして曇る。

「な、何で…」

「人間の脳は生まれながらにその殆どにリミッターがかけられている。しかし、超能力者はそのリミッターが無く、脳細胞が異常活性化し、溢れたエネルギーが超能力となってその者の身に宿る」

椅子に座ったまま、シンラはタツマキに話しかける。優しげに語りかけるその姿は物事を生徒に教える教師のようだ。

「リミッターを外すには色々方法がある。生まれつきだったり、訓練だったり、科学の力でもいけるだろう。そんな超能力者の中でも君はトップクラスだ。100%以上の力を引き出している」

椅子から立ち上がったシンラは呆然としているタツマキの頭に手を乗せ、その翡翠の鮮やかな髪を撫でた。それに気づいたタツマキが跳ね除けるように後ろに下がるが、上手く力が入らなかったのか尻餅をつき鎖が鳴った。

「じゃあ逆に超能力を封じるにはどうすればいいか。同じ超能力で上から無理やり止める、集中力を切らす、とかあるけど、それは一時的なものではない。完全に封じるにはどうするか。…簡単だ」

シンラは恐怖の混じった目でこちらを見つめるタツマキを見下ろし、再びその頭に手を置いた。

「リミッターが外れているのなら、もう一度かけ直してやればいい。常人と同じレベルまで力を下げ、ストッパーをかけてやれば、もう超能力は使えない。…二度とね」

タツマキは記憶の奥底に眠っていた恐怖という感情が目蓋を開けるのを感じた。それが超能力を失ったからなのか、捕まり逃げられないことを悟ったからなのかは分からない。

「でも大丈夫。力が無いことは決して悪いことじゃないんだし、悪人以外は必ず俺が守ってあげるから」

シンラは笑いながら手をタツマキの頭から撫でるように落とし、柔らかな頬に当てた。

「でも本当は、タツマキには仲間になってほしいんだよ。君の脳にかけたストッパーは俺がかけたものだから簡単に取り外せる。もし、俺の仲間になってくれるのならすぐに戻すよ。タツマキが仲間になってくれたら本当に嬉しいんだけどなあ。…個人的にもね」

「どうかな、と語りかけるシンラにタツマキは瞳に恐怖の色を残しながらも睨みつけその提案を吐き捨てた。

「はっ、馬っ鹿じゃないの。お断りよ」

「…そう」

シンラはタツマキの言葉を予想していたのか特に反応もしない。

「まあ、まだ時間はたくさんあるんだ。人間、気が変わるなんてよくあることだよ。…だから、今からは説得の時間だ」

「…?」

シンラはタツマキと同じ目線まで腰を落とすと、流れるような動きでタツマキの唇と自身の唇を合わせた。

「!?!?」

突然のことに目を見開いたタツマキはシンラを突き飛ばそうとシンラの肩を掴むが超能力の無いタツマキの力ではシンラはピクリとも動かず虚しい抵抗と鎖の音だけが続く。

「んんん！ツツぷはっ、な、何すんのよ!!」

キスを止め、唇を離すとタツマキはシンラを睨みつけ激昂した。その顔は羞恥からか赤くなっている。

「言っただろう。説得だって。対話でも良かったんだけど、この方法がいいって言われたからさ」

「言われたですって…?」

「さあ、続けようか」

「ひっ、嫌っ、んぷっ!」

シンラは再びタツマキにキスをした。小さな悲鳴によって開かれた口にシンラは容赦なく舌を侵入させ、ゆっくりと口内を味わっている。

「ん、んん!?!」

サラリとした髪をすくい上げるようにタツマキの後頭部に右手を

回したシンラは左手をタツマキの腰に回し、抱きしめる形で彼女とのキスを続けた。

1分が経った。タツマキはジタバタと暴れるがシンラの大きな身体に押さえ込まれその抵抗も意味をなさない。

3分が経った。タツマキの抵抗は小さくなり、息が苦しいのか鼻で荒く呼吸している。

10分が経った。シンラが口を離すとタツマキは荒い呼吸と共に口から唾液を溢し、ガクツ、と倒れた。どうやら気絶したようだ。

「…やっぱり超能力を無くしたことがかなりショックだったみたいだね。キスだけで気を失っちゃうなんて」

シンラはタツマキの口元を軽く拭くと、ポケットから携帯を取り出し、通話を始めた。

「ああ、今日からちよつと手が離せなくなるから家には来ないでくれ。…ふっ、大丈夫だよ。一週間もかからないから」

楽しげに会話を続けるシンラはタツマキを一瞥して部屋の外へと出て行った。数分後、部屋に戻ったシンラは持ってきた物を横に置き、タツマキの身体に手を伸ばした。

「…ん」

タツマキは目を覚ますと同時に混濁した記憶の中から気を失う直前の記憶を思い出し、起き上がろうとする。が、同じように両手足の鎖に阻まれて身動きが取れない。

否、今回は違った。鎖に繋がれた己の体は不自然に固定されており、肌寒いような不思議な感覚がタツマキの体に走り、ようやく気がついた。

鎖に繋がれた自分の身体が椅子のようなものに固定されていることに、そして自身が服を着ておらず全裸であることに。

椅子のようなものに固定されているタツマキは座っているというよりは寝ているような体勢になっており、足は広げた状態で上げられ

ているために女性器が丸見えとなっている。

「っ!？」

「目は覚めた？」

先程と変わらない様子で話しかけてくるシンラにタツマキは羞恥で顔を真っ赤にしながらも、シンラを強く睨みつけた。

「こ、こんなことして、あんた、絶対に許さないから…」

タツマキの言葉を気にも留めない様子のシンラはタツマキに近づき、大きく開かれた足の前に腰を下ろした。

「い、嫌っ！見るな！」

自身の恥部を見られていることにさらに顔を赤くしたタツマキに笑みを浮かべたシンラはタツマキの太ももを掴むと、露出している秘所をぺろりと舐め上げた。

「っひああ!？」

自分でも数回しか触れたことのない秘所に感じた感触に身体を震わせたタツマキの陰部にシンラは再び舌を這わせる。毛の生えていない少女のような性器を嬲られながら喘ぎ声を溢し、身体を震わせるその妖艶な雰囲気もタツマキの見た目の幼さと相まって淫靡さを増幅させる。

「ああっ、あっ、あっ、や、やめて…」

やめない。ぴっちり閉じた割れ目を舐め、軽く吸えば、じつとりと汗をかいているタツマキの身体がビクビクと震える。

唾液の糸を伸ばしながら口を離したシンラは横に置いておいた箱からあるものを取り出す。

「はあ、はあ、…え」

息を切らすタツマキの前に出したのはマイクのような形で取っ手にスイツチが付いている機械。電動マッサージ機、所謂電マである。

シンラが電マを出したのはもちろん肩が凝ったからではない。タツマキも知識としては知っていたのか顔を青ざめさせる。

シンラは先ほどの愛撫によって突起したタツマキのクリトリスにスイツチを入れ振動する電マを近づける。

「あ、ああ、ちよっ」

第十二話

「あ”、あ”あ”…!!」

ぶちぶちと身体を破るように侵入してくる圧倒的な『熱』がタツマキの全身を支配する。秘部からは純潔の証である処女膜が破れたことにより鮮血が流れていた。

長時間をかけて解したとはいえその小柄な体躯と同様に狭く、小さい膣はシンラの肉棒を固く締め付け離さない。

タツマキは声にならない声を溢し、チカチカと点滅する視界に瞳を彷徨わせる。フルフルと震えるタツマキに覆いかぶさるように体勢を変えたシンラはゆつくりと腰を前に動かし、半分も挿入されていなかった自身のモノをタツマキの中へと進ませていく。

「づ…：うろう」

「ぐっ、やば…」

今まで一度も使われたことない奥まで押し広げられる感覚にタツマキは熱い吐息と共に艶やかな声を漏らす。2人の身体の相性が良すぎたのかシンラも珍しく快感に堪えるように歯を食い縛った。

そして、ゆつくり時間をかけて挿入されていたシンラの肉棒がようやくタツマキの最奥へと到達した。シンラは荒い呼吸を短く繰り返すタツマキを抱きしめ、右手で腰付近を、左手で胸を撫でた。

軽く触れただけで身体をビクリと反応させるタツマキの耳を甘噛みし、反応を楽しむシンラは腰を数センチ引くと、ゆつくりと押し戻して再び子宮口に亀頭でキスをした。それを何度も何度もチュツ、チュツと音が聞こえるかのように丁寧に馴染ませるように繰り返していく。

「はうあ、うう、あっ、あっ、あっ」

そのまま数時間。身体中のあちこちから訪れる快感に超能力の使えないタツマキはなす術もなく飲み込まれていった。

子宮口にキスされる度にタツマキは小さな絶頂を繰り返し、苦悶であった表情が次第に快楽に酔う女の顔へと変わっていく。

一度、動きを止めたシンラはタツマキの拘束を解き、身体の繋がったままベッドの上に移動した。今度は押し倒すのではなく、お互いに向かい合って座る様な体勢になる。

「な、何…?」

「いや、まだ俺の完全に入りきってないからさ。こうやった方がもっと奥まで入るでしょ」

「え…?」

シンラはタツマキの腰を掴み、一度抜けるギリギリまで腰を引いた。

「ああ、嘘…や、やだ、やだあ」

タツマキは嫌々と首を振り、力の入らない身体をくねらせるが、それを無視してシンラは数時間のキスで開いた子宮口目掛けて肉棒を容赦なく突き入れた。

「んおお あ あ ああ!!?」

子宮口をこじ開け根元まで完全に挿入されたシンラの肉棒がタツマキの下腹部からお腹にかけてぼこんと浮かび上がる。

シンラは己の身体とベッドに挟まれたタツマキに向けて激しいピストンを繰り返す。パン、パンと肉と肉がぶつかる音とぐちゅ、ぶちゅと愛液の淫靡な水音がタツマキの絶叫と共に部屋に響き渡る。

「うあ あ あ ー!!?!ひいあ あ!んあ ああ!?!」

ぐちやぐちやに狂った思考回路から絶え間なく送られてくる快感からなんとか逃れようともがくタツマキだが、まるで釘打ちのように身体を抉ってくるピストンにすべに動きを止められる。

「お っ!!?!っつあ あ ああ!!?」

そして、10秒も経たないうちにタツマキは声を張り上げ絶頂した。シンラは強くなった締め付けを感じながらもピストンを止めず、むしろより強くしてタツマキを犯し続ける。絶頂の最中にも積み重なってくる快感にタツマキは再び絶叫する。

「い あ あ あ ああ!!やめてえええ!!!今イ” ってるからやめてえ!!死ぬ!!ほんとに死んじやうからああ!!!」

涙と唾液を流し、目を剥くタツマキの必死な懇願を無視して、シン

「…………え？」

今の声は？自分のでも目の前の男の声でもない。だが、タツマキは今の声を知っていた。反射的に声の聞こえてきた方を向けばそこにはうなじにかかる程度の黒髪に自身とよく似た目をした女性。

「フ…フキ？」

最愛の妹であるフブキがそこにいた。

「な、なんで…？」

タツマキの震えた疑問の声に微笑んだフブキは着ていた服を脱ぎ、シンラに近づくと首に腕を回してキスをした。シンラもそれを受け入れ、舌を絡ませる。

タツマキはその光景を啞然とした顔で見つめる。

「んん、ぷはっ…ふふ、彼と触れ合うと気持ちいいの。認められると気持ちいいの。褒められるとイツちゃうくらい気持ちいいのよ。だから…お姉ちゃんも一緒に気持ちよくなる？」

フブキはタツマキの肩に手を置き、幸せそうな笑顔で語りかける。その瞳に写る自分の顔は一体どれだけ酷い顔をしているのだろうか。

「あ、あはっ…あはははは」

かすれた気持ちの悪い笑い声がタツマキの口から漏れ出した。最愛の妹はもう自分を見ていない。否、見てはいるのだろうが、その扇情的な瞳に写っているのは自分ではなく目の前の男。絶対的であった超能力も、S級ヒーローとしてのプライドも、守ると決めた妹も、奪われるように意識から抜けていく。

「えへ、ふふ、あはははははははは！」

最後に残ったのは認めたくなかった最高の快感と目の前の男にめちゃくちゃに犯されたいという女としての欲望だけだった。

「…ほんとは気持ちよかった…だから、お願い…します。私を、…抱いて…」

涙と笑顔に歪んだ表情でタツマキはシンラを求める。シンラも同じように歪んだ笑みで答えた。タツマキに覆い被さり、今日一番の勢いでタツマキの身体に肉棒を突き入れる。一瞬で最奥まで到達した肉棒は精液と愛液を掻き出しながらピストンを続けた。

「あ”あ”あ”あ” ああんんん♡!!?あ”あ” ー ー♡!?!んん
ひいいいあ”あ” あああ♡♡♡!?!”

嬌声を上げ、舌を伸ばし、目を剥きながらも笑顔で快楽を受け入れるタツマキ。感覚のない手足はいつのまにか目の前の男の身体を抱きしめており、度重なる快楽にすでに身体は限界に達している。

「んあ” あー ー ー♡!!んっ?ん ー ー ー♡!!”

タツマキの口をキスで塞いだシンラはベッドに押さえつけたタツマキの身体を潰してしまうほどに腰を強く打ち付ける。何度も何度も膣内全てを犯し、タツマキの小さな身体を貪り続ける。

「んんっ♡!!んはああ!!イ、イクっ!!あ”あ” あ” あああイクイクイクイク」

涎を垂らしながら唇を離れたシンラはピストンの速度を上げ、抉るようにこじ開けた子宮の最奥に精液を解き放った。

「イっ♡??っ♡??っ♡??” う” う” う” ううううう ー ー ー ー♡♡♡!!”

悲鳴のような嬌声を上げ、痙攣するタツマキにシンラは外に溢れないように腰を密着させ、精液を一滴残らず流し込んでいく。

「んんほお…あ、あへ♡」

あまりの精液の量に腹を膨らましたタツマキからモノを抜いたシンラは死んでしまわないようにタツマキの身体を少し回復させた。

秘所からシンラの子種を流し、失神しているタツマキの髪をすくったフブキは精液と愛液に濡れたシンラの肉棒を咥え、掃除する。

「んちゅ♡んぷっんん」

シンラを見上げ、肉棒を咥えたままフブキは幸せそうに喘ぎ声を漏らすタツマキに目を向けて妖艶に笑った。

第十三話

「な、なんだお前は！この私が誰か分かっているのか！」

垂れ下がった目の小柄な中年の男が唾を撒き散らしながら吠える。彼の名はゼイミートと言い、ヒーロー協会の重役である。

「だが、自らの地位を嵩に懸け、セクハラやヒーロー協会への寄付金の不正使用などの汚職を繰り返している。また、重役というその席も罪も無き市民から奪った金で買ったものに過ぎない」

ゼイミートの前に立っている男が淡々と言葉を紡いでいく。こちらもゼイミートよりは若いが中年の男。ジャージ姿におもちやの王冠。ボロボロのマントを羽織るその姿は高価なスーツをきたゼイミートと見比べると貧富の差を顕著に感じるが、その目は力強くゼイミートを睨みつけている。

「な…だから、何だというのだ！私は最前線で悪と戦い市民を守っているんだぞ！市民が私に金を払うのは当然の義務だ！その金を使って何が悪い!!」

「ほう…では今、戦ってみるといい」

男がゼイミートに手のひらを向けるとヴヴン、という音と共に一つの光球が浮かび上がった。

「ヒ、ヒイイイ!?!」

その言いようも知れぬ恐怖にゼイミートは腰を抜かし、その場へたり込む。

「悪…いや、クズめ。我が君から授かりし、神通力の裁きをもってこの世から消え失せるがいい」

男の手のひらから放たれた光球はゼイミートの体を削り取り、細胞の一片すら残さずにこの世から消し去った。

「ひ、ひゃあ、あ…」

「うう…」

ゼイミートに連れられていた2人の女性が小さく悲鳴を上げるが、

男は一瞥もせずに通り過ぎていく。

『災害レベル：竜　　“ホームレス帝”』

S級ヒーローをも圧倒するであろう男がその場を後にするのを、路地裏の影から一人の青年が覗き見ていた。

その飢えた狼の如し瞳は、ホームレス帝の背中を見えなくなるまで睨み続けていた。

ドツ、という鈍い音と共に左胸に違和感を感じ、シンラは目を覚ました。

目を落とせば自身の左胸には包丁が突き刺さっており、それを刺したであろうタツマキがフーフーと息を荒く吐いていた。

眠りにつく前には幸せそうに涎を垂らしていたタツマキだったが、正氣に戻ったのか、あるいは戻ろうとしたのか超能力のないまま何とかしてシンラを殺そうと試みたのだろう。

「…」

「あっ」

シンラは刺さっていた包丁をゴミでも取るかのように軽く抜くと部屋の隅へと放り投げ、片手でタツマキの頬を挟むように掴んだ。白く柔らかな頬がむにゅ、と形を変え、唇が差し出される。

胸の傷など最初からなかったかのように綺麗に消えているシンラはその突き出された小さな唇に吸い付き唾液を啜った。

「んんちゅ、ぢゅる、んああ」

抵抗は無い。シンラは空いている左手をタツマキの臀部に伸ばしそのまま人差し指を女性器…ではなく、それより後ろにあるもう一つの穴へと侵入させた。

「アッ!？」

自身の尻穴、アナルの中をグニグニと刺激される感覚にタツマキは身体を震わせる。クチュ、グチュと卑猥な音を立てながら解されたアナルから指を抜き、シンラはそそり立つ雄の象徴をヒクヒクとしたタツマキのアナルに挿入した。

「おううう!!」

力強く締め付けてくる肉を無理やり押し広げるように肉棒を突き入れる。

「やああ!ああ!イイイイ!!」

ズブズブと飲み込まれていく肉棒がタツマキの内臓を貫いていく。分泌された腸液がシンラのモノに纏わり付き、舌を出したタツマキは苦しげに息を吐く。

根元まで挿入された肉棒がコツ、コツと奥を叩く。

「ぶぐっ!?!ぎい!お、お尻、壊れちゃううう」

「ぐ……こちでやるのは初めてだけど、結構良いね」

シンラはタツマキの膝裏に腕を入れ、膝裏を肘で、頭を両手の平で固定し、肉棒をギリギリまで引き抜く。プリプリとした腸内を引っかきながら後数センチで抜けるといったところで再び奥まで肉棒を突っ込んだ。

「あ”っ……………」

ボコンとお腹が膨らみ、ぷしゃあ、とタツマキが潮を吹き、ガクガクと震える。しかし、シンラは奥まで入った肉棒をまたもやギリギリまで引き抜いた。

そしてまた強く突き入れる。ズパン!、と肉のぶつかる音が鳴り、またギリギリまで引き抜かれる。グポツ、ズパン、グポツ、ズパンとタツマキの小さな身体の中を凶悪な肉棒が何度も貫いていく。

「おおっ♡お”っ♡あ”っ♡えあ”♡あ”あ”っ♡あ”っ♡」

内臓を擦られるような感覚と共に射精する。漏れ出す粘性の液体がタツマキの胃に注がれ、膨らんでいた腹がさらに大きくなっていく。

敏感になった肉棒を射精しながらも動かし、残っている精液を全て

吐き出す。

「が…はあ…ああ…あ…♡」

涎をダラダラと垂らすタツマキの向きをアナルに挿入したまま向かい合うように変え、きつく抱きしめ、その涎だらけの唇を啜る。

「んぷっ♡じやる、れろ、んん♡」

意識のないタツマキの口を味わい尽くすのには長い長い時間がかかった。

精液やら体液やらで汚れたタツマキの身体をフブキとリリーが風呂場に連れて行ったのを確認し、ラフな格好に着替えたシンラは瞬間移動でB市の高層ビルの頂点に降り立った。

シンラの肩にはポチがしがみ付いており、グルルと唸っている。

見下ろす先には一人の青年と二体の怪人。巨大なムカデ型の怪人が黒い学ランを着た不良風の青年、S級ヒーロー金属バットを鋭い鉤爪や甲殻に包まれた長い体を使い攻撃している。

金属バットは攻撃を受けていると言うのに反撃することなく微睡んでいる。おそらくはムカデの後ろに隠れているラフレシアのような植物型の怪人の能力だろう。

吹き飛ばされ、乗り捨てられた車に突っ込んだ金属バットだったが、自らの得物であるバットを自分の額へとぶつけた。

臙げだった意識が覚醒し、その眼光が力強く二体の怪人を貫く。

「んなあ!?!復活しやがったぞお、しかもさつきよりもパワーが上がって…」

「そんな簡単に私の催眠が解けるはずは…何をした!」

「何をしたかだと…?気合入れたただけだ。気合があれば大抵のことはなんとかなるんだよ」

金属バットの謎理論に覗き見ていたシンラも苦笑を浮かべる。

金属バットは狼狽えていたムカデとラフレシアをフルスイングで吹き飛ばし、叩き潰した。

「うん…良いね。素直に仲間になってくれそうにはないけど、一応勧誘しておこうかな」

シンラはトンツ、と屋上から飛び降り、金属バットの前に着地する。

「っ!?! テメエは!」

「やあ金属バット。くだらない仕事を押し付けられたようだね」

「…さっきの奴らはお前の差し金か? 新しい正義だかなんだか知らねえが、人質取ろうなんざあ腐った根性してやがる」

「勘違いだよ。危害を加える気は無いし、ことが済めばすぐに解放する予定だから…まあ、手段が少し手荒になってしまったのは事実だけどね。あとで注意しておくよ」

「…何が目的だ?」

「前に言っただろ? 現ヒーロー協会を潰し、新たな正義を確立させる。本当は人質なんて手段は取りたくないんだけど、ヒーロー協会の汚さを民衆に理解してもらおう必要があるからね」

「理解だあ?」

ニコニコと朗らかな笑みを浮かべるシンラを金属バットは訝しげに見る。

「確かに、俺はその気になれば今すぐにでもヒーロー協会を壊滅させることができるけど、そんなことをしても意味が無い。ただの暴力主義者を民衆が支持してくれると思うかい? 新しい正義が生まれるには現在の正義を壊す過程が必要なんだよ」

シンラの肩に乗っているポチはシンラの言葉を理解しているのかしていないのかは不明だが、コクコクと首を縦に振っている。

「怪人が発生した時、現ヒーロー協会が重役やスポンサーのいる地域を優先してヒーローを送っていることを知ってるかい? その親は協会に多額の寄付金を出資していてね。誘拐されたとなったら協会は焦燥に包まれ、すぐさま救出態勢に入るだろう。たとえば…危険に晒されている民間人がいたとしても」

まあ、怪人協会という餌に釣られて配下となった怪人たちには『罪

もない民間人には手を出すな』と『倒したヒーローは殺すな』の命令をサイコスに出させているが。協会が勘違いしてくれればそれだけでいい。

万が一その二つの命令を破れば即刻排除する予定でもいた。

と、そこでモヒカン頭の男とパイナップルの衣装を見に纏った男が現れた。シンラの記憶にはない。下位ヒーローだろう。

「金属バットさん！助太刀に…」

「話はいいいからその親子連れてさっさと逃げろ」

下位ヒーロー二人はただの民間人に見えるシンラに明らかに敵意を向けている金属バットに困惑するが、言われた通り親子を背負ってその場から離れようとする。

「ああ、ダメだった」

シンラがパチン、と指を鳴らす。ただそれだけ下位ヒーロー二人は気を失い、その場に倒れた。金属バットは驚きながらも一歩踏み出したシンラの脳天目掛けてバットを振るった。

第十四話

ヒーロー協会各支部は相次いで発生する怪人の反応と報告に混乱状態に陥っていた。

「どういうことだ！何故こんな急に怪人たちが…」

「各地でも担当のヒーローたちが向かいましたが、戦果は著しくありません。最低でも災害レベルは虎…いえ、鬼の怪人が多数出現しています」

「くそ…」

ただでさえヒーロー協会重役の息子が誘拐されているというのに、と指示を飛ばす支部の最高責任者の男は握り拳をモニターに強く叩きつける。

「しかし…妙だとは思いませんか？」

薄紫色のシヨートヘアをした役員の女性が男に問いかける。

「何がだ？」

「災害レベル鬼の怪人が複数現れたというのに、民間人の被害はゼロ…応戦したヒーローたちも負傷者はいれど、死者はいません。怪人たちの動きも変に規則的というか、まるで操られているかのような感じがします」

「…確かに」

「怪人が向かうルート割り出しました。S級ヒーローへの救助要請をお願いします」

「む…」

責任者の男は怪人を監視しているモニターを見つめ、数秒思索する。責任者とは言っても一支部のトップでしかない自分が勝手にS級に指示を出すのは躊躇われる。しかし、そんなことも言ってもらえない。

「…連絡可能なS級ヒーローに救難連絡を！怪人の到達地点を送れ！」

「はー…」

元氣よく返事をした女がS級ヒーローに緊急要請を送り、その陰でメディアに自身の持つ情報をリークしたことには誰も気がつかない。トロンと溶けた目の奥にはハートが宿りこの場にはいないある人物をモニターの奥に見ていた。

「はあああ！ 神鈴掌！！！」

少女の突き出した両手の掌が目の中の金髪の男の腹部に直撃し、一瞬の静寂の後にリングの外まで吹き飛ばす。

壁へとぶつかった衝撃で髪留めになっている大きな鈴がシャン、と鳴り同時に歓声が轟いた。

『決まったああ〜！！観客の予想を裏切り、現役A級ヒーローを倒し一回戦進出を決めたのは今回初出場の紅一点！リンリン選手だ〜！！』
実況の声に合わせて礼をしようとしたが、嬉しさと共に思い浮かべた愛すべき師が頭を撫でてくれるのを想像してびよんびよんと飛び跳ねてしまう。シャンシャンと鈴が鳴り、自然と顔が綻んでしまう。『思わずと言った様子で喜ぶリンリン選手！これは男性ファンも増えることも間違いなしでしょう！』

知らない。私の一番は後にも先にも一人だけだ。

そんなことが脳裏に張り付き、一瞬真顔に戻りリングを後にする。

「ふふふ、やったあ〜。師匠喜んでくれるかな」

少女、リンリンは艶を含んだ声を出し、取り出した一枚の写真にキスをした。

『えーと、ここで新しい情報が入りました。…え!!…し、失礼しました！A級ヒーロー雷光ゲンジ、ステインガー、ツインテールが意識不明の重体とのことです。そ、それにS級ヒーローの戦慄のタツマキ、メタルナイト、金属バットが行方不明とのことです…不安です！我々の生活に安全は戻ってくるのでしょうか！詳細が入り次第お伝えします』

「戻ってくるさ。俺が本当の平和つてやつを作つてやるよ」

ブチッ、とテレビの電源を切りキャスターの言葉を遮ったシンラは胸に抱いていたタツマキと唇を合わせた。シンラの胸にピタリと張り付き口と舌を突き出すその姿には反抗心の欠片も無く、少女の如き小さな身体で男に尽くすタツマキには背徳的な色気が纏っていた。

その部屋にいるのはシンラとタツマキだけではない。シンラが横に目を向ければシンラの腕を抱きしめ胸に挟むフブキが、下を向けば自身の肉棒に口をつけ奉仕をする三人の女性が。

「んちゅ♡んん♡んはあぁ♡」

「エロ♡レロ♡ンレロ♡」

「んぷっ♡うんん♡ヂュル、ヂュルルル♡」

柔らかな唇を這わせるモスキート娘、長い金髪を乱した弩Sの長い舌が肉棒に纏わり付きとぐろを巻く。それでも尚はみ出している亀頭にモスキート娘と弩Sを挟んだ真ん中にいたりリリーがむしやぶりつき、ひよつとこ顔で吸い上げている。

もちろん全員が一糸纏わぬ裸だ。

シンラは美しい姉妹の舌を受け入れ、グチャグチャと音を立てて舐り合う。味を識る為の器官が互いの唾液を貪欲に啜り、味を確かめ合う。

微かに感じる甘みが絡まり合う熱の中に溶けていき、蓄積されていた快感が爆発する。

ブピュ!!ビュルルルル!!

勢いよく放たれた子種はリリーの口を一瞬でパンパンにし、リリーの口から離れるが未だ続く射精によってモスキート娘と弩Sとリリーの顔に精液が降り注ぐ。

粘液塗れとなった顔で淫靡に笑う三人は再び肉棒に擦り寄り先っぽから垂れている白濁液を舌で舐めとった。

口と口に唾液の橋をかけながらタツマキとフブキから顔を離れたシンラは何でもないような顔をしながら足をガクガクと震わせ、股から愛液をダラダラと垂らすタツマキをベツトに押し倒した。

ピン、と勃つピンク色の乳首を口に含みチュウチュウと吸いながら、濡れている秘所に手を伸ばし指を二本挿入する。

「——ッア!!!」

耐えるつもりだったのか口を紡いでいたタツマキの我慢は瞬息よりも早く解かれ、意思を持つ生き物のように蠢く膣内を指で激しく刺激する。

グチャグチャグチャグチャと音が鳴り、少し硬くなってきたタイミングでクリトリスを強く摘む。

「っああああああああん♡♡♡!!!」

タツマキは腰を大きくのけ反らせブシヤアア、と派手に潮を吹いた。シンラは痙攣し大の字に倒れるタツマキの膣に待たせたとばかりに肉棒を挿入した。

「んん♡♡！おおおお♡ぎ、きたあぁ♡中に入ってきてくりゅう♡♡♡」

トロトロに蕩けた極上の性器がシンラの欲望を向かい入れる。子宮口をこじ開け、根元まで挿入したシンラはあまりの快感に深く息を吐く。

ミチミチ、という音が聞こえそうなほどきつく締め付けられる肉棒をゆっくりとストロークしながら目の前の上気している小さな女体に覆い被さる。お互いの生身がピタリと密着し、タツマキの絹のようにスベスベで小柄ながらもモチモチとした柔らかい肌を全身で感じながら腰を動かす。

「あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡」

奥に触れる度に微かな喘ぎ声を漏らすタツマキにシンラは彼女の中にある一部分が更なる熱と硬さを持つていくのを感じる。

サラリとした翡翠の髪を撫で、舌をタツマキの胸元に這わせる。乳房をゆつくりと味わっていき、そのまま脇をペロリと舐める。

「んっ♡!?!」

より柔らかな部位に唇を落とし、震えるタツマキの脇をペロペロと愛撫していく。

「ふわあ♡ああ、ああああ〜♡」

ジワリと浮かぶ汗も舐め取り、ヂュルルルと啜れば涎を垂らすタツマキが絶頂し膣内を締め付ける。

「あ…うう」

再び舌を這わせ、小さな胸の突起を愛撫しつつ、もう片方の脇へと向かう。

「ひゃ、らめ…」

力の入らない腕でシンラの肩を押さえるタツマキだったが、シンラはその手を恋人つなぎのように掴み万歳をさせるようにタツマキの頭上へと押さえつける。

そして、大きく開かれたもう一つの脇をしゃぶり、ヂュルヂュルと吸い上げた。

「ふにゆううああああああ〜♡♡♡!」

甘酸っぱい味が口内に広がり、それが残っているうちに今度はタツマキの唇を奪い、ゆつくりだったストロークを徐々に早めていく。

クチュクチュ、グチュグチュ、ズチュズチュ、パンパン、ズパンズパンとピストンの音が激しくなっていく、ゾクゾクと射精感が強まっていく。

「出すぞー!タツマキ!!」

「らひて!!らかにらしてえ〜♡!!」

ドピュルルルルルルルルルルルル!!!

ダムの洪水のように自身から流れ出る白濁色の粘液がタツマキの中を情欲に染め上げていく。下腹部が膨らみ、子種を求める子宮が溢れ出す精液をゴクゴクと飲み干していく。

「んぢゅ、ちゅ、んん、あ、ああ…♡」

口内を嚙られながらタツマキはハートマークを宿した目をぐりんと回し、白目になって失神した。

三分ほど経ち、ようやくタツマキから離れたシンラの胸に黒髪の美女が飛び込む。

「フブキ」

「もう、お姉ちゃんばっかり」

「ふふ…ぶめんって」

可愛らしく頬を膨らますのはタツマキの妹、フブキだ。

「ん…」

すぐに顔を綻ばせたフブキはシミひとつない裸体をシンラにすり寄せ、啄むようなキスをする。唇が触れるだけのキスを何度もし、それだけでフブキの身体が上気していく。

シンラはフブキの大きな胸を揉みしだく。たぶたぶと擬音がつきそうなほど柔らかい乳房が形を変え、くりくりと乳首を愛撫すればフブキの身体は完全に性欲を受け入れる状態になる。

フブキは長い足を上げ、I字バランスの体勢になり、丸見えになっている女性器をシンラに見せつける。シンラはドクドクと脈打つ己のモノを思い切り蜜壺へと突き入れた。

「んあ”あ”あ” ああん♡♡♡！」

ズポツ！と音を立てて肉棒が挿入され、間もなくピストンを受けるフブキな身体は崩れ落ちそうになるが、シンラが抱き止め、地面につけている片足をガクガクと震わせながらシンラのピストンに耐える。

上げられたフブキの片足を肩に乗せるように固定し、左手で後頭部を押さえキスをし、右手でダブンと揺れる乳房を驚掴みにする。

タツマキほどの締め付けはないが、子宮までが長くシンラの長大な肉棒を満遍なく受け入れることのできるフブキの膣も実に名器である。

プリプリの膣壁にモノ全体を刺激され、精を解き放った。子宮口に当たっている肉棒の先から最奥まで精液が注がれていくのをしつかりと感じながら最後の一滴まで出し切り、暫く蓋をする様に挿入したままお互いの舌を絡ませ合った。

ゼリーののように濃厚なシンラの精液は抜いた後もフブキの中から垂れることはなく、彼女の中に残っている。

フブキは熱を感じる己の下腹部を撫で、力なく倒れる姉の隣に身体を沈めた。

次に飛び込んできたのは髪留めを外し、ストレートになっているリリーだ。

「はぶっ!!んちゅ♡ーぢゅる♡!!」

己の精液やタツマキとフブキの愛液に塗れた肉棒に吸い込まれるようにしゃぶりついたリリーを見て、シンラは苦笑しベッドに寝転がり、リリーに股をこっちに向けるように言う。

リリーは目にハートを浮かべ、亀頭を口内に含みながら頷き従った。

シックスナインの体勢になり、シンラは目の前に来た未成熟なマンコを一舐めし、溢れ出す愛液を吸い上げていく。

甘いような酸っぱいような味を感じながら、伸ばした舌で入り口付近の壁を舐め回す。

「んんん♡♡んちゅる♡ぢゅるるる!!!♡♡」

小さな口で肉棒を頬張り、フェラをするその姿は14歳とは思えぬ淫乱さで情と欲に支配されているリリーは多幸福感に包まれていた。

シンラは狙いを後ろの穴へと変え、ヒクつくリリーのアナルに舌を入れた。ビクン、と反応するリリーだが負けじと首を動かしてストロークを強めていく。

淫靡な水音が続くが、それは唐突に終わりを迎える。リリーのアナルから舌を抜いたシンラは立ち上がり、今までとは段違いの激しさでリリーのマンコを啜った。

「ヂュル!!ヂュルルルル!!ズルルルルルル!!!」

「んほおおおお!!♡♡♡」

いる弩Sは息を荒げながらも指示に従い動きをピタリ止める。プルプルと震え、ジワリと汗を浮かび上がらせる弩Sを尻目にもたれるように身体を後ろに倒すといつのまにか回り込んでいたモスキート娘の柔らかな肢体に包まれる。

「はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡」

餌を前にした動物のように荒い息を零す弩Sから視線を外し、上を向くと同じように覗き込んでいたモスキート娘と目が合う。

「うふふ♡可哀想に、彼女もう貴方のチンポのことしか頭にないわよ」
妖艶に笑うモスキート女の赤い舌がシンラの口に侵入する。形のいい乳房を押し付け、艶かしい舌の淫技が身を任せるシンラの口内を侵していく。

「ふっ♡ふう、む…♡ちゅ♡」

大きく開いたお互いの唇が合わさり、舌が交差する。

「んん…ぷはあ♡」

ちゅ…と蚊のような吸引が終わり、萎えることなく更なる硬さを持ったシンラの陰茎がビキビキ、と早く女を蹂躪させるとばかりに主張する。

「はっ♡はっ♡ご主人様あ♡私…もう」

自身の入り口に触れるシンラの凶悪なモノを感じ、熱い吐息を漏らす弩Sの懇願にシンラは弩Sの引き締めながらも肉付きの良い腰を掴み、仕方がないとばかりに啜う。

「まあ、お前にしては我慢した方だな。ご褒美やるよ」

「あ、ありがとうございます♡ごございます♡」

「じゃあいくぞ…5…4…」

永遠にも思えるほどのシンラのカウントダウンを聞く弩Sはその黒い双眸にピンクのハートを疼かせ、主人の支配を今か今かと待ちわびる。

「3…2…」

ズポオ!!

凄まじい勢いで腰を落とされ、シンラの剛直が一気に弩Sの中を貫き子宮口を押し潰した。

「は……は、え……?!?」

一瞬の混乱の後、とてつもない快樂が津波のように秘所から全身に行き渡り、弩Sの脳を覆った。

「んっっっほお” お” お” お” お” おおおお♡♡♡♡?!?!”

カウントダウンを無視した不意の一撃に弩Sは絶叫し、派手な潮を吹いた。その潮を受けたシンラが顔についた液体をペロリと舐め、震える女体を押し倒した。

ベッドとシンラに挟まれた弩Sにシンラは容赦ないピストンを食らわしていく。弩Sの首に巻かれたチョーカーごと首を軽く絞めると、呼応するように膣内もきつく締まっていく。きつくなった壁をゴリゴリと削れば弩Sは目を剥き濁音の混じった声を上げた。

「ぎいーん” おおーあ” あ” あ” ああ!!!んひいー!こわれりゅうう!!
おまんここわれりゅうう!!”

肉のぶつかる音と嬌声が何度も響く。ビクンビクンと身体を震わしシンラが一突きする度に絶頂する弩Sは既に限界を超えており、絶叫も無くなり呻き声を漏らすのみだ。

「お……ああ、おとお……♡”

それでもシンラは止まらない。動きのなくなった弩Sの魅惑的な肉体を蹂躪し犯していく。乳首を吸い、胸を揉みしだき、トドメとばかりにだらしなく開き切った口をキスで塞ぎ、遠慮ない中出しで精を放った。

ドビュルルルルル!!!

「っっ——♡♡♡♡!!!??”

パンパン、と射精しながらも腰を動かし、たっぷり時間をかけて徹底的に種付けする。二つの胸を揉みながら失神している弩Sの唾液を舌ごと吸引する。

ズルルと肉棒を抜き、余裕の面持ちのモスキート娘がM字に開いた股をシンラに見せつける。精液と弩Sの愛液に塗れた肉棒は抵抗なくモスキート娘の膣に挿れられた。

モスキート娘を抱き上げ、向かい合う形で交尾を始める。先ほどの弩Sとの性行とは打って変わってゆったりとしたストロークに、ディーブながらもスローなキスがまた違った淫猥な雰囲気纏い、ヂュル、チュウ、パチュ、パチュ、と唾液を啜り合う音とゆったりとしたピストン音のみが部屋に広がっていく。

何分、何十分と続く淫行。

ビュル、ビュルルルル

激しきこそないものの、モスキート娘の中を満たす量の精液が発射されシンラとモスキート娘は強く抱きしめ合う。

繋がり抱きしめ合ったまま、大きなベッドに倒れ込みチュウチュウとキスを余韻を楽しみながら続け体液を交換する。

極上の女体を立て続けに味わったシンラはふう、と息を吐き、ベッドに身体を倒した。広いベッドに未だに倒れるタツマキを右胸に抱き寄せ、反対側にいたフブキを左胸に、端にいたりりをフブキの下に、大の字に倒れ金髪の乱れたあられもない姿の弩Sをタツマキの下に、そして唯一まだ意識のあるモスキート娘がシンラの股下に潜りその陰茎を咥え込んだ。

あちらこちらから感じる柔らかさと己のモノに纏わり付く快感に包まれながら、シンラは眠りについた。

第十五話

シンラの突き出した舌にタツマキの舌が絡みついた。

椅子に座ったシンラに跨ったタツマキは腰を淫らに動かし、キスを続ける。

「ちゅ、る。じゅるる」

「…もう3時間はそうしてるけど、疲れない？」

「…フン。貴方だつてずっと反応してるじゃない」

シンラの問いにタツマキはゴクリと唾液を飲み込み、その身体を擦り寄せた。ビクビクと脈打つシンラの肉棒に股を押し付け、再びキスをする。首に手を回し、息の続く限り啜り合い、息を荒げまたキスをする。

もうタツマキには反抗心の欠片も残っていない。封じられていた超能力も既に戻され使うことができるが、その超能力をシンラの肉体の強化や体位を変えるために使っていることから超能力は戻っても落ちた身体と心はもう戻らないということが察せられる。

昨晚のような派手なアへ顔は鳴りを潜め、冷たい表情のタツマキ。まあ、やつてることは男の上に全裸で跨りキスという娼婦のように淫乱なものだが。

「んん、ふっ、ちゅ、れろ」

かれこれ3時間もの間シンラとタツマキの口淫は続いており全裸の二人の体にはうっすらと汗が浮かんでいる。

ギユウウ、と抱きしめ合いタツマキの慎ましい胸がフニフニと形を変える。

当初の強気な態度を残しつつも純情になった美少女の抱擁にシンラの一部が熱を持ち、硬くなる。

ズツ、ズププププ

「ああああ〜♡♡♡」

挿入されたシンラの肉棒によってタツマキの細いお腹がボコリと

膨らみ、クールな無表情が一瞬で崩れる。何度も犯されたはずの膣内は初めてのよういきつく締めまり、子種を求めるようにパクパクと開く子宮をシンラの肉棒が潰し、抉り入る。

ズチュ、ズチュと愛液が掻き出され補充するように出されたシンラの精液がタツマキの子宮に充満する。

「ああっ♡はああ♡はあ……っんぎい!？」

再び始まったピストンがタツマキの身体に襲いかかり、小さなお尻を両手でガツチリと掴まれ何度も何度も腰に叩きつけられる

「ああああ!!イ、イグツッ!イグウ!イツでるっ!イツデルツからああっ♡!!」

歯を食いしばり絶頂したタツマキに休みを与えることなくむしろピストンを早めていく。キュウキュウと閉まる膣内をこじ開け、暴れる小さな身体をガツチリとホールドする。

「あがあ♡が、ぎいイ♡ふぎ!♡いいいい!!♡」

ぐちやぐちゆぬちよぐちゆぐちやぐちよにちやぬちや。

シンラが腰を引くたびに粘性が強くなっていき、大口を開けたタツマキの絶叫も強くなっていく。

「ああああああ!!」

ドピュルルルルルル!!!

精液で溢れていた子宮に更なる白濁液が注がれる。隙間なく密着され蓋をされたタツマキの中に大量の子種が溜まっていき、下腹部が大きく膨れる。

「ああ…あ…か…はっ…♡」

タツマキがガクツ、と失神し崩れるがまだ離れない。タツマキの腰に手を添え腰を密着させたままぐりぐりと子宮全体に子種を馴染ませていく。

失神しているタツマキの口内を舐め回しながら、種付けすること30分。ようやく意識を取り戻したタツマキが臃げな表情のままシンラの口を吸い返す。

紅潮した全身にトロンとした瞳。メスの顔をしたタツマキに指を

しやぶらせ、唾液に塗れたその指をタツマキのアナルに挿入する。

「お”っ♡♡ー!”

タツマキの腸内で弧を描くようにクリクリと指を回し、肉棒の入ったままの膣側の壁を執拗に刺激する。

「あ”あ”あ”あ”♡そこ、だめ…♡また…イクッ”

シンラの胸に爪を立てたタツマキが三度ビクンと震える。プシヤ、と潮が溢れ、涙を流すタツマキ。しかし口は弧を描き、だめと言いながらも自分から腰をくねらせ始める。

シンラは指を二本に増やし、激しくタツマキの内部を引つ搔き回す。じゅぽ、ぐぽと音が鳴り、舌を突き出したタツマキの口から嬌声が愛撫によつて引き出されていく。

「んお”お”お”お”♡♡!!お”っ♡お”、はあ”あああ♡!”

カクカクと砕けた腰が痙攣し、蕩けたタツマキの脳が快楽の鎖に絡め取られる。身体も心も、脳も。全てを支配されてなお、幸せそうに笑う彼女が絶頂するタイミングでシンラは素早く愛撫をやめ、膣からモノを抜いた。

「は…え…っ…”

あまりの速さに何が起きているのかまだ理解できていないタツマキの向きをくりと変え、バックの体制となったシンラはタツマキの両手首を掴みヒクヒクといやらしく開くタツマキのアナルに肉棒を突っ込んだ。

ボコッ!!

そんな音が聞こえるほど強く挿入された肉棒はタツマキの胃まで貫き、のけぞるような体勢になっていたタツマキの腹部に浮き上がった。

「……お”っつっつ♡♡♡!!!???”

ぐるんと目を剥き、タコの!のように口を窄めたタツマキが尿を漏らすのも気にせず両手首を掴んだ腕を引くと同時に腰を思い切り突き出した。

「んほお”お”お”おおおお♡♡♡♡♡♡!!!?”

肉同士のぶつかる音、粘着く摩擦音、濁音混じりの嬌声。淫靡な音

が全て揃っているかのような空間で翡翠の髪をした美しい女がひたすらに犯される。

タツマキの内臓がシンラの肉棒にかき回され、破れそうなほど響く心臓の鼓動が速度を早めていく。ぼやぼやと霧がかかったような視界には星がチカチカと光り、もはや自分の意思ではどうにもできない女の部分から大量のあらゆる体液が撒き散らされる。

ズパン!!ズパン!!ズパン!!

ドチュ!!ドチュ!!ドチュ!!

グポツ!!グポツ!!グポツ!!

グチュツ!!グチュツ!!グチュツ!!

止まらない激しいピストンにタツマキの小さな身体が何度も限界を迎え、その度に失神と絶頂による覚醒を繰り返す。

一分、五分、十分、三十分、一時間。

一体どれだけそうしていたのかシンラはもちろんタツマキにもわからない。

ただわかるのはもうすぐ終わるということだけ。

「タツマキー!出すぞー!受け止める!!」

「ーーー♡♡??」

高まってくる射精感にラストスパートをかけ、入り口から胃までを肉棒で蹂躪していく。

「カハッ」

タツマキが口から酸素を零したその瞬間

ドプン!!!ドピュルルルルル!!!ビュプルルルル!!!

シンラが今までのものを超える勢いと量の精液を射精した。

「つつつつああがあ”あ”あ”あ”ああああ♡♡♡♡♡!!!?」

大量の精液を注がれ瞬く間にタツマキのお腹が膨れる。胃に満たされた精液がシンラの肉棒で蓋をされミチミチにしまっているアナルの隙間から溢れ出し、逆流した精液がタツマキの口から溢れる。

「う…ふ…あ…アへ♡」

身体中の穴という穴から精液を溢れさせるタツマキに最後の一滴まで子種を注ぎ、気絶しながらもきつく締め付けるタツマキのアナルからようやく肉棒を抜いた。

支えを失いダラリと倒れるタツマキをベッドに寝かせると仰向けに倒れ、丸見えになっていいるタツマキのマンコとアナルからトロリと大量の精子が漏れ出した。

「ああ、もうほんとに…」

シンラは気絶しているタツマキに覆い被さると白濁液で隠れて見えない筋に全く衰えない肉棒を当てた。

「何回抱いても飽きない最高の女だよ。君は」

シンラは迷いなく腰を突き入れた。

「…で？絡繰風情が俺と剣でやり合おうってか？」

着物を着た長身の侍が腰に掛けた刀の鯉口を切る。露わになった刀身が太陽を反射しキラリと光る。

『S級4位ヒーロー “アトミック侍”』

「…」

相對するのは武士の鎧のような装甲を身に纏った二メートルほどのロボット。

カシャン、と外見と合わない軽い音で一步踏み出したロボットが淡く光る単眼でアトミック侍を鋭く睨み、腰に掛けていた刀を次々と抜いていく。

「はっ…んな小細工で俺に勝てるつもりか？」

ロボットの六本の腕に掴まれた六本の刀の切っ先が全てアトミッ

ク侍に向けられる。

「私は戦鬼神GX。S級4位ヒーロー、アトミック侍の首、頂戴致す」

『災害レベル：竜 戦鬼神GX』』

ロボット、戦鬼神GXが人間と機械が混ざり合ったような冷たい声で首切りを宣言する。アトミック侍はニヤリと笑い、啜っていた楊枝をプツと吐き出した。

そして両者が構える。居合の体勢となったアトミック侍にGXが六刀を上段、中段、下段に二刀ずつ構えるという人間では不可能な構えを取って迎え撃つ。

ピユウ、と風が吹き、流されてきた木の葉が二人のちょうど中間地点に落ちた。

直後、耳をつんざく金属音が衝撃波と共に広がり空気を震わせた。

ぶつかり合うはお互いの強靱な肉体のみ。真っ黒い肌の巨漢の繰り出した強烈な右ストレートを全く同じ動作で相殺したのはカブトムシを思わせるフォルムをした怪人、阿修羅カブトだ。

「むうううーやるな！俺の筋肉と互角とは！」

黒肌の巨漢が筋肉を膨張させ、ぶつかり合った拳に力を込め、阿修羅カブトを押し返そうとする。

『S級1位ヒーロー 超合金クロビカリ』』

拮抗する強大なパワーの衝突に超合金クロビカリと阿修羅カブトの足元の地面が陥没し、ビキビキと蜘蛛の巣状にひび割れていく。

「互角う？馬鹿言ってんじゃねえよ」

ニヤリと口角を上げた阿修羅カブトが全身に力を込めるとその巨軀に血管が浮かび上がり甲殻ごと筋肉が膨張していく。

「ぬっ!？」

「この姿はまだ慣れてねえからよお。できるだけ長く楽しみてえんだ」

額の角が槍のように鋭く尖り、甲殻もバキバキと音を立てながら角ばったより硬質な物に、茶色だった甲皮が光沢のある金属質な黒鉄色に変わる。

「だからよお〜…」

「!!?!」

一回り巨大になった阿修羅カブトの腕に押し返された超合金クロビカリが地面を削りながら後方に吹っ飛んだ。

「簡単に死ぬんじゃあねえぞお!!」

阿修羅カブトの叫びと共に超合金クロビカリが無人のビルにめり込み、轟音が鳴り響く。

生物学の天才と機械工学の天才の手によって進化した生物が牙を剥く。

『災害レベル：竜 『阿修羅メタルカブト』』

一人の男が天井、否、地面を切り裂きZ市の地下空洞へと降り立った。金色の長髪がふわりと浮き、鋭い眼光を光らせる。

『S級13位ヒーロー 『閃光のフラッシュ』』

キョロキョロと周囲を観察するフラッシュにはあまり戦意はなかった。あるのは自身の技を軽く見切ったとある男に対する対抗心

だけ。故に今回の指示も特に気負いすることなく試し切りの思いが少しある程度であった。

「…フン。それで隠れているつもりか？ さっさと姿を見せろ」

フラッシュが柱の影に声を投げかけるとゆらり、と二人の男が姿を表した。

「流石だ…よく気付いた」

拍手をしながら出てきた緑がかった長髪の男の額に音を置き去りにした刹那の一撃が突き刺さる。

「…いいぞ。それでこそだ」

それを褒めたのは攻撃をされた長髪の男。瞬きすらも許さないフラッシュの突きを残像を残すほどの凄まじいスピードで回避し、男は天井へと逃れていたのだ。

「まさか今のが最高速か？ ”終わりの44期” 事件を起こした張本人、閃光のフラッシュよ」

「お前たち…そうか」

腕を組んだままの黒髪を逆立たせた男の言葉にフラッシュは得物を構える。

「黄金の37期、疾風のウインド」

「同じく、業火のフレイム」

悠然と名乗る二人、ウインドとフレイムにフラッシュは緩んでいた気持ちを振り払い、殺気と侮蔑のこもった瞳を向ける。

「里の出身者が怪人と手を組むとはな」

「怪人？」

「違うさ」

「俺たちの主人は」

「怪人などではない」

交互に言葉を紡いでいくウインドとフレイム。

「俺たちは忍」

「惚れた主人に使われるための道具」

「せっかく鍛えた忍の技を屑のような奴らのために使つてどうする？」

「お前が何を考えてあの事件を起こしたかは知らんが」

「最初で最後だ」

「俺たちと共に」

「正義の下で永遠に戦い続けよう」

ウインドとフレイムにフラッシュの閃光斬が返答代わりに襲いかかる。それをウインドの二本のククリ刀とフレイムの燃える炎刀が受け止め、目まぐるしい速度の剣戟の応酬が始まった。

「ふはは！残念だ!!あのお方からはできれば殺すなど言われていたが！致し方無し！」

「予定通りに死ね！閃光のフラッシュ!!」

『災害レベル：鬼 疾風のウインド』

『災害レベル：鬼 業火のフレイム』

三つの影が高速で移動し、交差する度に轟音が響き、空気が震える。一瞬遅れて通り過ぎた地面や壁が崩れ、その瓦礫すら衝撃で吹き飛んでいく。

「あのお方だと!? 貴様らの上には誰がいる!? 怪人協会を片付けた後に挨拶に行つてやる!!」

「依頼主ではないぞ!! それに貴様は一度会っている筈だ!!」

ウインドの言葉にフラッシュはピクリと反応を見せ、罅迫り合いを利用し一度距離を取る。地下の水道が壊れたのか雨のように降り注ぐ地下水

が三人の身体を濡らす。

「…まさか」

フラッシュの脳裏に浮かぶのは自身の技を見切った得体の知れない男。

それなりに認めてはいるS級ヒーローの面々を軽く翻弄した奴ならば、フラッシュの記憶に新しい。

「フツ、やはり強いな」

「流星は44期の元トップでS級ヒーローというだけはある」

服が破れた程度のフラッシュとは異なり全身に小さいながらも切り傷を受けたウインドとフレイムが素直な賛称と共にその声を溢す。

「お前らの賛辞などいらん。さっさと怪人化の力を見せろ」

「!……くく、ああ怪人化か」

「はっ、そうか。俺たちが怪人になったと思っっているのか」

クツクツと笑う二人はシュウウウ、と空気を吸い込み静かに呼吸する。すると、流れていた血が止まり、握られた武器の柄がギシギシと軋む。

鍛錬により既に限界値まで鍛え上げられていたウインドとフレイムの身体に痣のような紋様が走り、心臓の鼓動が速くなっていく。

「リミッターの解除。怪人などという醜い姿に成らずとも俺たちは人のまま人を超えた」

「そして……」

ウインドがパチン、と指を鳴らす。滝のように水が溢れていた壁が凍り、氷塊を砕きながら飛び出した白髪の男が冷気を纏った刀をフラッシュに振り下ろす。

当たる直前、残像を残すほどのスピードで回避したフラッシュが奇襲してきた相手の首を斬ろう刀を振りかぶる。その瞬間、轟音が轟き、天井を突き破ってきた雷がフラッシュの身体を飲み込んだ。

「っー」

マントが焦げたがダメージは無い。マントを破り捨て広い道の真ん中に着地したフラッシュを囲うように現れた二人がフラッシュの背後に佇んでいた。

「鉄板の15期、氷結のフリーズ」

「黄金の37期、雷鳴のサンダー」

青髪の冷たい目をした男、フリーズ。黄色のツンツン頭の男、サンダー。二人ともがウインドとフレイムと同じ忍者であり、実力もまた近い者たちだ。

『災害レベル：鬼 “氷結のフリーズ”』

『災害レベル：鬼 “雷鳴のサンダー”』

フリーズは頬に、サンダーは首筋に痣を出現させており、油断なく刀と鉤爪を構えている。

フラッシュの頬に一筋の汗が流れ、地面に落ちる。

そして五人の姿が同時に消え、戦闘音のみが響き渡った。

第十六話

あーもう！何でこうなるんだよ！！

啞えていた棒付きキャンディーを噛み砕き、頭を小さな手でガシガシと搔かながら茶髪の少年が内心で悪態をつく。

『S級5位ヒーロー 童帝』

ただでさえ、怪人協会などと言う組織に重役の息子が誘拐された所為で上層部から苦言を言われ、辟易している頭に他のS級ヒーローたちが好き勝手に動いてしまっているという悩みの種がどんどん放り込まれているのだ。

加えて、金属バットやメタルナイト、実質のヒーロー協会の最強戦力であるタツマキの行方が不明だというのも相まってヒーロー協会は大きな混乱に包まれていた。童帝にとつては捻くれた性格はともかくとして、あの自身と同等以上の天才であるメタルナイトとの連絡がつかないというのはタツマキ以上に驚くことだった。

「あのおじさんが今の状況を理解できていないなんてことはないはず……またヘソ曲がりか……」

決して表舞台に出ることなく、ヒーロー活動も愛用の無人機を使う彼が直接やられたなんてことはほぼ無いだろうし。

「……情報を漏らしたと思われる協会の役員は行方不明……怪人協会なら自分たちの名を知らしめるために名乗る筈……それに怪人たちの行動も支離滅裂で目的が分からない」

考えられるのはやはり以前に遭遇したあの男か。童帝の知識内においてタツマキに勝てる可能性を持つ人物は一人だけだ。

おそらく今回のS級ヒーローの面々が自分勝手な行動をしたのもあの時の敗北がどこか心のしこりになっていたのだらうと童帝は結論づける。

「いや、今は人質の救出が最優先だ」

こんがらがった思考を振り解くように頭を振ってモニターを操作する。

S級ヒーローが行方不明だなんて報道をされた所為で市民からの印象は悪くなり、ヒーロー協会支部の独断のS級ヒーローへの救難連絡によって自負心を持つS級ヒーローたちが本部からすすつ飛んで行ってしまった。唯一残ってくれそうなゾンビマンとも連絡がつかない。

「くそ…どうしてみんな僕の話聞いてくれないんだよ。やっぱり僕がまだ子供だから？」

新しく取り出したキャンディーを舐め、モニターを操作しながら童帝は独り言つ。生まれ持った天才的な頭脳と強い正義感。それをS級5位にまで上り詰め、ヒーローとして正しく使っているはずなのに、募るのはストレスと疲労のみ。やはり子供だからと侮られているのか。

『童帝！早くワガンマ君を見つけ出せ！ヒーローとしての責務を果たせ!!』

『メタルナイトにも連絡しろ！いいな。怪人どもにこれ以上好きにさせるんじゃないぞ!!』

「全く、具体的な解決策も出さなくせに命令だけは一人前でさ」
操作する指は止めずに愚痴を溢す童帝。

「こんなの…僕がなりたかったヒーローじゃ…」

思わず吐いた言葉は草原に吹く爽やかな風に攫われて消えていった。
「!!?」

驚愕に包まれた童帝があたりを見渡すとそこは一面が草原と化した自然の中という先ほどまでいた無機質なモニター室とは正反対の場所だった。

「なっ…何が…」

眼下にあったモニターやスイッチは姿を消し、代わりに色とりどりの花が、機会音は風や川の流れる音に変わり、匂いまでもが澄んだものに変わっている。

「綺麗な場所だろうか？」

鈍った脳を動かそうとしていた童帝に言葉がかけられる。バツ、と振り向くとそこには髪を靡かせる褐色の美形の男、シンラが親しげに佇んでいた。

伸ばした指先に蝶がとまり、優しいな笑みを浮かべるシンラは一枚の絵画のような神秘さと美しさを纏っており、童帝も一瞬混乱していた頭が空っぽになった。

「…これはお前の仕業？ 幻覚だなんて随分と変な技を使うね」

そのおかげか冷静さを取り戻した童帝がシンラに問いかける。

「幻覚？ 違うよ。ここは強い正義の心が具現化した世界、精神世界の中だから現実とは言い難いけどね」

「せ、精神世界!?!」

そんな馬鹿など言いたげな童帝だが、地面を踏みしめる感覚や草の匂いが幻覚という可能性を否定する。

「同じ正義の心を持つものしかこの空間には入れない。童帝。自身の生まれ持った強さは弱きものや大切なものを守るためにあるんだ。だが、お前は？ お前が今守っているものは本当に大切なものか？ 弱きものか？ …俺はお前を否定しない。だが、その間違いだけは正してやる」

「何を…」

「いいや、気づいている筈だ」

新たにかけられた低い声に童帝が顔を向ける。

「己の正義が不安定になっていくのを聡明なお前が気づいていない筈がない」

スタイリッシュな鳥の着ぐるみを見に纏ったそいつはまるで犯人を追い詰める探偵か何かのよう淡々と言葉を紡いでいる。

『災害レベル：竜 〃輪廻転生フェニックス男〃』

機械を通さずともわかるプレッシャーに童帝は冷や汗をかく。間違いない今まで戦ってきた怪人の中で頂点に立つであろう男とその

連絡するな。少し遅らせて命の危機に陥った方が救助された民衆の感謝の度合いも上がる』

シツチさん？何を言っているんだ!?

『む？ああ、この書類は童帝にでも回しておけ。所詮は子供だ。なんの疑いもなく処理してくれるだろうからな』

セ、セキングガルさん？

『いやあああ！誰か！助けて!!』

またもや画面が切り替わり、一糸纏わぬ裸の状態で泣き叫ぶ女性が映し出される。その牢屋のような部屋には女性の他に数人の男が女性を囲むように立っており、そのうちの一人が女性の腕を拘束し、覆い被さった。

『いやあ!!』

知識としては知っている行為が行われる。女性を陵辱し気色の悪い笑みを浮かべる男に吐き気を催すが、目を離すことができない。

「身内から怪人を出した。ただそれだけのことでこの女性は陵辱され、家族はバラバラにされ売られた。こんな非道を知らずのうちにお前は手伝っていたんだ」

いつの間にか映像が消えていたことに気付き、ふらふらとする身体をなんとか支える。

「まだまだあるぞ。金儲けの手を広めるために邪魔な企業にわざと怪人を放ったり、公安機関を乗っ取る為に警察の信頼度を下げたり、中には勝手に上位ヒーローの名を使いまるで自分の力のようにひけらかす者もいる。一番酷かったのは両親を亡くした少女を保護するだなんて言っであんな「フェニックス」:」

舞台役者のように長々と喋っていたフェニックス男の台詞をシンラが遮る。

「:..んん、済まない。私としたことが、失礼した」

目を閉じて一步下がったフェニックス男の様子に先程の台詞の信憑性が変に増してしまった。

「安心:はできないだろうが、先程のクズたちは既に断罪しておいた。もうこの世に細胞の一つも残ってやしない」

シンラの言葉を聞いてか聞かずか呆然と立ち尽くす童帝。

頭にはさまざまな考えがぐるぐると巡る。先程の映像から見覚えのある書類や重役の顔を確認してしまった童帝の砂漠のように乾いた口からはいつものような正解の言葉はいつまで経っても出てこなかった。

すつ、と両頬に手を添えられたことに気づき、童帝はハッと顔を上げた。そして、眼前にあるシンラの双眸に写る自分の姿を見た。

「童帝。お前は何も悪くない。お前はよくやっていた。だが、何も悪くなくても、どれほど我慢して正義を貫いても、周りがそれに答えてくれるとは限らないんだ。…頼む。お前の力が必要なんだ。俺に、力を貸してくれないか？」

目を伏せ、唇を噛むシンラからは全く虚偽の気配が無い。それは当然でこれは紛れもないシンラの本心で、かつての自分の死に際を思い出しているのだ。

そんな本気の感情を、天才である童帝が感じ取ってしまうのもまた必然である。

そんな、自分の目線よりも下から差し出されたシンラを右手を童帝は見つめ、ゆっくり、ゆっくりと、手に取った。

かつての自分と似た思いを抱えていた新たな理解者を得たシンラはかなりの上機嫌だった。

メイド服を着た弩Sの膝を枕にして耳元に当てた通信機から連絡を聞く。

『アトミック侍、捕獲失敗、指欠損、内臓亀裂などの重体』『戦鬼神GX、大破、修復可能、戦闘データ、AI記憶メモリー、無事』『超合金クロビカリ、捕獲失敗、軽傷、僅かな自信消失』『阿修羅メタルカブト、

軽傷、進化の余地有り』『閃光のフラッシュ、捕獲失敗、行方不明、重傷の可能性大』『疾風のウィンド、業火のフレイム、氷結のフリーズ、雷鳴のサンダー、二名重傷、二名軽傷、進化の余地有り』

「…意外と手強いんだな。ま、早く終わり過ぎてもつまらないから全然良いけど」

『ゾンビマン、捕獲成功、無傷、進化の家地下牢に嚴重拘束中』『エビル天然水、無傷』『タンクトップマスター及び部下タンクトップパー、捕獲成功、重体数名、軽傷数名、無傷投降数名』『ハグキ、無傷』『ぷりぷりプリズナー、捕獲成功、重傷、あまり近づきたくない』『モスキー卜娘、無傷、血の摂取による進化の余地有り』

「へえ」

ゴロンと転がり仰向けになり弩Sの太ももの匂いを嗅ぐ。それだけで弩Sはビクビクと震え股を濡らし出した。

太ももから頭を退け、ベッドに寝転がり両手を広げる。

「ごっちおうい」

がばつ、と飛び込んできた弩Sを受け止め、背中 of 紐を外しメイド服を脱がせていく。慣れたもので数秒で全裸になった弩Sを抱きしめたシンラはその耳をはむ、と甘噛みした。

「ほっ♡」

耳の中に舌を入れほじくり回し空いている手で弩Sの巨乳を揉む。ほぼ毎日揉んでいるからか大きさを増してきた弩Sの胸の突起を掴みコリコリと愛撫する。

何度もシンラに調教された弩Sの肉体は最早どこを愛撫してもイかせられるほど開発されており乳首などは勿論最近では軽く吸うだけで果てるほどだ。

「ああん♡」

淫らな声を発する弩Sの大きな尻を持ち上げ、ぐしよぐしよに濡れているマンコに挿入する。マグマのように熱い蜜が絡まり、プリプリとした膣壁を搔き分けていく感覚はえも言えぬ快感だ。

ゆつくりと子宮の入り口まで到達し、余裕を残しながらもちょうど目の前にきた乳首を啜る。天を仰ぎ震える弩Sの白い身体が赤く染

第十七話

とある高級ホテルの一室でシンラとリンリンは裸で抱き合っていた。そのホテルは既に無人で客はおろか従業員も存在しないが、シンラに加え、タツマキ、フブキ、サイコスの強力な洗脳によって物言わぬ操り人形と化したヒーローや怪人によってしつかりと整備されている。その気になればレストランやカジノ、プールと言った施設も再開させることもできるだろう。

そんな煌びやかなホテルの一室で肌同士が密着し、小動物のようにスリスリと擦り寄せるリンリンの身体を堪能する。

「あの大会はどうだったんだ？ スーパーファイトだったか」

「…準決勝で負けました」

リンリンの脳裏に間の抜けた表情で拳を振るう男が映る。直接殴られたわけでもなく拳圧のみで場外に吹き飛ばされるといふ理不尽さは目の前の愛しい男を思わせる。

かつこよさはこつちの方が断然上だが。

「…ふっ、乙市にいないと思っいたらそんなところにいたのか」

「はい？」

「なんでもない」

「あっ、ん…」

シンラはリンリンの疑問の声を飲み込むように彼女の唇を奪う。リンリンは一瞬ビクリと震えるがすぐにトロンと目を蕩けさせ舌を必死に絡ませる。

ぐちやぐちや、ちゅうちゅうと唾液をお互いに飲み干していく中、シンラはリンリンの乳首を指で愛撫し、リンリンはそそり立つシンラの肉棒にマンコを押し付け挿入するギリギリのラインで刺激する。

リンリンの膣から溢れた愛液がシンラのモノを濡らし、天然のローションとなる。

「あん♡…んん…はあ、はあ」

白い肌がほんのりと赤く染まり、密着している胸からは柔らかい感

触と共に心臓の音が聞こえて来る。

「ふあっ♡！」

にゅぷ、と亀頭がリンリンの入り口に入り込み、リンリンが腰の動きを止める。

「はあ…あ…はんっ♡…んちゅ、ぢゅる、んあぁ♡」

リンリンの熱い吐息を吸い込み、ゆっくりと肉棒を進ませていく。シンラは己の剛直を体格差によって曲がり、ちょうど当たる位置にあるリンリンのGスポットにぐりぐりと押し付けた。

「んあぁ♡♡!!そこ押しちゃ、あうん♡!!」

Gスポットから奥にかけて撫でるように挿入していき、子宮を引っ掻きまた戻していくのを繰り返す。右手で乳首の愛撫を続け、左手で後頭部を抱き寄せ口内を啜る。

「んん♡♡！ぢゅる♡!!ちゅ♡、るる♡ちゅうう♡♡」

フー、フーと鼻で荒い息をしながら一心不乱にキスを続けるリンリンの頭には既に大会で負けてしまったことなど存在しない。

自身の女の弱点をゴリゴリと抉られる強烈な快感に身も心も任せ、一分にも一時間にも感じられる口淫がシンラが口を離したことで唐突に終わる。

「ちゅ、あぁあ♡…だめ…もつと…ちゅうしたい♡」

唾液の橋を架けながらもつともつととおねだりするリンリンを抱き上げ、大きな円形のベッドに押し倒す。その勢いのままもう一度キスをし、舌を吸い上げる。

両手と両足をシンラに回し、抱きしめる形になっているリンリンを押し潰すように子宮の奥深くまで肉棒を差し込む。

「おぎゅうううう♡♡!!」

ピストンされる度に入り口が何度もこじ開けられ獣のような声を上げるリンリン。

「はぁあ…んひい…イ、イクうう♡！」

ビクビクと震え絶頂したリンリンに構わず腰を振り続ける。

「あああぁ♡！イツてるのにまたイクうう♡!!」

シンラは絶頂した直後の敏感なリンリンの膣内をゴリゴリと削り、

カリで子宮口を何度も強く引つ搔く。

リンリンの手足が震え、抱きしめられる力が弱くなるが、シンラはそれ以上の力でリンリンを抱きしめしつかりとホールドする。

「つつつ♡!!」

「ぐっ、出すぞー！」

再びリンリンが果てキュウと締まった膣にシンラも我慢できずに放精する。

「んほおお♡♡!!」

瞬く間にリンリンの中はシンラの精液で満たされていき、ビュ、ビュウウくと残った精液も注入され逃げ場のない精液がリンリンの下腹部を膨らませる。

「ああ、ああああ〜♡♡♡♡」

つま先をピンと伸ばし放たれた子種を飲み干したリンリンからモノを抜き隣へと寝転がる。

息も絶え絶えな様子 of リンリンの背に腕を回し綺麗なお椀型の乳房を揉みしだきながらベッドの端に置いてあった通信機を使いメタルナイトに連絡する。

童帝をこちら側に引き込むことに成功した今、戦力は勿論技術力も現ヒーロー協会を凌駕している。ジーナス、メタルナイト、童帝という天才達を仲間にしたことで新たな正義機関の設立も容易いだろう。

同じく科学技術に富んでいそうな駆動騎士や鬼サイボーグも欲しいことには欲しいが無理して手に入る必要性はない。メタルナイトは欲しがっているようだが、それも味方としてではなく研究材料としてだろう。

着々と自身の目的が進行していくことにかつての不快な過去が薄らいでいくのを感じ、気分が高揚すると共に己の肉棒に再び熱が走る。

メタルナイトとの定期連絡を終えたシンラは新たに連絡を入れると、隣にてようやく息の整ってきた様子 of リンリンの乳首に吸い付き勢いよく啜り上げた。

「ひあっ♡ー！」

硬くなってきた桃色の果実を甘噛みし、舌でコロコロと転がす。優しく舐め、時に激しく吸い上げるのを繰り返していく度にリンリンは身体を震わせ何度も絶頂した。

そうして10分ほど執拗なほどにリンリンの乳首を吸っていたシンラの背に唐突に柔らかい何かが寄りかかった。ふわり、と甘い香りを感じ、ちゅうううう！と止めのようにリンリンの乳首を吸ったシンラは振り返り口を差し出した。

すると、既に目の前に迫っていた美しい女の唇が己のそれと重なり、細くも柔らかい腕が首に回される。

弱点の乳首を執拗に舐られ、アへ顔のまま失神しているリンリンを脇に置き、目の前の女、フブキとのキスに集中する。フブキと舌を絡ませ合いながら足を開けば勃起している肉棒が温かい何かに包まれた。

「ジユポツ♡！ちゆるるる♡ちゅ、ちゅう♡♡」

シンラの巨大で凶悪なイチモツを頬張り、ペロペロと亀頭を舐めるのは黒髪に青いメッシュの入った黒髪ポニーテールの少女、リリーだ。

先程連絡した後フブキと共に来たようだが、先にキスを始めたシンラとフブキを見て我慢できずにシンラのチンポに飛びついたようだ。

つい先日15歳になったばかりの少女が己の腕よりも太い男性器にしゃぶりつき恍惚の表情を浮かべるその光景は異質でありながらも、なんとも淫らなものだった。

その姿に我慢できなくなったシンラはフブキとのキスを止め、リリーの頭を両手で掴み、自身のモノの根元までリリーの唇が触れるほど肉棒を喉よりも深い食道にまで突き入れた。

「おっ！おっ！、あおおお♡」

暴力的なイラマチオがリリーに襲いかかる。喉奥を音が聞こえるほど強くピストンされ、リリーの目裏がチカチカと光る。大口を開け、唇を伸ばすその間抜けな顔に欲望を何度もぶつけ、白目を剥いたリリーの頭がシンラの股に強く押さえつけられたその瞬間に精が解き放たれる。

「ボビユルルルルツツツ!! ビユル、ビユル!!」

「つつつつ♡♡♡~~~~~!!?!」
ガクガクと痙攣し、無意識に暴れるリリーに構うことなく射精を続ける。口の中がいつぱいになるも口は完全に押さえつけられていて吐き出すことはできない。リリーはゴキユゴキユと音を立てて未だ注がれ続ける精液を嚙下していく。

最後の一滴まで飲み干したりリーの口から最後に数回挿抜しリリーの口内で肉棒を綺麗に掃除する。ジュポツ、と音を立ててモノを引き抜けばリリーは壊れた機械のように意味のない言葉を漏らし、真つ赤な顔で白目を剥いていた。

失神しているリリーの服を剥ぎ取り、仰向けに寝させればトロトロに濡れたマンコとヒクつく綺麗なアナルが目に入る。だらんと倒れるリリーの腕を足で固定し、尻を持ち上げまずはと目の前に来たマンコを音を立てて勢いよく吸い込んだ。

「…つつ♡?!?はああああ♡!!」

失神から無理矢理目覚めさせられたリリーは起き上がるが腕はシンラの足に、足と身体はシンラの腕にそれぞれ固定されていて動かない。ただただ嬌声を上げ続けるだけのリリーのマンコを先ほどのフェラチオのお返しとばかりにシンラはヂュルヂュルと啜っていく。

「イイイイ♡イクイクイクウウ♡!!!!」

プシャア、とりリーが潮を吹き、それがシンラの顔面にかかるが、シンラは全く気にした様子もなくクンニを続ける。絶頂しても終わらぬ逃げ場のない快楽にリリーは涙や涎、鼻水すらも流すが表情だけは至高の幸福を味わっているように悦びに染まっていた。

クリトリスを甘噛みし、膣から溢れ出す蜜を飲み、ヒクつくアナルに舌を捻じ込む。シンラは文字通りリリーを味わい尽くし、ゴクンと愛液を飲み込むと己の剛直をリリーのマンコの入り口に当て、串刺しにするように挿入した。

「お♡つつ♡!!お”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”♡♡♡♡」

「絶叫しベッドを握りしめるリリーをバックで犯す。グチャグチャ

「へえ、じゃあこの後すぐに行くよ」

『ええ』

「ああ、そうだ」

『?』

「オロチだっけ? まだ地下に保管してあるんでしょ?」

『ええ。それが?』

「それ、俺が貰うから」

『!?…何故?』

「それなりに強いつていう点で残してあげてたけどもう十分戦力は集まったし、あんな悪辣の塊俺の世界に残して置きたくないんだよね」

『…』

「ああ、安心しなよ。無駄にはしないから」

『…分かったわ。惜しいけど貴方を敵に回したくないから』

「うん、ありがとう。愛してるよ。サイコス」

『…：貴方のそれは本気でそう思ってるからタチが悪いわ…』

サイコスの最後の呟きに首を傾げつつも高まってきた射精感に逆らわずにフブキの口内に種をぶちまけた。

「んむう…」

明るい茶髪を頂点で一つ結びにした女が少女のような声を漏らし目を覚ました。長身で一目で鍛えられているとわかる長い手足がセパレートタイプのユニフォームからスラリと出ている。

その女、B級71位ヒーロー、主将ミズキは目を擦り辺りを見渡す。

「あれ…ここは?」

見覚えのない部屋、見覚えのないベッドに眠っていた自分の状況に困惑し、まるで休日に眠りすぎた時のように朧げな脳内から記憶を探るがまるで答えは出てこない。

「と、とりあえず外に出ないと…」

「まだ出たらダメだよ」

「へっ!? 誰っ!?!」

「さっきから横に居たんだけどなあ。気づいてなかった?」

ミズキは反射的に声を上げ、隣から声をかけたシンラに驚く。シンラはミズキの少女のような反応に苦笑する。

「あのく、こっこって一体どこなんですか?」

外見はただの二枚目であるシンラに驚きつつも警戒はしていないのか恐る恐るといった様子で疑問をぶつける。

シンラは笑みを浮かべゆっくりとミズキに近づいていく。トップアイドルに匹敵する美貌が目の前に迫り、顔を赤くしたミズキは思わず一步後退しようとするが、シンラがミズキの両の手のひらを掴んだことでそれは止められる。

「ひゃー…ええ、えっと」

恋人繋ぎのように指を絡められたミズキは振り払うこともできずに自身の手とシンラの顔をあたふたと交互に見る。一般的な男性なら軽く見下ろせるほどの長身のミズキと変わらぬ身長 of シンラは真っ直ぐにミズキの瞳を見つめ、妖艶に口を開いた。

「君は仲間にも敵にもならなかったらしいけど、今ここで決めてくれないかな?」

「……え?」

瞬間、ミズキの脳裏に眠る前の記憶が蘇る。誘拐されたヒーロー協会重役の息子を助けるためにチームアップされた自身を含むA、B、C級連合と重役が私的に雇った私設部隊の二つの集団で怪人のアジトと思われるZ市の地下を進んでいた時のこと。

ズンズンと自信満々といった様子で先行する私設部隊に何人かのヒーローが苦言を零したその時、壁や天井、地面を突き破って出てきた無数のタコの足のような触手が私設部隊の全員を瞬く間に吹き飛ばし、体に巻きつくともそれぞれの出てきた穴へと連れ去っていった。

あまりに突然の出来事に身体を硬直させたミズキたちだが、その無数の触手を従えるように道の先からウェーブのかかった長い青髪の

女が悠々と歩いてきたことであろうやく戦闘態勢に入った。

眼鏡をかけた知的な雰囲気の女、サイコスはミズキたちにシンラの言う新たな正義を確立させる計画と現ヒーロー協会の悪事を証拠付きで話した。

そして、こちら側に着くのであれば歓迎する。来ないのであれば悪として断罪する。とひどい条件を提示した。

血の気が多い数名がサイコスに襲いかかるが超能力で動きを止められ、触手に容易く吹き飛ばされた。その光景を見た3名ほどがその場で寝返りを決め、残りは答えを決めあぐねていたが、結局答えが出ることもなくサイコスの超能力によって眠らされた。

「で、どっち？ 味方？ 敵？」

「ヒッ」

溢れ出たシンラのプレッシャーに顔を青ざめたミズキは汗をダラダラとかき歯を震わせる。

そんな身体とは裏腹に脳内では何百もの考えが巡っていた。

味方？ 敵？ そんなの決められない。みんなは無事なの？ 怖い。冷たい。協会の皆さんは悪い人？ じゃあ目の前のこの人は？ カッコイイ。あの証拠が本物である証拠がないじゃない。でも、私も上層部の人たちは苦手。イケメン。あ、そうだ。子供助けに来たんだった。背高いなあ。良い匂い。怖い。筋肉すごい。お腹が変な感じ。くすぐりたい。助けて。あ。近づいてきた。逃げなきゃ。え？。このままだとチュウしちゃう。

まつ毛長い。あ。やばい。これ。どうしよう。え？ え？

あつ。

シンラはミズキの唇に触れるだけのキスをした。

ちゅ、というリップ音が嫌に響き、プレッシャーを抑えたシンラはペロリと舌舐めずりをした。

目を見開いたままのミズキは口をパクパクと動かしていたが、シンラのプレッシャーが霧散した瞬間、ぷしゅ、ぷしゅあ、と潮を吹いたと

思うほどの量の愛液を股から溢れ出させた。

シンラはそんなミズキの唇を舌でなぞると、問いかけた。

「もう一度、して欲しい?」

「…は……はい」

ゆっくりとミズキが頷き、今度は噛み付くようなキスがミズキを襲い、ミズキはそのまま押し倒された。

第十八話

ミズキの膣から破瓜による血が流れる。

「つううう…」

濡れていたとはいえ、一般的な大きさを優に超えるシンラのチンポは受け入れきれずに半分ほどで挿入が止まり、ミズキは破瓜の痛みに悶える。

シンラはミズキのことなどお構いなしに腰を動かしたくなる衝動を抑え込み、ゆっくりと時間をかけて膣内を慣らしていく。

「あっ…は…あ…はあ…」

引き締まった筋肉に包まれているはずの体内は驚くほど柔らかく、シンラはミズキの腹筋を指でなぞりながら乳首を舌で弾く。

大きくはないが形の良い胸を舐めまわし、乳輪ごと乳首を吸いあげる。

「んああ！ん…ん…お…ぱい…だめ…」

「どこだつて？」

「だ、だから…お、おっ…ぱ」

乳首を刺激したからか、少し緩くなった膣内に残り半分の肉棒を一気に挿入した。

「いいいいいいい♡♡??」

ミズキ自身も触れたことのない子宮にまで到達した肉棒がキュウウ、と強く締め付けられる。食いちぎられそうなほどの膣圧にシンラが我慢できず腰を動かそうとした瞬間。

「ふああ”あ”っ♡!？」

ブシャア！

身じろぎしたミズキは盛大に潮を吹き、気絶した。口をパクパクと開閉し、身体を震わせるミズキを見て、シンラは性行を続けることなく肉棒を抜いた。

別に続けても良かったのだが、別に犯して壊してやろうだなんて思ってもいないし、続きはまた目覚めてからの楽しみにしようとしてシン

ラは痙攣するミズキの胸を揉みながら、ちようど手の空いている二人へと連絡を入れた。

一時間が経過したが未だにミズキは目覚めない。全裸で涎を垂らし穏やかな呼吸を繰り返すその姿はやたらとエロく、ただの昼寝にしか見えないため、シンラはもう挿れてやろうかなと7回ほど考えた。

まあ、またすぐ気絶されるのも面白くない。

シンラはミズキのことを一旦忘れ、背後にて己を抱きしめるモスキート娘に寄りかかり、それとは逆に自身の膝の上で股を擦り付ける少女、リリーとキスを始める。

ミズキが気を失ってから、シンラは昂ぶったままの肉棒を静めるために現在手の空いているモスキート娘とリリーの二人に連絡を入れたのだ。

他の女性といえば、保留中の4人は置いておくとして、フブキ、タツマキ、サイコスの超能力3人娘は過去の精算も兼ねて話し合いに行っているために居らず、リンリンと弩Sはアーマードゴリラ先生の家事教室に、サボリ魔のモスキート娘と何気に一番性欲の強いリリーが集まったのだ。

「んっ…んんん…ちゅ♡、れろ♡んああ…あん♡ちゅ…う」

抱き合ったままリリーの小さな口を舐り、クチャヌチャ、チュルヂュルといやらしい音を立ててその甘い口内を堪能する。

お互いの舌を這わせ合い、絡ませ合い、愛し合う濃厚なキス。

それを数分も続けるとリリーの膣は既に愛液に塗れて準備満タンになっており、何十回と繋がってきたというのに綺麗なピンク色をしたマンコにずっと誇張していたままのシンラの肉棒が入っていく。

「お♡っ♡お♡お♡お♡」

亀頭が筋を広げ、つぶん、と膣に飲み込まれる。ゆっくりと膣内に

痙攣し、小さく声を漏らすリリーからゆつくりと肉棒を抜き、ガクンと倒れる身体を抱き寄せその頭を撫でる。

「あ…あへえ♡…えあ♡…は…ら…♡♡」

もはや悦楽以外の感情を持たない意識でその抱擁に悦ぶりリリーを抱き枕にしてモスキート娘の身体に寝転がるシンラ。

「ちよつとお。私は…?」

「ああ、ごめんごめん。忘れてなんかないよ」

「むう」

一瞬頬を膨らましたモスキート娘だったが、振り返りそり立つ肉棒を見せつけるとすぐにその表情は緩む。魅惑的な赤い舌が覗く口を開き、シンラの肉棒を咥え、お掃除フェラを始めていく。

ジュポジュポと長大なシンラのモノを根元まで飲み込み、何度も往復する。あつという間に肉棒に塗れていた精液とリリーの愛液は綺麗に舐め取られ、モスキート娘は口に含んだそれらをゴクンと飲み込んだ。

最後に肉棒にキスを落としたモスキート娘は長い脚を開き、寝転ぶシンラに跨るとシンラのモノに狙いを定めて腰を下ろした。

プリプリとした肉を掻き分け、マグマのように熱い粘液に包まれることでシンラのチンポは更なる熱を灯し、その硬さを増していく。

所謂騎乗位の体勢になったモスキート娘が腰を淫に動かす。シンラは惚けた表情ながらも意識を取り戻しているリリーの乳首を吸いながらその快樂に身を任せる。

「んっ♡んっ♡ふっ♡ふっ♡はあっ♡はあ♡」

「にやあああゝゝ♡♡」

二人の女はその身体を紅潮させ、嬌声を部屋に響かせる。

「あ…あわ…わ…あ」

ふと隣を見れば目を覚ましたミズキがこちらを見て口を開けてあわわと狼狽している。両手で顔を隠しているが、指の隙間からは見開かれた目がはつきりと覗かれている。

シンラはそんな様子のミズキを見て、身を任せるだけだった身体を動かし、モスキート娘の中を激しく肉棒で貫いた。

「いあ”あ”っっ♡!?!」

突然の衝撃にのけ反るモスキート娘の腰を逃さないように掴み腰を突き上げる。子宮口の感触を肉棒の先で感じると容易くこじ開け、カリーで引っ掻き回し、親指で下腹部をこねる。

強くなつていく締め付けを意にも介さず、膣内を蹂躪していく。のけ反った体勢のままのせいで下腹部にシンラの肉棒がピストンの度に突き破りそうなほど浮かび上がる。

そしてとどめの中出しを決める。

ドブウルルルル!!ビュウウウウ!!

「はあああ”あ”あ”あ”あ”あ”ああ♡♡♡!!!」

ビクビクと震えるモスキート娘からシンラは無遠慮に肉棒を抜き、未だに不規則に跳ねて痙攣するモスキート娘の頭を持つと自身の股間へと持つていきだらしく開く口に肉棒を突っ込んだ。

「ぐっぶっ、う…ぶうう…」

「ふうう…」

掴んだ手を動かし、ガポガポと容赦無く抜き差しする。抵抗の無い口マンコをオナホのように乱暴に扱うが、それでもモスキート娘のだらけきった顔からは悦びの感情が伝わってくる。ポーツと見つめるリリーも同様だ。

ぐりぐりと喉奥に突っ込んだモノを押しつけて、グポグポと十数回往復させた後、両手でモスキート娘の頬を無理矢理窄ませて肉棒に塗れる全てをモスキート娘の口内に拭き取らせた。

白目を剥くモスキート娘は意識があるのかないのか、臃げな表情でそれをクチュクチュと咀嚼して飲み込み、今度こそ意識を手放した。

そんなモスキート娘を目で追ったミズキは変わらず混乱した様子でシンラを見つめる。しかし、その股から垂れるトロリとした液と、ピンと主張する乳首をシンラは見逃さない。

シンラは失神しているモスキート娘を越えて一步ミズキへと近づ

く。ギシ、とベッドが揺れ、同じようにミズキもビクリと震えた。

気絶する前に受けた快感を覚えているのか、シンラの股間を凝視するミズキにシンラは隠すことなく逆に目の前に肉棒を突きつけた。

ムワリと漂う精臭にミズキはクラリと倒れかけるが、後頭部を掴まれ、開いたままだった口に肉棒が入られたことで起き上がった体勢のまま始めて感じる匂いと味に襲われる。

「んぶう!? んん! んん! んん!!」

「そんなに怖がらなくてもいいのに。自分の欲求に気付いているでしょ? いいんだよ。正直になつてさ」

「うぷ…んん…あ…あ」

シンラはミズキから一度離れ、激しく息を荒上げるミズキに下半身に顔を向ける逆の体勢でのしかかった。はあはあと息を吐くミズキの口に再び肉棒を突っ込み、その筋肉質な足を開かせてマンコを露わにさせる。

「…っ??…んんっ!?…ぶぷっ」

自身の秘所が丸見えになっていることにかろうじて気づき暴れようとするミズキを圧倒的な力で抑え込み、ひくつくマンコを勢いよく啜り上げた。

「んんんんんん!!!」

ズヂュルルルルル!!!ズルツツ!!ブヂュウウルル!

全く男を知らない女にはあまりにも強すぎる刺激にミズキはガクガクと震え潮を吹き何度も絶頂する。

意識を手放してもすぐさま呼び戻され、口内を犯す肉棒の匂いと味を何も考えられない脳に覚えさせられる。股から身体を貫く攻撃は一向に止まず、鍛えた己の肉体の鎧が剥がされ、ミズキには快楽に溺れる女という性質だけが残った。

シンラはリリーとモスキート娘を抱いても全く衰えない欲望を抑えることなくミズキのマンコを貪り続ける。膣内を啜りながら舐めまわし、クリトリスを甘噛みし、吹き出す潮を飲み干していく。

何分かが経った。トロトロに蕩けきったマンコをペロペロと舐め、抵抗のなくなった口に射精した。

「??????」
胃へと注入される精液を無抵抗に受け入れるミズキ。ズロン、とよやく抜かれた肉棒はミズキの唾液の糸が纏わり付いていた。

最後にミズキのマンコにバードキスを落としたりしたシンラはダランとベッドに沈む身体に覆い被さり、蕩けきった蜜壺へと肉棒を進ませた。

「ごっつ———??おう———?!?!」

一気に挿入され、気持ちの昂りが止まらないシンラはそのまま激しいピストンを開始する。

パン

肉を打つ音が延々と響き、既に限界を超える女に終わりを告げる液体が注がれる。

ドピユウウルルルルルルルルルルウウウ!!!

ゴコン、と一瞬で下腹部を膨らました一撃はまだ止まらずに膣の間からも漏れ出す。シンラは肉棒を抜きミズキの口に挿れると残りの子種を無駄にしないとはかりに注いでいく。

喉を優に到達する肉棒の先から迸る粘液は食道に絡まりながら胃を満たしていき、口の中さえも満タンにした。そして粘着質な音ともにモノを引き抜く。

「えああ…えっ…ごっつおう…お…」

口と股からゼリーのような白い液を逆流させ、膝立ちのまま痙攣するミズキ。起き上がって甘えてくるリリーを抱きながらミズキの元の凛々しさの欠片もないアへ顔に体液に塗れたチンポを軽く叩きつけた。パチンと弾かれたミズキの身体はグラリと力なく後ろに倒れ、その鍛え上げられている身体を曝け出しながらベッドに沈んだ。

また目覚めるのに時間がかかるだろうなと軽く思いながら、シンラは今日の残りの全てを吐き出すべく擦り寄るリリーに覆い被さった。

重なる地肌が密着し、腕や足を絡ませ合う。上も下も繋がりに、一つになっっている全裸の男女の抱擁は一時間程続き、突如ペースを変えたシンラのピストンによって抱擁が捕食へと変わった。

「おぎよ♡!?!んひっ♡!!ひっ、ひいい♡!イクツ♡イクウ♡!」

シンラとベッドに挟まれ、釘を打ち付けるようなピストンを受けるリリー。

「あうう♡!!?おぐうう♡♡!おおお♡おお♡」

子宮の奥底まで突き刺し、亀頭のギリギリまで引き抜かれ再び奥底まで串刺しにする強烈なピストンと共にシンラの極太の男根と力りによって膣壁と子宮の入り口を挟られるリリーのバチバチとスパークする脳内は快楽を超えた狂おしい程の愛によって埋め尽くされていく。

「リリー!出すぞ!射精するぞ!」

「い”いやあああ”あ”っっ♡♡!!”あ”あ”あ”あ”♡!!あ”あ”

”あ”♡!!あ”あ”♡!あ”あ”ー”♡♡♡!!”

ドビュツツツツビュルルルルルル!!!!ビュウウウウウウ!!

ビュグツツ!!ビュウウウ!ビピュツ、ルル、ウウ

ズパン!と最後の一突きでベッドに押しえつけられたリリーの小さな身体に大量の種がぶちまけられた。子宮の奥底に吸い付く肉棒の先から長い長い射精が行われ、激しく痙攣するリリーを肉棒と体で押しえ込み一滴たりとも逃さずに流し込む。

シンラはリリーの口もキスで塞ぎ、未だ続く吐精と女の口を貪る快感を味わい尽くす。その状態のまま数時間。腰をぐりぐりと動かし肉棒を抜かないまま大量の精液をリリーの中に馴染ませ、ピクピクと震えるだけの口を合わせ、吸い、舐め、這わせ、絡ませ、啜り、飲み、味わい続けた。

ヂュ~~~~ツツポンツ♡!とようやく捕食が終わり、口を離れたシンラだったが、その瞳にはまだ欲の色が残っていた。

人形のように力なく倒れるリリーを掻き抱き、立ち上がったシンラはそのまま風呂場へと赴く。もちろんまだまだ肉棒はリリーの中で怒張し続けており、その鼓動が止むこと気配はない。

シャワーで汗や諸々の体液を落とし、部屋で水分を補給する。繋がったまま気絶しているリリーにも口移しで水を飲ませ、呼吸が安定したことを確認すると立ったまま腰を動かし始める。

両手でリリーの尻を支え、ゆっくりと反復運動を繰り返す。

「――」

そして本日四回目の種付けが意識のないリリーになされた。

そして続けて五回目、六回目、七回目、八回目、九回目、十回目。

一度も抜かれることなく10回もの中出しがされ、リリーは腹を妊婦のように膨らませていた。

シンラが肉棒をゆっくりと引き抜くとプピユウ、と精液が無意識だというのに吹かれた潮と共に噴水のように溢れ出し、部屋に濃密な精臭を漂わせた。

「ふう…」

シンラが自分の精子に能力でバリアをかけていなければ確実に妊娠しているであろうリリーのあられもない姿を見て一息吐くシンラの剛直にまた熱が溜まっていく。

シンラという男と身体を何度も重ね合い、規格外の性行を何度も体験しているリリーを含めた女たちは必然的に身体の強度が上がっていくのだが、流石に今のリリーはもう限界だろう。

リリーを抱えて、ミスキとモスキート娘の横たわる巨大なベッドに共に沈み込む。自身の身体の上にリリーを寝かせ、自分も襲ってくる睡魔を感じて目を閉じる。

眠りから覚めた自分がマンコとアナルをひくつかせる目の前の少女に我慢できるかどうかは分からないが、取り敢えずそれは起きた自分に任せるとしよう。

第十九話

シンラは神の力を宿したただの人間である。たしかに超能力のよ
うな不可思議な力は使えるし一般人とは比べものにならないほどの
身体強度も有している。

しかし、それだけではあの全てをワンパンで粉砕する男には勝てな
いとシンラは確信していた。たとえ自分を含めた全ての戦力を投入
したところで手傷は負わせられても最終的には負けるだろうと。

下手をすれば自身に力を与えてくれたあの神すらも打ち負かすの
ではないかと思うほどの理不尽。世界の理から外れたような、勝つこ
としか許されない物語の主人公のような、サイタマという名の男を思
い出す。

だからシンラは時間をかけてでも準備することを決めた。ヒー
ロー協会は既に半壊しているし、怪人含む悪も仲間たちの力ですぐさ
ま対応している。サイタマだって決して悪などではないため放置し
ていても問題はない。

シンラはまず、サイコスの最高傑作、オロチを取り込んだ。数多の
生命、悪意、力を詰め込まれた怪物を狂氣的な正義の心で押し伏せ、そ
の体に吸収した。

人間という種を超え、身体を自由自在に変化させられる程の生物と
してのベースを手に入れたシンラは次に捕らえたS級ヒーロー、金属
バット、ぷりぷりプリズナー、タンクトップマスター、加えてサイコ
スの集めたシンラに従わない災害レベル竜の怪人たちを取り込み生
物であるが故のリミッターを次々と破壊していく。特にゾンビマン
を吸収し不死身の肉体と莫大な生命力を宿したことが途轍もない進
化への影響をシンラに与えた。

しかしまだ足りない。飢餓にも似た欲求を感じるシンラは次々と
怪人や悪人、従わなかったヒーローを取り込んでいく。まるでそれ以
外の役目は無いと言わんばかりに容赦無く吸収し糧にしていた。

学校のグラウンドほどの広さに無機質な床や地面に囲まれたとある空間。

玉座のような椅子に座り込んだシンラの周りには数百を軽く超える数の怪人や人間や倒れており、その全てが傷だらけで意識を手放している。中には絶命している者もいるだろう。

有り余る力を完全に制御するために戦闘トレーニングを捕らえた怪人やヒーローたち相手に始めたシンラだったが、その全てが軽く小突いただけで吹き飛ぶのであまり訓練の意味はなさず、シンラはジーンナス、ボフォイ、童帝の科学組に訓練相手を造らせることにした。

床一面に広がる全てを吸収し、一人でできるトレーニングを開始する。

「いいぞ…次はブラストだな…クハハハ」

「…?」

女を抱く以外で汗を流すのは久しぶりだな。という酷い独り言を零し、己の内にて鼓動した何かに気づくことなくシンラはその日から一週間かけてその肉体を鍛え上げた。

崩壊したQ市に咆哮が響く。その雄叫びは衝撃波となって立ち登る黒煙や土煙を吹き飛ばし、辺りに倒れるヒーローたちに恐怖を与える。

「ひい!!」

「な、何なんだよ…あのバケモンは…!?!」

ぼてぼてと歩く咆哮の主である六つ目の巨大な犬が倒れ伏すヒー

ローたちを気にも留めずにとある男の元へと向かう。

『災害レベル：竜 〃育ちすぎたポチ〃』

ポチはシンラの愛犬だ。拾ってもらい全力で遊んでも応えてくれる主人にポチは懐いており、指示一つでどんな芸でもやるほどだ。おすわり、お手、おかわり、伏せ、待て、ゴロン、バキューン、破壊光線…などなど。

そんなポチが向かう先には白い犬の着ぐるみを着た無表情の男。

『S級12位ヒーロー 〃番犬マン〃』

台座の上に『おすわり』している彼の下には多くの怪人の死体が転がっており、その全てがバラバラに引き裂かれている。

それらに一瞥もしない番犬マンは目の前まで来たポチと向かい合いジーツと見つめ合う。

ポチもフスフスと鼻で息をしながら尻尾を振り番犬マンを見る。

完全に犬同士の会合にしか見えないその異様な空間にまた一人、異様な男が乱入した。

「ワハハ!!やはり同じ犬同士通じる所があつたようだな!ならば俺とも同じ着ぐるみ同士、分かり合えるだろう!!」

無駄にスタイリッシュな鳥の着ぐるみを着た男、フェニックス男が高らかに笑いながら番犬マンに詰め寄る。そしてその肩に手を乗せようとした瞬間、薙ぎ払った番犬マンの腕がフェニックス男に直撃する。腕力にものを言わせただけの攻撃だが、鋭い爪に腕を引き裂かれたフェニックス男はそのまま吹き飛び、形を保っていたビルに突き刺さった。

「……」

「…クウウン」

「……（コクリ）」

ポチの声に小さく頷いた番犬マンは軽やかな動きでポチの背に飛

び乗る。ポチはそのまま崩壊したビル群を飛び移りその場から離れていった。

「ぬぐ…ボ、ボディタッチは早すぎたか…？」

的外れな言葉をこぼしながらフェニックス男が瓦礫の中から出てくる。切り裂かれた肩は既に再生しており、体についた埃を軽く払っている。

フェニックス男は辺りに倒れる数百のヒーローたちとバラバラになっっている怪人たちを見渡すとその体を発光させ、能力を解き放った。

シンラは無機質ながらも柔らかく座り心地の良い椅子に座り、自身の股下を見る。そこには二人の女がおり、縋り付くようにシンラの剛直を頬張り、舌を這わせている。

長い黒髪の女、アサミと暗い金髪をショートカットにした女、ノリアはヒーロー協会の重役、ナリンキによつて息子を救出する指令を受けた私設部隊のメンバーであつたが、怪人協会の拠点と思われるZ市地下にAとC級ヒーロー連合と共に侵入するもサイコスの操るオロチの触手で全員が倒され、捕まってしまったのである。

目を覚ました二人に死か服従かの選択肢が迫られた。目の前で吸収される仲間やヒーローを見た二人は恐怖に震え、涙を流しながらも服従を選び、アサミはなんとか気に入られようとその場で服を脱ぎ、シンラに寄り縋った。ノリアも震えながらそれに倣った。

「…下手だな」

「ヒッ…、ごめんなさいー！」

小さく舌で舐めるだけだったノリアにシンラがそう言うとなリアは青ざめ、命乞いをする。

「教えてあげるよ」

シンラはノリアの頭を掴むと無理矢理その口に肉棒を捻じ込んだ。
「ぐぐっ!」

シンラは喉にぶつかってもまだ半分ほどしか入っていないその剛直をさらに奥、食道まで飲み込ませていく。

「お””ッ””お””お””え””…”

暴れるノリアを無視して根元まで飲み込ませたシンラはその口から内臓全てを使って己のモノを扱き始める。

「…ッッ……ッッ…ッッ…」

息ができないのか鼻で激しく呼吸しながら震えるノリアを氣遣うことなくシンラは射精し、精液をノリアの胃に流し込んだ。

ビュウウウウウ!!!

注入された粘液がノリアの腹を満たす。涙を流して飲み込む以外に逃げ場のない精液を飲み込んでいく。

最後まで出し終えた時にはノリアは氣を失っており、その腹を大きく膨らましていた。シンラは腰を抜かしていたアサミに尻をこちらに向けるよう命令する。

ゆっくりとそれに従い、向けられるアサミの腰を掴むとシンラは引つ張った勢いそのままその秘所に肉棒をぶち込んだ。

「いあ”あ”あ””っっっ!!!」

座ったままの体勢でアサミを犯していくシンラ。思わず逃げ出そうとするアサミをしつかりと捕まえ、静止の懇願の声も無視し、その巨大な肉棒で陵辱していく。

「いやあ”あ”いぎい!!あ”あ”あ”!!」

ゴリゴリと中を抉られ、悲鳴をあげるアサミ。そしてそれは唐突に終わりを迎える。

ビュプルルルルルル!!!

津波の如く押し寄せる白濁液と衝撃にアサミは一際大きく悲鳴をあげその身体を地に落とした。

ドチャ、と地面に倒れたアサミとその隣で目を剥くノリアを一瞥し、シンラは隣にずっと控えていた弩Sの腕を掴み引き寄せる。

「ああん♡」

「…フン。あんたなら心配しても変わらないでしょ。」

「俺のことなんて一言も言っていないけどな」

「ツ！…もう…意地悪しないでよ…」

「くくつ、悪い悪い」

シンラが足を開くと、タツマキが潜り込み、大量の粘液に塗れた肉棒をその小さな口で飲み込んでいく。

「んっ♡ちゅっ♡ヂュル、ヂュウウ♡ズルル♡ルル♡ヂュロ♡レロ♡ズルル♡」

唇を窄め、舌をベロベロと回すタツマキを見下ろしながらシンラは通信機を取り出し、サイコスへと連絡を取った。

『何かしら？』

「ヒーロー協会の様子はどうだ？」

『ああ。もはや組織として機能していないわ。上層部は焦燥しているながらも本部に立て籠もっている間は安全だと思っているみたい。まあ、信じ込みたいだけでしょうけど』

メタルナイトの設計したヒーロー協会本部の強固さはシンラも知っているが、既にメタルナイトが寝返っている今、意味をなさない建物に立て籠もる愚か者たちにシンラは失笑する。

まあ、たとえ本部が正常に機能しても己ならば五分もかからずに根絶やしにすることができると確信しているが。

『そうか。俺の調整ももうすぐ終わる。メタルナイトたちに戦闘の準備をさせておいてくれ』

会話の内容から電話相手がサイコスだと分かったタツマキがシンラの肉棒を頬張りながら鋭い目を向けてくるが、喉奥まで腰をつき入れ、頭を撫でればすぐに目が蕩け、再び口淫が始まる。

『分かったわ。それで、決行日は？』

「3日後かな。正午きっかりに開始する」

『了解よ。ヒーロー協会以外の対応は任せてもらっているのよね？』

「ああ。じゃ、よろしくね」

ピッ、と通信機を切った瞬間、シンラはタツマキの口内へと子種を解き放った。

第二十話

ヒーロー協会本部は壮絶な混乱状態に陥っていた。

ヒーローの象徴であり最高戦力であるS級ヒーローのほとんどが連絡が取れず、スポンサーである重役の子供が人質に取られ、上からプレッシャーをかけられている状況下の中、A市を含む全ての都市に怪人が現れ、人々を襲っているとの情報が入ったからだ。

救助要請が鳴り止まない中、実力あるヒーローたちとも連絡が取れず、外に出ようにも本部の周りには最低でも災害レベル鬼という強力な怪人たちが包囲する様に集まっており外に出ることができないでいた。

「と、取り敢えず籠城だ！警戒レベルを最大にして本部にいるヒーローたちに守らせろ！」

上層部のうちの一人である中年の男がそう叫んだ。

「し、しかし！市民からの救助要請が！」

「そんなものは後でいい！今は我々の安全を確保することが先決！我がヒーロー協会がなくなればそれこそ終わりだ！！」

唾を吐く勢いで叫ぶ男に上層部の会員たちも同調し同意の言葉を口にする。

「その通りだ！」

「大体S級ヒーローたちは何をしているんだ！！」

「ブラストだ！早くブラストを呼べよ！トップヒーローだろう！！」

「市外にいる全ヒーローをこちらに呼び出せ！！そうすれば怪人たちが本部から離れるかもしれない！！」

次々に声を荒げる上層部たちに役員たちは戸惑ったがそれでも自分の命を危険に晒してまで意を示そうとは思わなかった。それを後に後悔することになるとも知らずに。

「うわああ!!」

「きやああああ!!」

「なんでこんなに怪人が…!? ツツ…わああああ!!」

「誰か助けてえええ!」

唐突に日常は崩れ去り、街を覆うほどの明確な悪意と暴力の塊に市民は恐怖の声を上げた。街を襲う怪人の群れ、建物は崩壊し、見慣れた街並みは燃え盛る炎で揺れる。分かりやすいほどの地獄。

「ヒーローは何をやっつてんだよ!!」

恐怖の叫びは助けに來ないヒーローへの糾弾となり、それすらも届かない絶望に呑み込まれそうになったその時。

「もう大丈夫!!俺が来た!!!」

騒音を消し去る男の透き通る声。死への恐怖に涙を流していた人々は声のした方向へと顔を向ける。そこにいたのはヒーローへの批判の声を上げた男に襲い掛かろうとしていた怪人を殴り飛ばしている一人の男。

端正な顔立ちをした褐色肌の美丈夫。高い身長に人受けの良さそうな優しい顔立ちをした男が怪人たちを次々と薙ぎ倒していく。

「お、おお!!やった、助かった!!」

「ありがとう!君はヒーローかい!?」

「すごい!カッコイイ!!」

助かったことに気づいた市民たちが感謝の声を男にかける。

「いや、俺はヒーローじゃない。みんな聞いてくれ!ヒーロー協会は君たちが怪人に襲われていると知りながら、本部へと立て籠もり、自分たちの身を守るためにヒーローたちを街へ行かせなかった!!」

「!?!」

「そう!!奴らは守るべき市民を、君たちを見捨てたんだ!!!」

倒した怪人の山の上で男は高らかにそう叫ぶ。

「な、なんて奴らだ…」

「ひでえ…」

「見捨てるなんて…許せない!!」

ヒーローを糾弾していた男を始めとし、次々と非難の声が広がっていく。男はその波を見ながら話を続ける。

「だと言うのに彼らは未だに自分たちが正義であるなどと口にしていく。こんなことが許されるのか!!偽物の正義を野放しにしてもいいのか!!：先程は俺はヒーローではないと言ったが、俺は自身が正義であると信じている!!悪辣なる怪人も、正義の仮面を被った悪人共も、今日！俺が！俺たちが駆逐する!!」

男が拳を掲げ、宣言すると市民たちから歓声上がる。絶望から助け出されたことによる必然的な好印象と、見捨てられたという話の実否はともかく事実として助けに来なかったヒーロー協会への非難により、市民たちは男を無意識的に受け入れていた。

その男、シンラは倒れていた子供を優しく抱き起こし、周囲の傷ついていた市民たちを不思議な光を用いて怪我を治すと、安全な場所に連れて行くといい、市民たちを連れてとある場所へと歩き出した。

道中に他の都市へと赴き、軽い怪我こそあれど市民全員を無事に伴った同志たちと合流し、ヒーロー協会本部の真反対の位置に存在するシンラ達の造ったシェルターへと到着した。地下とも繋がっているそのシェルターは元々サイコスが用意していた怪人協会のアジト的空間で、現在はジーナス、ボフォイ、童帝の三人が手間暇かけて改造し、創り上げた強固な要塞となっている。その広大さは十数の都市の人口が集まったも尚余りあるほどで、ヒーロー協会本部と対立した位置にあるそれは、まるでシンラ達とヒーロー協会の対立を表しているかのようだ。

数時間後、シェルター内に入った市民達に、超能力により洗脳され、危険性を感じない人型の姿に変えられた怪人や下位ヒーロー達から

食事や各自休める仮の居住区が支給され、落ち着いた頃、シンラはサイコスと共にいた。

絢爛豪華という言葉がよく似合う地下にあるとは思えない高級ホテルのような一室で、ワインの入ったグラスを軽く合わせる。

「フフ、上手いこと民衆を取り込めたじゃない。ま、私が軽く暗示をかけてあげたおかげだけだね。でも、もつと強力な暗示をかけた方が楽だったんじゃない？」

「それだと意味がない。本当なら暗示なんて使いたくは無いか、弱く無意識的な語りかけでスムーズに事が運ぶからと、妥協したんだ」「ふーん」と早くも興味を無くしたサイコスはワインを傾ける。白い喉が嚥下し、軽く唇を舐める動作にシンラの性欲が反応する。数百、数千の生物を取り込んだシンラは意識の混濁こそ、狂気的な正義感で振じ伏せているが、外見が変わらなくても肉体の密度が莫大になった事で食事や睡眠などのエネルギー補給の欲求が高まり、同時に元から強かった性欲も常に爆発しそうなほどの情欲と疼きに変化している。数時間前、都市へと救助に向かう前にフブキやタツマキ達とやりまくったというのに、シンラの肉棒はズボンを突き破らんとするほど勃起しており、思わず零した熱い吐息がシンラに男性的な色香を纏わせる。

「あら、もしかして襲う気？」

それに気づいているサイコスが揶揄うように言う。態とらしくその豊満な胸を強調させ、シンラの顎を指先でくすぐった。

「いや、まさか。そんな酷いことしないさ。でも…」

ワイングラスを置いたシンラがゆつくりとサイコスに顔を近づける。

「サイコスが嫌じゃないなら、襲うかも」

敢えて簡単に避けられるスピードでキスを迫る。嫌ならどうぞ避けてみると言わんばかりの動作に、サイコスは最後まで動くことはなく、二人の唇は重なった。

「んっ…ふふ、すごいパンパンじゃない」

サイコスの手がシンラの股間に向かい、ズボンの上からガチガチに

硬くなっているそれを撫でる。

「っ…」

先っぽを指先でカリカリと引つ搔かれ、シンラは負けじとサイコス
のフブキに負けず劣らずの巨乳を揉みしだく。シンラがサイコス
のドレスのような衣服を一枚剥がすと、サイコスがシンラのズボンを下
ろし、キスを何度もしながらお互いの衣服を一枚ずつ外していく。

あつという間に、お互い全裸になり、シンラはサイコスの胸に、サ
イコスはシンラの肉棒に目がいく。

「ええ、でつか…」

急に余裕の無い表情に変わったサイコスが何か呟いたが、シンラは
気にせずサイコスを抱き寄せ、その口を啜った。吸引で舌を引き出
し、ぐちゅぐちゅと味わえば、今度はこちらから舌を突き出しサイコ
スの口内全体を舐め回す。

「んぷっ…んんん…ちゅ、う」

「ぶはあ…はあ…うーん、流石にきついよね」

シンラが怒張した逸物をサイコスの蜜壺の入り口へと当てて確か
めるように擦る。が、如何に女性にしては長身のサイコスといえど、
シンラの肉棒は余りにも凶悪で巨大すぎる。

何度も相手をしているフブキ達でもまだ失神したり、イキ狂うこと
のあるそれは、実は処女であるサイコスにはかなりきついものだっ
た。

「…ええ、わかってるわ。あれでしょ。な、舐めればいいんでしょ？」

「そうそう。俺もサイコスの舐めたいし、俺の上に乗ってくれる？」

少し的外れなサイコスの言葉を受け流し、シンラは椅子に座ってサ
イコスの上に乗るように指示する。サイコスの太ももをそれぞれ両
肩に乗せ、肉付きの良い尻を掴む。眼前数センチにサイコスの割れ目
があり、ちゅ、と唇を落とせば、ビクリとサイコスが反応する。

「ふふ、なんだ。可愛い反応するじゃないか」

「くっ…」

サイコスが意を決してシンラの肉棒に舌を伸ばす。チロ、と舌先が
触れ、シンラも同じようにサイコスの膣をペロペロと舐めたり、チュ

ウチュウと吸ったりし始める。

「うう…いぐつ…い…は、んんぷ…ちゅ、ぢゅるっ」

プルプルと身体を震わせる快樂を誤魔化すためか、サイコスは大口を開けてシンラの肉棒を咥え込み負けじと吸い付く。半分も咥えこめていないが、シンラに吸われる度にチンポを咥えながら声を漏らすサイコスの口の動きが心地良い刺激を与えてくる。

サイコスの口淫と涎ローションによるコーティングを楽しみながら、シンラはサイコスのマンコが己の剛直を受け入れるための準備を始める。

ベロベロ、チュウチュウとヒダと入り口を優しく舌で愛撫し、愛液を絞り出そうとマン肉に唇を合わせて啜り上げる。指で入り口を広げてやれば、サーモンピンクの綺麗な蜜壺がヒクヒクとしながら姿を見せた。シンラは舌なめずりすると、サイコスの尻に腕を回して、伸ばした舌を淫裂へと挿入させていった。

「んんんっ…い…」

ビクン！と身体を震わせたサイコスが口を離しかけるが、シンラはサイコスの頭を押さえて、口淫を続けさせる。

膣内を広げるように舌を回しながら、サイコスのマンコを開発していくシンラ。口が密着するほど舌を入れたままクリクリと膣壁を舐め回して甘酸っぱい愛液が多量に分泌されてきたのを感じたシンラは舌を抜き、少し朦朧としながらシンラのチンポをしゃぶっていたサイコスをしツクスナインの体勢から対面座位の体位に変え、そそり立つ肉棒をサイコスの淫裂に何度も擦り合わせる。

愛液やシンラとサイコスの唾液がヌツチャヌツチャと混ざり合い、いよいよ結合の準備が果たされていく。

「いぐよ」

つぷつ♡と亀頭の先が入り込む。それなりにクンニしたおかげでサイコスの蜜壺はシンラのチンポをなんとか受け入れ始めた。

「ぐつう…お…おお…」

が、ぶちぶちと処女膜を破り始めたところで、サイコスの未開の膣肉が拒むように硬く狭くなっているのをシンラは肉棒から感じとる。

「やっぱり奥の方はまだ硬いか…ゆっくり慣らしていくぞ…」

「づつ…いや、いい…！私はタツマキにも並ぶ超能力者…自己回復だつてできる…いいから、一気に来なさい…!!」

「…分かった。正直、俺も我慢の限界だったんだ。危なくなったら、俺の生命力をあげるから、心配せずに声を出していいから…ねっ!!」

ズリユウウツツ!!とシンラの肉棒が硬い膣内を押しつけてサイコスを子宮ごと貫いた。

「ア”ツツツ!!?ガツ…ハアア…!?”

海老反りになり、白目を剥いたサイコスの中は未開の女の地に荒々しく侵入してきた雄の象徴をきつく締め上げ、貫かれた子宮が口を開けて、さらに奥へと肉棒を招待した。

「ぐう…やば…もう出そう…」

我慢して押さえていた肉棒に対する途轍もない締め付けに、性豪であるシンラも絶頂しそうになるが、ぐつと堪えて、肉棒全体を包み込む快楽をまずは堪能する。

なんとか失神せずに耐えているサイコスが「フッー!フッー!」と息を荒げながら自身の体力を回復させている。サイコスの息が戻ってきたのを見計らってシンラも動き出す。

対面座位の体制で、サイコスの尻を掴み、肉棒が抜けるギリギリまで持ち上げる。そして、ゆっくりとまた下ろしていく。

「お”お”お”お”お”お”……♡!!」

ズルルルルル、ヂュプププ、ズロロロロロ、ブチュルル

何度も何度も往復していくうちにサイコスの中はシンラの形を覚えて、硬い膣肉も柔らかくなり、子宮口を叩く度に愛液がどんどん溢れていく。

「お”っほ…お”…♡…おお…♡…!?”

サイコスの声にも艶が出てきた。繋がっている女が嬌声を溢すこの感覚は男としての最上位の快感と言えるだろう。

ゾクゾクとした快楽が背筋を登る。射精感の津波が睾丸の中で荒れ狂い、シンラはスパートをかけていく。

「おぐう♡!?!おぎよお”お”っほお”お”お”お”っ♡♡!?!”

シンラが抱きしめた声の主、タツマキは文句を言いながらも、抵抗することはせずにシンラの抱擁を受け入れる。そしてシンラに抱きしめられたまま、サイコスを見て「ふふっ」と笑った。

「前はあんなに大人びた態度で人を見下してたつてのに、こんな無様を晒してるなんて、写真に撮っておきたいくらいね」

タツマキも似たようなものだったが、それは言わないでおこう。因みにその時のタツマキの写真はシンラは今でも大切に持っている。

「それで、ここにきたつてことは何かあったの？」

「フン。別に何も無いわ。ただ、あんたとこの女が一緒にいることが分かったからちよつと気になっただけよ」

「ふーん。まあ、いいや。…キスしていい？タツマキ」

「…一々聞かないで、好きにすればいいじゃない…答えなんて決まってるんだから…」

「ああ、ごめんごめん。クク、ほんとに可愛いなタツマキは」

「んちゆる…♡…ちゆう♡…♡♡」

一時間後、サイコスの隣にはサイコスと全く同じ体勢で気絶しているタツマキがいた。

第二十一話

怪人が大量発生し、多くの市民がZ市の地下に移動してから一週間。地下にある芳醇な金脈や、広大なスペースに造られた人工太陽によつて育てられている田畑や樹園、農場や地上と繋がるダムなど、もはや小さな国とも言える規模の施設が揃う地下の暮らしは地上でのものと遜色が無く、市民たちからの苦情の声などは一つも無かった。

シンラに加えて、タツマキやメタルナイトなどの有名な人物たちが、元の生活に戻れることの保証を宣言したことも大きく、ここでの暮らしの便利さに戻らなくても良いとすら考える人も居た。

そんな怪人たちに囲まれたまままでヒーロー協会本部が慌てふためいてる中、シンラはちようど地上に『進化の家』がある位置に建てた自室にて上裸のまま人差し指のみで逆立ちし、トレーニングをしていた。

「うん。馴染んできた。やっぱりリミッター外す為にはトレーニングの時間でも質でもなく、きつかけが必要だったんだな」

怪人や超人たちを吸収したことで、神の力を扱うための器である肉体が強化されたシンラはトレーニングによつて己の力に慣れることができた。最強の人間であるだろうサイタマも一般的の域を出ないトレーニングのみで生物のリミッターをこじ開けた。彼よりも高度なトレーニングを行った者は山ほどいるだろう。しかし、それでもサイタマが最強になったということはなにか別の要因であるきつかけがあつた筈だとシンラは考えた。

「それが精神的な物なのかは分からないけど、事実としてそうなっているんだから考えたつて無駄か」

そういえばサイコスは怪人は死に近い地獄を乗り越えれば爆発的に成長すると言っていた。フェニックス男も怪人の性質も合わさつた結果超絶な進化を遂げていた。もしそれが人間にも適応されるの

だとしたら死そのものを乗り越えた自分が驚異的な速度で成長していくことも強ち不自然ではない。

「あら。またトレーニング？ 貴方に勝てるような存在なんていないと思うけど？」

サイコスの言葉に曖昧に笑みを返したシンラにサイコスと共に来たリリーがタオルを持って駆け寄る。

「シンラ様っ。タオルですー！」

「ああ。ありがとうリリー。…汗臭いぞ」

「えへへ。いいんです。私シンラ様の匂い好きなので」

シンラに抱きついたリリーが流れる汗も気にせず唇を差し出す。身長差からシンラはリリーを片手で持ち上げて唇を重ねた。

チュ♡、と唇を合わせ、突き出した舌同士をレロレロと絡ませ合わせる。クチャクチャとお互いの唾液が循環し、交換し終えた液をゴクリと飲み込む。

「…いいかしら？」

呆れた風にサイコスが言い、シンラがピトリと寄り添っているリリーの頭を撫でながら和やかに頷く。

「ああ。…それで、何か報告か？」

「ええ。回復したS級ヒーローたちを含めて残ってるヒーローの殆どがこのシェルターの入り口付近に集まっているわ。どうやらヒーロー協会はよほど焦ってるみたいね」

その報告を聞いたシンラは外に配置してあるサイコスの肉人形に埋め込んだ目玉と視覚を共有し、外の景色を見る。

三人の弟子たちを引き連れたアトミック侍。怪我はまだ完治していないのか眼帯をして服の隙間からは包帯が見えている。並ぶように超合金クロビカリ、豚神、駆動騎士のS級が三人。他にも下位ヒーローを多く連れており人数を見るに彼らが主力だろう。

「いないS級はシルバーファングと閃光のフラッシュ、鬼サイボーグ…そしてキングとブラストか」

瞬間、視覚共有をしていた肉人形が弾け、無数の目玉になり、全ての街を見渡し始める。そして、残りの敵たちの姿を視界に収めた。番

犬マンもいないが、彼は既にこの戦いから外れているので除外する。シルバーファングはヒーロー狩りこと元弟子のガロウを追っているようだ。フラッシュは前回と同じく地下通路を進んでいる。鬼サイボーグことジェノスはやはりZ市の廃ビルの屋上にてハゲ頭の輝く最強のヒーローと共にいた。

パチリと目を開いたシンラの前に白衣を着た老人、メタルナイトとボフォイ博士とボロボロのジャージ姿の中年の男、ホームレス帝が現れる。

「GXの修理が終わったのでな。最後の掃除をするのだろうか？」

「助かるよボフォイ。君が偽の情報を与えてくれたお陰で楽に済みそうだ」

「礼と言うなら…駆動騎士は私に寄越してくれないか？多少壊れていても構わない」

「それぐらいなら全然いいさ」

「感謝する」

無表情のままどこか楽しげに去ったボフォイの横から傷一つないロボット『戦鬼神GX』がガシャンと現れ、命令を待つように膝跨いだ。

「ホームレス帝。君にも敵主力の処理を頼みたい」

「御意…！」

「うん。お願いね」

忠実な部下たちに雑事を任せたシンラは、飢えた狼のように地下シェルターに侵入した一人の青年の処理へと向かった。

シンラを見送ったホームレス帝が掌から光り輝く球体を出し、背後にいた者たちを照らす。巨大な口と歯のみを持つ生物、アメーバのように軟質な水の身体を持つ怪物、カブトムシを連想させるフォルムの超生物、同じく蚊をモチーフにしたような美しい女怪人、鳥をスタイリッシュにさせたような着ぐるみに身を包む変態、数メートルを超える巨体の最強の犬。

「行くぞ、我々の世界のために」

ホームレス帝も含めて全員が災害レベル『竜』に位置する怪物たち

が歩き出した。

ホームレス帝の引き連れた軍団がシエルターの入り口に集まったヒーローたちと接触した頃、ガロウは突然現れたシンラからの攻撃を必死に捌いていた。

シンラの身体から生やせる触手は自由自在に動かせ、遠隔起動も可能であり、ノーモーションで繰り出される鋼鉄も砕く無数の触手がガロウへと襲い掛かる。

360度全方位から向かってくる触手を流水のように動き、拳や手刀、足で迎撃するガロウ。

「チイツ!!」

並のヒーローなら数秒でミンチになるであろう猛攻を捌き、鬼気迫る表情の中には逆境を楽しんでいる節も垣間見え、現在進行形で強くなっているガロウは間違いなく天才であり強者の部類に入る存在だろう。

このまま成長していけばどんなヒーローをも叩き潰す最強の悪役になっていたかもしれない。

「…ふあ。…うんうん。もういいかな」

「ア”ア!?余裕ぶっこきやがって…!その二枚目ヅラ、三枚におろしてやるよっ!」

「可愛い弟子がいるからね。武道家の動き、一応見てみたかっただけだよ」

しかし、シンラはそんなこと認めない。どんな過去があろうとどんな理由があろうと、自身に歯向かう悪は根絶やしにすると決めている。

「っ!?ガッ…!!」

シンラが態とワンパターンにしていた触手の動作を変え、ガロウの不意を突き腹に重い一撃を食らわせる。

「飽く迄も人間相手を前提とした武術じややりづらいかな?」

怯んだガロウに追撃が迫る。ガロウが繰り出す武器は両手両足合わせて4本。しかし向かってくる触手は数百本。ガロウはなんとか急所のみをガードするが、そもそも逃げ道がなく、このままでは戮り殺しにされるだけである。

「チイ…:ツッ!!!グアア”ア”ツ!!…:目がツ、!」

一か八かの強行突破を考えた瞬間、眼前を通った触手の側面から鋭く小さな触手が飛び出し、ガロウの眼球に突き刺さった。激痛と共に片目が闇に包まれ、死角となった左側から頬を殴り飛ばされ、壁へと激突する。

「グ…:ガアア…:!!」

「もう休め。せめて来世での幸せを祈るよ」

触手に全ての手足を拘束され、シンラがガロウの心臓に指を向ける。神の力と超能力、怪人の特殊能力を合わせた殺人光線だ。

ピピピピ、と光が収束し、トドメの一撃が放たれるその瞬間。

『流水岩碎拳』

『旋風鉄斬拳』

二つの影がシンラの触手を砕き、或いは切り裂き、礫になっていたガロウを救い出した。

「ああ。見てないと思ったら、悪党になっても弟子は可愛いんだね。シルバーファング」

見た目は平凡な老人だが、その覇気は衰えを知らない獣のそれ。S級ヒーローであるシルバーファングがそこに立っていた。隣には似た雰囲気のある老人が立っている。同様の気迫からこちらもシルバーファングと同等の強さだろうことが分かる。

「ジ、ジジ…:イ…:!!」

「久しぶりじやのう。ガロウ：説教は後じゃ。そこで寝ておけ」

「こいつが怪人か？変なもん生えてるが、見た目は人間だな」

「油断すんなよお兄ちゃん。前見た時よりとんでもねー圧を感じる」

シルバーフアングことバングとその実兄のボンブが構えを取り、シンラへと相對する。武道家の頂点であると言っても過言ではない二人がシンラに殴りかかるのと、地面を砕き飛び出した巨大ムカデがガロウを連れ去るのは同時のことだった。

「ガロウッ！」

「アホッ、余所見すんなっ！」

一瞬身体を止めてしまったバングが触手に殴り飛ばされ、廃ビルへと突っ込む。ガロウが連れ去られたこともバングが吹き飛ばされたことにも気を取られずにシンラから目を離さないボンブは流石だろう。

「ずりゃああ!!」

ガロウよりも練度は確実に上であろう武術がシンラへと降り注ぐ。かまいたちのような連撃をスイスイ避けるシンラに瓦礫から飛び出したバングの猛攻が追加されるが、涼しげな顔でそれら全てを受け流す。

「…まじかよ。自信無くすぜ…」

時間にして数秒だが、達人にとってそれは数時間に匹敵する。バングとボンブは自身らの猛攻を軽くないとしたシンラに気圧される。

「ああ…ダメだな。今のことに集中しないと…苦戦しようのない全能感がこんなにも心を冷めさせるなんて…彼もこんな気持ちだったのか…」

シンラはリミッターを壊し最強のヒーローと同じ土俵に立ったことでサイタマの苦悩を真に理解した。シンラのように狂氣的なまでに世界平和を望んでいなければ戦いの全てがつまらなく感じてしまわうだろう。

「なんだ？考え事とは余裕じゃねえの」

「うん。悪かった…早く終わらせるために…本気でいこう」

力の差はあれど、技の差は逆だ。シンラは触手を体内に戻すと軽く

構えを取り、バングの懐へと飛び込んだ。

「ぬっ！甘いっ!!」

「気は進まねえが挟み込むぞっ!!」

バングとボンブに挟み込まれる形になったシンラが、その体に次々と打撃を受ける。しかし全く堪えた様子もなく二人の武道家の動きを観察し、自らの型へと当てはめていく。前世でも格闘技自体は会得していたシンラだが、この世界からすればそれはただのお遊びレベルだった。

ただ、今ならばこの世界のトップレベルの武術すらお遊びになるほどの最強の武術を創造できる土台をシンラはすでに持っている。数多の生命を取り込み、精神の破壊と再生を繰り返した今のシンラならば数度打ち合えばどんな達人の拳法すらもコピーして更に上の武術にまで創り変えることができるのだ。

（何ということじゃー！ワシらの武術を模倣…否！取り込んでおる!!）
危険すぎるが故に封印した『爆心解放拳』を使っても尚、シンラには通用しなかった。

「おおお…これは凄いなあ。常に最良の動きが脳内で更新されていく。きつと彼も本気で武術を学ぼうと思えばどんな武術でも覚えられるんだろうね」

「ゼエ…い…ゼエ…い…ぐっ！バング！」

脂汗を滲ませ、息を切らしたバングとボンブが同時に退がり、二人の武術を合わせた奥義を繰り出そうとする…

『旋風…』

『流水…』

『交牙っ…『交牙竜殺拳』…っ!?!』

直前、シンラが神がかった予測と模倣で見たこともないはずの二人の奥義を先出した。より洗練され威力も桁違いのそれを見た二人の達人はそれを受ければ必死であることを直感したが、回避は間に合わない。

「…へえ」

死を覚悟したバングとボンブは果たして生き残った。避けた訳で

も耐えた訳でもなく、第三者の介入により、シンラの放った攻撃がその場から消滅したからである。

「ここに来るんだ。てつきり逃げ出したものかと思ってたよ」

「…この気配。ヤツに魅入られたのだな。今からでも遅くない。その力を手放せ」

「俺の何を知っているんだか。さっきのはワープゲートってやつかな？驚いたけど一度見たらもう理解したよ」

シンラが手をかざして亜空間ゲートを創り出す。拳法だけでは無く、特殊な能力すら今のシンラでは簡単にコピーが可能となっている。

『いざという時に誰かが助けしてくれると思っではいけない』…だったか？」

「っ…その言葉は…」

「俺の可愛い仲間が教えてくれたんだけど…その言葉が本当ならば何故ヒーローなんてやってるんだ？矛盾してないかい？」

「…大きすぎる力を持つ者の心得だ。強大な力を持つものにはそれ相応の責任が伴う」

「傲慢だなあ。流石は偽物トップヒーロー。強者のことも弱者のことも何も考えていない。自分の都合しか見ていないんだな」

シンラの前に立つ男がワープゲートを生み出してバングとポンプを避難させるが、シンラは興味もないように一瞥もせず目の前の男を睨みつける。アーマードスーツにマント、サングラスをした男が両拳を合わせ、シンラが上体を弓のように引き絞り青筋の走った拳を目の前の男へと突き出した。

「人々の支えになれない偶像は俺の世界には必要ない！責任を果たすというのなら…その身をもって償え！ブラスト!!」

第二十二話

S級1位ヒーロー。ブラスト。

シンラに力を授けた存在、『神』と20年以上も戦いを続けており、閃光のフラッシュを軽く上回るスピードや次元を操る力などを持つS級1位にふさわしい実力の持ち主だ。

「ぐっ…ぐああああ!!」

そんな彼が顔を歪ませ、逃げることも出来ずに踏みつけられている光景などヒーロー協会は信じないだろう。そのままシンラに軽く蹴り飛ばされるが、ブラストはなんとか体勢を整える。

「くっ…デイメンシヨン・キャノン次 元 砲!!!」

両拳を合わせたブラストが歪んだ空間を大砲のようにシンラへと飛ばす。それに対してシンラもまた、同じ動作で技を返した。

「便利な技だね。もう効かないけどさ!」アンチデイメンシヨン・キャノン「反 次 元 砲!!!」

鏡合わせのように全く同じ形の反転した時空の歪み同士がぶつかり、相殺される。

「ぬう…!」

「ワープゲートって便利だね。これだけは感謝するよ」
「があっ!」

亜空間ゲートを創造し、ブラストの背後へと転移したシンラがデコピンでブラストを吹き飛ばす。

「君のことは好きじゃないけど、決して悪ではない。今からでも遅くはないよ。どう?俺の仲間にならない?」

「ハア、ハア…」

荒い息を吐き、汗を流すブラストとは対照的にシンラはたった今シャワーでも浴びてきたかのような余裕の状態だ。ブラストは他のS級ヒーローや自身の協力者が助太刀に来ることを信じて時間稼ぎのために口を開く。

「…ならば一つ聞かせろ。お前の思い描く正義とはなんだ?」

ブラストの問いにシンラはよくぞ聞いてくれたとばかりに答えを返す。

「俺たちが新しい正義の象徴となり、俺が決めたルールに従い曖昧な善悪の基準を明確にする！善人を尊び、悪人を絶対に許さない！それが俺の描く本当の正義だ！」

「傲慢が過ぎるっ！そのような世界が成り立つはずがない！」

「いいや。成り立つ。全ての人間を常に徹底的に監視し、心を読み、悪事を犯した者、犯そうとした者を許さず正義を執行する。善良なる一般市民にとってこれほど安心できる世界があるか？」

「法を犯した者は全て殺すとも言うつもりか？」

「例えば自分の大切な人を殺した殺人者がいるとしよう。捕まったそいつはこう言う。「反省している。これからは真つ当に生きたい」と。…どう思う？」

「っ……」

「許せるはずがない！他者の未来を奪った者の未来を考える必要などない！」

「だが、悪事が全て同じ状況で起きるなどあり得ない！正当防衛！事故…っ…復讐…お前の考えは一つの面しか見れていない！」

「それらを未然に防ぐ為に正義による徹底的監視が必要なんだ!!」

瞬間、地面を突き破り無数の触手がブラストへと襲いかかる。ワープゲートで回避しようとするが、シンラも同じくワープゲートを生み出してブラストのゲートを相殺し打ち消していく。

「くっ！『重力拳』っ!!」
グラビティナックル

ワープによる回避を諦め、なんとか触手による乱打を耐えるブラストだったが、次第に被弾を許していく。たとえA級上位のヒーローであっても一撃で死亡するであろう威力の連打を耐えていることは流石であったが、神の力だけでなく、最強の男と同じくリミッターをこじ開けた今のシンラに勝てる道理は無かった。

腕を引き絞ったシンラがブラストの上へと転移し、握りしめた拳に力を込める。

「必殺〃神シリーズ〃」

「神殴り」

「!!!」

シンラの拳がブラストの顔面へと突き刺さり、空気を割く衝撃波が音を置き去りにして響き渡った。

一発、ただ本気で殴っただけ。それだけでS級1位のヒーローは倒された。意識を闇に沈ませながら吹き飛ぶブラストはそのまま待ち構えていたシンラの触手へと激突し、ワープゲートを使う暇もなく肉の割れ目へと飲み込まれていった。

「ふう…S級1位と言ってもこんなものか。やっぱり彼じゃないと戦いにすらならないなあ」

片目を閉じたシンラは視覚を共有させているモスキート娘の使役している蚊からガロウを啜えている大怪蟲ムカデ仙人を追うシルバーファングとその兄を見つける。

今からそちらに転移して片付けてもいいが、せっかくやる気になってくれている可愛い部下たちに任せようとムカデ仙人に部下たちと敵ヒーロー主力が戦闘をしているシエルター入り口に向かうようにテレパシーで命令し、シンラはZ市地下へと戻った。

地下の住まいにてフブキは転移してきたシンラの気配に気づくと、すぐさま満面の笑みで出迎えた。

「あら♡おかえりなさい。…?…今の超能力じゃないわよね。どうやったの?」

「ああ。ちよつとね。新しく覚えたんだ。また詳しく教えてあげる」
「ふーん。…ところで、上の方はどうなってるの？私とお姉ちゃんも
出た方が良かったんじゃないかしら？」

「ふふ。ちゃんと出番はあるから心配するな。フブキとタツマキ、あ
とサイコスの超能力はとても頼りになるからね」

シンラの言葉に満足したフブキはそのまま距離を詰めて愛する男
と唇を重ねた。シンラの首に両腕を回し、黒いドレスを押し上げる巨
乳を擦り付けながら舌を伸ばし濃厚なキスを始める。

乳首と股間部分の布地を切り取られたメイド服姿で掃除や皿洗い
をしているのはアサミとノリアだ。フブキはクスクスと笑って超能
力で生み出した光のムチで雑務をこなすメイド服姿の2人の美女の
尻を叩いた。

「ふぎいっ！」

「ほぐうっ！」

ぶるんと尻が揺れて悲鳴を漏らすアサミとノリアを見てシンラは
己の股間に熱が集中するのを感じる。仕事を与えるためにシンラの
趣味でメイドとされたアサミとノリアだが、常にビクビクと怯えてお
り、なんとも虐めがいのある女になっていた。

弩Sを調教したことでシンラも加虐趣味が生まれ、元々部下を多く
持つことに優越感を得ていたフブキも内に潜むドS心を芽生えさせ
ていた。

「ふふふ♡…私たちの愛し合う姿を見て興奮したのかしら？ご褒美が
欲しかったらちゃんとお仕事しなさい！」

「は、はいいい…！」

フブキに尻を叩かれた2人は必死に手を動かすが、その目線は反り
勃つシンラの肉槍に固定されており、キスを再開したフブキから鳴る
軟質な水音と甘い息遣いがアサミとノリアの淫らな心を刺激する。

「ハア♡ハア♡ハア♡」

「ひぐう…♡…ふ、うう…」

無意識に垂れる涎や愛液を延々と拭き取る2人には目もくれず、唇
を離れたフブキはそのままシンラの口元から首筋、腹筋にかけて口付

出す。

「はあ…フブキは本当に良い女だな。いつも俺の心を癒してくれる」
シンラがフブキの胸に顔を埋めると、フブキは精液を鼻から垂らしていたとは思えない聖母のような優しい表情でシンラの頭を撫で始める。

「あ”んっ♡!!」

シンラはフブキの乳首を啜えて、睨り上げた。何度も揉まれた乳房はシンラの手でも掴みきれない程に大きくなり、何度も弄られた乳輪と乳首も肥大化したフブキの胸はどんな男でも劣情を抱くような魅惑のものになっていた。

コリコリと硬くなっている乳首を口内でコロコロと転がし、乳輪ごと激しく吸い上げる。

ズチュルルルツ♡ヂュウウツ♡

「お”お”お”っ♡シ、シンラツ♡吸って♡もっとな吸って♡」

「ぶはっ…ああ。好きなだけ吸わせてもらおうぞ」

「良いわよっ♡私の体は全て貴方のものなんだから♡どこでも好きにして♡」

シンラはフブキの乳首を片方ずつ吸い、時に同時にむしゃぶりつき、微かな甘い女の味を味わい尽くす。

激しく敏感な乳首を吸い尽くされるフブキは熱い吐息を漏らし、腰を浮かび上がらせる。胸の先端からの刺激は体全体に伝わり、膣穴を湿らせて肉棒を迎え入れる準備を整えていく。

「もう準備万端だな。こっちとしては嬉しいけど」

ねっとりとした愛液を分泌させるフブキの膣穴を指でなぞったシンラはフブキの唇を奪い、指でクチュクチュと蜜壺をほぐしにかかった。

「あんっ♡…ん”ん…♡!」

軽い愛撫でも十分すぎるほどにとろけたフブキの膣へとシンラが肉棒を合わせて挿入していく。

「あ”あ”あ”お”お”お”お”お”お…♡♡♡!!!」

フブキは身体を貫く快感にシーツを握りしめて野太い声をあげる。

ると精液塗れのマンコに肉棒を侵入させ蓋をすると、そのアへ顔のままのフブキの唇を吸った。

唇を吸い上げられ、フブキの美貌が下品に歪む。顔全体が重なり合うほどまで密着した濃厚なキスが始まり、淫らな水音が部屋に響き渡る。

次に二人の体が離れるのはそれから3時間が経ってからだった。

シエルター入り口付近での怪人とヒーローによる戦いは佳境に入っていた。

そしてその軍配は怪人側に傾いていた。立っているヒーローはS級であるアトミック侍と駆動騎士、途中乱入してきた閃光のフラッシュの3人とアトミック侍の一番弟子であるA級2位ヒーローのアイアンだけであつた。

否、立っているヒーローは他にもいる。ただの数的有利を取るために連れてこられたような下位ヒーローたちだ。しかし、彼らこそがアトミック侍たちを苦しめる要因となっていた。

「フハハハハッ！どうしたヒーローよ！貴様らが本当の英雄であるならばこの程度の障害、乗り越えられるはずだろう!？」

スタイリッシュ着ぐるみ怪人、輪廻転生フェニックス男が高らかに笑う。戦闘が始まって瞬殺された下位ヒーローたちはフェニックス男の能力によつて蘇生され、彼の命令によつてヒーローたちに立ち塞がっていた。

「あゝ ああつ…身体が、勝手に…!」

「た、助けてえ……！」

さらに夕子の悪いことに操られている者にも自我は残されているのか、悲痛な顔で助けを求めてきて、気絶させる程度に吹き飛ばしたとしても痛みで悲鳴をあげ、また無理やり復活させられる。

「クソツ……！」

すぐさま躊躇無く操られた下位ヒーローたちを切り捨てた駆動騎士と閃光のフラツシユは流石だろうが、死んだとしても瞬時に復活させられる厄介さに思わず悪態をついた。

「ふん、ヒーローであることも忘れ助けを求めるか。やはり贖物。少しは期待したが、作戦もないただの突撃、興醒めだ」

「ワオフ……グルルル……！」

そしてさらに厄介なのが後方にて、光線を発射してくるホームレス帝と育ちすぎたポチだ。肉壁となっていて下位ヒーローごと吹き飛ばす乱射にヒーローたちは徐々に残り少ない体力を削られていく。

隙がなく耐えることで精一杯。唯一超スピードで接近できそうな閃光のフラツシユも彼を追いかけてきた4人の忍者に付き纏われ、自慢のスピードを出せなくなっている。

「あれー？なによ、まだ終わってなかったの？」

無慈悲に神通力による光球を撃ち出していたホームレス帝の背後から、モスキート娘が話しかけた。

「そちらは終わったのか？阿修羅カブトの姿が見えないが……」

「ボコボコにされて動けなかったみたいだから置いてきたわ。ああ、安心して。ちやーんと敵はヤッておいたから♡」

「ならば良い」

「途中でハグキちゃんが出てくれなかったらやばかったかも。でもあの子の溶解液で急にヘナチョコになったのは笑ったわ」

ケラケラと楽しそうに笑うモスキート娘から視線を前に戻したホームレス帝はより一層力を込めて光球を放つ。モスキート娘が戻ってきてハグキもいるということはS級ヒーロー『超合金クロビカリ』と『豚神』の2人は問題なく処理できたということだ。

ならばこちらも手を拱いている時間は無い。

「モスキート娘、合図を送れ」

「はいはい」

ホームレス帝の言葉を受けたモスキート娘が数匹の蚊を放つ。それは割れた地面の亀裂から地下へと入り、その存在に命令を伝えた。

「アイツ！踏ん張れっ！勝機は必ず生まれるっ！」

「はい！」

群がってくる下位ヒーローたちを峰打ちで吹き飛ばしながら必死に殺人光線を捌くアトミック侍とアイアンをS級ヒーロー駆動騎士は横目に見て思考を動かす。

(当てが外れたな…)

駆動騎士は珍しく後悔をしていた。予想外な敵の出現により発生した自身の目的の道を阻む障害の排除。そのために単独で挑むよりは可能性がまだ高そうな残ったS級を主力にした連合軍による一点突破に参加したが、結果としては殆どが倒され、自身も今まさに敗北しようとしている。

(アトミック侍と閃光のフラッシュには悪いが、ここは逃走させてもらう…:…:っ!?)

他のS級ヒーローを囿に一人逃げる算段をつけ始めた駆動騎士の足元が突然崩れ、地面から現れた影が駆動騎士に抱きつくように纏わりついた。

「ロック完了。コード接続。エネルギー吸収開始」

ガチッ、と駆動騎士よりもさらに機械的なフォルムのロボット、戦機神GXが錠のように駆動騎士と自らの体を固定させ、伸ばしたコードを駆動騎士に突き刺し、エネルギードレインを開始する。

「駆動騎士っ…ッ!?!」

「師匠！」

一瞬、気を取られたアトミック侍の足を地面を突き破り生え出た太く黒い腕が掴む。

「なんだよ。もう死にかけじゃねえか」

さらに地面が割れ、腕の主の全体が現れる。まるで全身タイツを着ているように見える真っ黒な身体に頭頂部に尻尾のような突起のあつる怪人。まるで幼児が描いた悪役の下つ端怪人のような見た目だが、そのプレッシャーは少なくともアトミック侍が見てきた怪人の中でも余裕でトツプクラスだった。

「どうする？…このまま潰すか？引き裂くか？それとも締め殺されるか？…死に方ぐらいなら選ばせてやつてもいいぜえ？」

『災害レベル：竜 〃黒い精子〃』

まずいつ！イアイアンは焦りながらも正確に新たに現れた怪人、黒い精子に向かって剣を振り下ろす。隻腕でありながらも力のこもつた一撃は黒い精子の腕を切り裂き、アトミック侍の救出に成功する…かに思えた。

「残念でした」

切り落とされはずの腕は再び手首から再生し、そのままアトミック侍を殴り飛ばす。地面に落ちる元の手は小さいサイズの黒い精子へと変化してイアイアンの首に巻きつき、そのまま締め落とした。

「お見事お見事」

「うるせえ鳥頭」

フェニックス男がパチパチと拍手して、安っぽい賞賛をしてきたことに黒い精子は苛つくが、無視してアトミック侍にとどめを刺すために吹き飛ばした方向を見る。

「あん？」

黒い精子が何かに気づく。全く本気の一撃ではなかったため、アトミック侍が立ち上がっていても不思議ではなかったが、そうではない。

「これまたこっぴどくやられたのおカミカゼよ」

「二チリン……！」

倒れかけのアトミック侍を支える見知らぬ集団がいた。その集団に黒い精子は見覚えはなく、死にかけの馬鹿に死に損ないのジジイたち追加された程度の認識しかない。

「あれは…」

黒い精子と違い、真面目なホームレス帝は覚えていた。

『剣聖会』。流派の垣根を超えた超人的な剣士の集団。確か少し前に怪人化することを求めてやってきた人間の中にそのメンバーの一人がいた為に覚えていた。まあ、その男は怪人化には成功したが、結局言うことも聞かないただの小悪党だったため、シンラの修行用サンドバッグの一つとなったが。

「なるほど。アトミック侍の助太刀に来たか。確かに弱くはなさそうだが」

ホームレス帝はチラリと横を見る。そこにいるのは傷一つ無いニヤニヤと笑うフェニックス男と退屈そうに蠢くエビル天然水という戦力。黒い精子も今すぐ暴れたいと言わんばかりに無数の細胞をを蜂起させ、遠方では4人の忍者が閃光のフラッシュを追いつめていた。

そして地下には先ほどサイコスから念話で伝えられたムカデ仙人という特大の伏兵。

「我々が負ける要素は無い」

油断はしないが余裕の表情を浮かべるホームレス帝の隣で、モスキート娘は『剣聖会』をじっと見つめていた。男の師範や弟子の剣士には目もくれない視線の先には、派手な踊り子のような衣装を身に纏った褐色の美女が1人。

「フフフ…♡…おじさんばかりでつまんなかったけど、良いのがあるじゃない♡」

モスキート娘は長い舌で唇を舐め、その顔を淫靡に歪めた。